
鬼灯の実

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼灯の実

【Nコード】

N4217M

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

怪談話。それが願いを叶える、や恋に結び付けられることは多い。私が知ったのはそれが”本物”であるということ。それはカナちゃんのおかげ。——世界が変わった。ねえカナちゃん。あなた、何をそんなに叶えたかったの？ねえカナちゃん。あなた、本当は私のこと嫌いだったんじゃないの？平穩なんて、そんな偽りに身を置くこともう出来ない。全てが敵だった。

友人と平穩の喪失

“ねえ 知ってる？あの話。三人目の被害者、出たんですって！”
“学校の裏にある鬼灯の木、実に自己中な願いをすると呪われるって？”

“願いたい事叶えてくれるんでしょ？代償が入院なんて割に合わないけど！”

“えーでも、死ぬ前に一度くらい……”

楽しそうな声音で交わされる会話。こつそりとした声音で言われているが、皆が静聴するため大きく聞こえる。人々の口にする都市伝説。最近まではただの言い伝えでしかなかったのに今では誰もが知っている。

幾度も其処彼処で交わされる会話に私は怯える。聞きたくなくて、耳を押さえそうになる。頭を抱え込んで包まってしまいたい。それでもそうしないのは、偏に「知った」ことを隠すため。あの日の出来事が脳内を駆け巡る。あの日の会話が、蘇る。

『ねえ、本気なの？カナちゃん。もし本当に叶っちゃったら……』

止めようとする私に強い視線を向けて言い放つ彼女。

『こんな機会、見逃せない。私は、何を引き換えにしても夢を叶えたい』

強い意志で意見を跳ね返す彼女に私は力なく手を握むことしかできず、付き添うことしかできずに、知ってしまったのだ、現実を。

怖い。思い出したくないのに、人々の声はあの日の情景を彩色にして私を責め立てる。あの日から、人が怖くなってしまった。狂気を傍に置くような精神状態。もし、この人達の中に、彼女以外の人形、あの木によって入れ替えられた偽物がいたら……。突然に牙を向いたならっ！！恐怖が身体を凍らせる。

《怖い怖い怖い怖い……「少し時間いいか？」》

クラス内で交わされる恐ろしい話から逃げ出そうとして、もはや学校の何処にも逃げる場所がないと思い至り、再び頭を抱えるように机で身を小さくした時だった。この騒音の中で確かに自分が問われたことを感じ、視線を巡らす。

大きな声でなかったから人々が注意を向けることはない。こちらに視線を向ける唯一の人が呼んだのだとわかった。しかし理由が思い浮かばなかった。己を呼ぶ人物は教育実習生で、授業以外の関わりを持たない。私自身の存在は他人から知覚されるに乏しく、言ってしまうえば印象が薄い。親しい友人も、高校に入って知り合った彼女、カナちゃんだけだったのだ。

だから、警戒した。遂に来たのだ、と。あの日、私は見てしまったから。

身体が小刻みに揺れる。血の気が引いた。嫌な汗をかく。

それでも近づく。蛇のような視線が逆らうことを許さず自分に纏わっているのだから。

教育実習生に連れられたのは保健室だった。視線で入れと促される。普段は保健教員が常駐している。しかし安心は出来ない。二人には共通点がある。彼らは1週間前、あの日の翌日から来た者。

やはり、アレと関わりがある。私をどうしようとしている？そんな

の――

「いつまでそうしているつもり？」

ああ……。思考は前触れなく開かれた扉によって崩された。

保健教員の赤い唇が目について、綺麗な微笑に頭の中が真っ白になった。

「つまり私に囚になれ、と？」

そう、と頷く彼女に胸がざわめく。

最初の緊張感はない。彼らの身が一応の証明をされたからだが、裏がある。話していないことがあるだろう。しかし、私に知る権利は

ない。仮に知らないことで危険が増えようと、彼らは目的達成のため、にどれだけの犠牲を払おうと構わないからだ。

「無事を祈っているわ」

言葉を切つて縁の無いように見える二人組は出て行く。ここの現在の主であることも気にせずに。

私は夜の道を歩いていた。あの場所、噂の実のなる木のある校舎裏、鬼灯の木。

あの木には近づかない、関わりたくない、と心の底から思っていた。私は、彼女を止められなかった。その後悔が、私の足を進める。

恐怖は胸に巢食っている。それでも、私は魅了されたようにそこへ向かい、足は操られているように止まることを知らない。

そう。あの日も同じく二人でこの道を歩いた。違うのは、隣に彼女がいず、意思を持つてあの場所に出向いていること。

あの日。鬼灯の木になる実、中でも一番小さな実には彼女は夢を語った。ソレに向かい願いを、祈りを飛ばした。

私は鬼灯の木が見えた途端に歩を止めた。恐怖で踏み出せず、腕を振り払われても気にせずに立ち竦んだ。何故、見えていないのだろう。

鬼灯の木は暗いにも関わらず、はつきりと全体が見え、実が自ら発光しているようだった。透けて見えた実の中には、人が、入っていた。そう、実の被害者として名を連ねていた人たちの人数分。

異常な光景。でも彼女はまるで見えていない。彼女は変わった。

先の意気込みなど無かったように穏やかに笑い、引き返した。一人置いていかれるなんて、冗談じゃない。その時は自分だけで、彼女のこともまで見ていなかった。だから、彼女の変わりように戸惑い驚くだけだったのだ。彼女が、壊れるまで。

彼女が、長年の夢を叶えた瞬間、彼女は堕ちた。それからよくわからない。ただ、意識の無くなった彼女は入院し、次の日には学校

で話題になった。今日までもう一人、犠牲者が出た。事態はそれしか変わらなかった。何をしたらいいのかわからなかった。私は何も出来ずに怯えていた。

視界に入る鬼灯の木。実はあの時の様に人に見えるということはない。カナちゃんにもこう見えていたんだと実感した。言葉を発そうと、口を開く、

「ぎゃあああああああああああああ」

木は奇声を放ち、巨体を揺らして苦しみもぐ。木が、真二つに刻まれていた。

咄嗟に振り向けば彼らがいて、次の瞬間には彼女の首は飛んだ。唇についた赤いルージユよりも鮮烈な色合いが視界を覆う。私は呆然と木を見ていた。

実は潰れ、カナちゃんも、潰れていた。彼は絶命した彼女を気にするでもなく連絡を取っていた。その様子は冷静で、私も何も感じられなかった。

私は時間も気にせずに彼女の病室に行った。どうやって来たかも、どうなっているのかも、わからなかったけれど、彼女の病室の扉を開けた。

彼女は窓を開けて月を見ていた。意識不明の昏睡状態だったのに、あの木の影響かしら。頭のどこかではんやりと思った。

「カナちゃん」

呼びかければ彼女は以前のように微笑み、顔を崩した。

「次はおまえだあああああああ！！！！」

濁った眼で狂ったように叫んだ彼女はその場で崩れ落ちた。白く濁った目が空虚にこちらを見ている。口は力を失ってだらりと開いている。手も足も軟体動物のようにグニヤリと曲がっている。

もう、心臓が止まっていることはわかっていた。だって、彼女と眼を合わせたときに感じた。自分以外の意識の存在を。私の意識は途

切れた。

名もなきもの。(前書き)

前回のものとは雰囲気ガラッと変わりました。

ちよいG Lっぽいかもしれません。

基が短編一話なんですけど、連載してみようかな、と無理やりにしたら、こんななってしまうた。

名もなきもの。

未だざわざわと話し声の止まないホームルームはこの後が帰宅となる、午前の時間帯。

平日に平常時間で授業が行われない理由。それは先ほども語られた、一人のクラスメイトに関する訃報。教室にいないのはその人物と関係者となってしまった一人のこれまたクラスメイトだった。――ガラッ。扉が開く。

教師が入り、少女が入った。生徒の間には漣のように沈黙が広がる。教師に促されて席に着く少女。

「大丈夫？スズっち。」

周囲の興味津々な視線から開放されてやっと席に座ることの出来た少女。彼女を気遣うように声を掛けてきたのは隣の席の志筑^{しつき}だ。

「うん……ありがとう、志筑さん。」

「良いって。あたしら友だちでしょ！」

元気が売りの女の子である。相談をすれば親身に考えてくれるし、ノリが良く女子から信頼されるタイプの人間。ただこの時ばかりは逆効果になっていた。

「……ごめん。スズっちが大変な時、あたし冷たかったよね。」
一年間以上同じ顔ぶれのクラスメイト。けれどその間ずっと珠洲はただ一人の人物としか仲がよくなかった。

「ううん。そんなんじゃないの。ただ、カナちゃんのこと、思い出しちゃって……。」

皆が迂遠していた。嫌われていたわけではないのだがそれほど二人の間の空気が濃密で、また主導を握る形でいた加奈の存在は強かった。

親友というよりも独占に近かった、と感じるのは志筑がこの少女に特別気を向けているからかもしれない。

「あたしと友だちになってくれる？」

「もうなってるよ。」

影を纏いながらも笑顔を向けてくる彼女に胸が痛くなる。でも加奈に遠慮することなんてない。今度は私が、この美しい少女と親友でいる。

「じゃあ早速親交深めにデートでもします？お姫。」

でへへ。という感じの誘いにクスクス笑い出す。

（私が笑わせてるんだ。そしてこれからも、私が笑わせる。）

「何処行きましょっか！」

「志筑さんの好きなところで良いよ。」

私、遊んだことないから。と言つて来る珠洲。

胸が熱くなる。加奈はそんなにも独占していた。そう思うのと同じに達成感も湧いてくる。

一番最初に遊びに行くのが自分だということに満足がいく。

「志筑い。あたしらも一緒にいいー？」

「私も。大河さんと話してみたかったのよ。」

いつもつるんでる二人が来る。友香と詠子だ。が、素気無く断る。

「いやーよ。二人がいると珠洲が遠慮しちゃうじゃない。」

「私なら大丈夫。」

「珠洲が言つてもダメ。今日は二人だけなの。初遊びの記念日なんだから。」

「えー記念日なら逆に騒ごうよー！」

「友香、今日はダメみたい。また和華の頑固が始まった。」

「それと。これからは志筑じゃなくて和華って呼んでね。」

「あらあらお熱いこと。」

そうしてその日はボーリング初心者のティーチャーになり、カラオケでは可憐な歌姫のファンになった。充実し、楽しい日だった。

次の日は加奈のことで休校になったために一日をこれまた連れまわして遊んだ。服屋で着せ替え、アクセを選び、化粧を互いに教えあったし、プリクラも取りまくった。

加奈が病院で自殺した。そのことも第一発見者として珠洲が疑われ

ていることも何も、関係なかった。私は私の中の空洞を満たすのに必死で、欲望のままに動いていた。

まるで知らない自分になったように、それまでの行動とは何もかも違っていた。それほどの執着を珠洲に覚え、そして疑問も思い浮かばないほどに夢中だった。

「ねえ、和華。あんた気づいてる？自分の行動。」

試験管をゆっくりと掻き混ぜる作業をしていた和華に友香が話しかける。

「ちよつと、今授業中。実験中よ、話してると知らないからね。」

余所見をする二人に視線も外さず注意を投げかけたのは詠子。その対岸で実験に真剣で話が聞こえてない様子の珠洲。この四人で実験のグループを組んでいる。二人の話を聞いているものは他にいない。

「何よ。行動つて。」

この試験管はもう反応が出ている。中身を取り出してから水を底に当てて温度を下げる。

「……加奈に似てきたんじゃない？」

「何ソレ。」

私に加奈を嫌いだっただことを知っているくせに、ということを含ませて言う。

そう、私は加奈が嫌いだっただ。自分の存在を脅かすようで怖かった。人からいとも容易く羨望を集める容姿。器量の良さ。そして綺麗好きだった。

その偏屈な部分は彼女を孤立させ、しかし同じに気に入ったものを独占するという結果をもたらしていた。そして一年半以上、加奈の興味を占めていたのが珠洲だったのだ。

珠洲を孤立させた。その可憐さが引き立てられたけれど、しかしいつでも哀しそうで寂しそうだっただ。控えめな笑顔で加奈の隣に立つのが常だった。

「スズっちの特別扱い。独占してるよ？」

「へ……？」

思わず向けた視線が不自然にかち合う。

自分の名が出たから顔を上げた。ただそれだけのことなのだろう。でも私は、

「——いたっ！」

「和華っ！！」

動揺し、手元が狂った。

試験管の破片に傷付いた指が赤い血を流す。

「貸して。」

黙っていた珠洲がすべらかな白い手を伸ばし、私の指を口元へ運ぶ。

「っ珠洲！」

驚いたのは私だけではなかったけれど、口をついた言葉は私以外の何者でもなかった。

それは悲鳴のような、歓喜の叫び。

柔らかで温かい、舌。気持ち悪さなんて感じない。

その滑りに心が高揚して、硬直し、同時に立っていることさえ辛くなる。

このちよつとした事件に周囲の視線集まってる中、頬が染まるのを感じた。

（もう……無理——っ！！！）

そして

「もう、大丈夫だよ。ガラス、取れたから。」

舌を見せてくる姿は先ほどの行為に邪な事などまるでない、陽だまりの笑顔。

その舌には残酷なまでにガラスを証明し、一つ一つ、それをティッシュに包む姿。

「あ——」

足から力が抜け、そのまま気絶した。

「起きた？」

柔らかに微笑む珠洲に、無心のまま言葉を出す。

「私たち、親友になれたよね……？」

珠洲は微笑んだその顔を私に向ける。

「加奈以上に、私は仲良くなれたよね……？」

笑顔で、しかし無言だった。

「私、加奈に負けてないよね……？」

「——和華ちゃんは、カナちゃんが怖かったんだね。」

その言葉にドキツとしながらも私はただ白い保健室のベッドに横たわったまま。

「和華ちゃんはカナちゃんが大好きだったんだね。」

この可憐で綺麗なクラスメイトに言われて、漸く私は自分を認められた。

私もまた、加奈に憧れ、近づきたかった。その一人でしかなかった。

彼女に認められたかったから嫌いな振りして、突っかって。珠洲

（お気に入り）を取りたかった。故に執着していた。

けれど、それ自体が加奈に似ているというのなら。私はもう、その時点で加奈に怯えることなんてなかった。存在が消される？今がそ

うだ。自分の存在意義がなくなって、自分が自分じゃなくなってる。

私は未だ、加奈に捕らわれている。

幻影に。虚妄に。気にしないようにして目を反らし続けた、加奈の

死というものに。

「わたし、行くね。」

「……珠洲。」

「じゃあね。」

それが、最後だった。

「あなたが大河珠洲さん？事件の事は知っているわ。ご友人、失くされたそうね。」

「……。」

二人が並ぶ。

かつてみた、ルージュの人と同じ。

まったく同じ、別の人。

そして、あの女の人の傍にいた青年。教育実習生。彼がいた。

「わが組織にようこそ。非凡を見抜かれた平凡の子よ。」

そういつて迎え入れる彼女はやはり、ルージュと同質でどこまでも

“同じ”だった。

「——ねえ珠洲さん。本当はあなた、」

思いついたようにいりだした話題に立ち止まり、振り返る。

「もう大河珠洲ではないんでしょう？」

歪む唇に、漸く一言。少女は言葉を交わす。

「名もなきものよ。それ以外の何物でもない、人形。」

彼の名付け

(トレーニング室……ねえ?)

部屋の名が刻印のされたプレートは白い壁に打ち付けられていた。触れた手はざらりとしたコンクリートの感触、無生物の冷たい温度を感じ取る。

それらは彼女には初めての体験だった。しかしそこには感動はない。彼女は知っていた。血となり肉となった他人。己の身に仕込まれた記憶、経験、感情、そのどれもが彼女にまわり、干渉し、感傷を抱かせ、疑似体験させる。彼女は何一つもっていないのに、何もかもが既知として所有が出来ない。それだからこそ何も得られない。「いいですかー?」

暢気な声が機械を通して部屋中に響く。見知らぬ声、だ。もつとも、この場において彼女が知っているものなど余りに少ない。ここはいままで彼女がいたのとは別種の空間。

化け物として生き、化け物として寄ってきた餌を捕食するだけ。

「――。」

「返事がないようなので肯定とさせていただきます。」

そこから抜け出て学校生活なんてものを送った時期もあった。しかし、行くべき場所はそこでもない。ここでも、ないのだろう。

「3・2・1――開始!」

だらんと垂れた手に瞬間的に力が入り、握られたそれを構える。

一瞬の判断の基に獲物を定め、引き金を引く。撃轍が落ちる。

「撃ち方止め!」

合図の時、狙うべきものは既になかった。

だらん、と腕が落ちる。手に握られた武器自体、投げ落とす。

「ふうー初心者なんですよねこの人お。感情の欠片もないって言うかあ……これが“ふつー”って感じですよ。慣れてますねええ。」

トレーニング室で流れているこの声の人物は操作室にいた。他に二

人、彼女の知る男女だ。

「迎くん。」

「……。わかった。」

彼女は窓の下から見ている。口元の動きで何を言っているのか、それがわかる。

そうして、暫くすると“迎”が現れたのだから、その正確さも信頼が置けるというものだ。

「次は俺が相手をする。」

その言葉に彼女は表情を歪ませた。楽しげに、哀しげに、そして慈しみの感情を表す。

「嗚呼、あなた迎っていうの。教育実習の時の名前と一緒に。本名だったのね？」

素早く距離を取り、攻撃を避ける。迎は素手だ。彼女も素手。

「よくしゃべるわね。人形なんじゃなかったの？」

拡声器を通された言葉は先ほどの馬鹿っぽい声なんかじゃない。あのルージュに似た、コードネームも知らない美しい紅の女。

戦いは止まず、二人は動き続ける。

「人形よ。でも人間以上に人間らしい、ってところかしら？ 私の中にはみんなの願いと想いが一杯詰まっているもの。」

彼女は答える。言葉にも表情にも感情が込められているのに、自身を人形と否定する。

それは彼女の内に幾つもの人格が、人が、魂が、込められているから。

「でも、そうね。今のベースは加奈。この前までは珠洲だったけど、次は何がいいかしら？」

大河珠洲の身体であり、彼女は大河珠洲ではない。複合した“何か”。

彼女は受け入れ続ける入れ物（にんぎょう）である。

加奈から出てきた“何か”は同時に、あの鬼灯の種子。鬼灯に吸収された、人の想いであって“人”に成り代わった泥人形。人の身体

に潜む、“怪異”そのもの。

「固定は出来るけど、私には選べない。人形に意思はない。流れのまま回^{サイクル}転していくだけよ。」

“現象”は留まる意思なければ絶えず“変化”が行われる。これは役作り（ロール）ではない。複製であつて、再現だ。

彼女の動きは大河珠洲の身体能力を超えている。そしてそれは人間の枠内に留まるにしても相当な強さを感じさせる。知識が、頭脳が、体が、彼女の思考によつて思念の渦から引き出され、適宜使用されているためだ。

対して迎。これは既に人間の動きではない。その枠内を越えた、異質なもの。それこそ“怪異”を呼び込みかねない。……この組織にいる、理由。彼のこの能力が関係するのだろう。

「なら、私が決める。迎くんの前では戦闘に適した性格を。他では……そうね、主張の少ない子。それでいいかしら？」

女の、壁を置いたままの命令に彼女はそれに当てはまるものを導き出す。

「なら今は加奈ね。それ以外は珠洲。この二人は正反対で、扱いやすい。」

「なら、早速初任務でも行ってもらおうかしら。」

彼女の言葉にすぐさま女は次の指令を与える。

実力試し、はこの言葉により終了した。

「迎くん、武器管理庫に案内してあげて。」

「その前に、」

迎が背を翻し、女が興味を逸らす。その僅かな隙間の時間だった。

「私の名前、付けてくれる？あなたの名前も教えなさいよ。」

「ハシバミ。それが私のコード。」

女の唇は紅い。ハシバミ、と口の中で女の言葉を繰り返す。けれどやはり、ルージュの方が似合いそうだ、と感じた。

「あなたは、名付けるまでもないわ。——鬼灯の実。」

唄う水魚の噴水（前書き）

戦い場面……難しかった！

臨場感がなかなか出ませんでした。下手なので期待しないでやってください。

唄う水魚の噴水

「『唄う水魚の噴水』……それが私の相手？」
迎に尋ねる。

夜の美術館、その敷地内にそれはあった。

「既に数人の調査員が食われている。」

簡潔な言葉はその危険度を表した。

ハシバミも随分と手の込んだ悪戯をしている。初任務で死んだら、組織入りも何もないじゃない、と彼女は思った。

“組織”——それは“怪異”による事件を秘密裏に処理する組織だ。力はある。

やり方も相当汚い。“怪異”と“怪異”をぶつかり合わせて、生き残った方の身を生かしていくやり方だ。両方が死んでくれればそれはそれで好都合、ということだろう。

少なくとも、鬼灯に関してはそこら辺に余裕が見られる。

人の身体に寄生しているのだから、処理は容易と判断しているのだろう。

人の身ならば“怪異”といえど、喰らい合って強くなったところで手に負えなくなるものではない。

「ああ、あれが——」

鬼灯の身体、正確には大河珠洲の体を穿つ、水球弾。

不意打ちも不意打ち、見えたと認識する間もなく攻撃してきた“怪異”に迎はその人外の身体能力で回避していた。

尋常じゃないスピードのそれは鬼灯の身体を、至極容易に致命傷へと至らしめた、と思われた。しかし、

「あまり攻撃性はないと思ったけど、」

攻撃なんてまるでなかったかのように、こちらを向いて優美に微笑んでみせる鬼灯。

「私の思い違いだったかしら？」

不本意ながら見蕩れた。

「それともすごく怒ってるようだから……何かしたの、あなたたち？」

『灰色の歌を歌わせるな』

敵句が思考に流れた。

渦から導かされたこの怪異への対策——それが土壇場になって出てきた。

憎しみを封入された人工の怪異。それが『唄う水魚の噴水』

「さあな。」

仲間となった怪異に乾いた答えを返し浮び始めた水球を打ち落とす。攻撃がまともに当たるのは迎の持つ武器が普通のものではないからだ。封印呪のかけられた銃。

それを新しく装填し、構える。物陰に隠れたままスコープを覗く。

「だが、怪異はあるだけで害だ。」

断言する瞳の先に見えるのは大きく口を開き、その美貌を自ら貶めている彫刻。

今度は口から砲弾でも出すつもりか。

「あなたねえ、——」

私の前で言う？と言いかけてやめた。その瞳と表情に口をつぐむしかなかった。

一先ず言及を避け、目の前の怪異に集中する。

（あれが唄う姿勢なのかしら？）

凶暴に微笑んで見せる姿に歌姫の姿はない、と呆れたように思う。

攻撃に移される前に、と走り出す。疾走は人の身体に許される範囲内だ。

下げ持つ剣が重いと感じるのはこれから命を奪うため、ではない。

精神的なものでなく、肉体的な事実。攻撃が掠るだけでもそれは脅威となる。

成長しきってもいない、未完成な少女の身体なのだ、これは。

至近に入って、振りかぶる。

（今更攻撃しても、もう遅い。）

唄では影響がすぐに出ない。けれど、と考えた。

（水球ならば防げる。）

鬼灯に触れる直前にそれは歪み、干渉され、喰われ、消える。

怯んだ水魚に躊躇いもなく、異界の剣その力を振るう。

もう鬼灯は木が本体であつた時とは違う。年月をかけた知識を行使できる。

待つだけの存在ではなくなった。他の怪異についても幾つか知っている。

何より、人の中に入り込むことにより怪異が追加され、防護壁となり攻撃をくらすことがない。

怪異を怪異で食らう。侵食することにまで肥大化した怪異の力。その手に握った一振りの剣。

切り裂く。食らう。呼吸するように吸収する。

異界の力が剣を通し、鬼灯にまで流れ込んでくる。主従は鬼灯のほう为上だからだ。

鬼灯の根源へと駆け巡る想いへと滲み込む、異界。——灰色の歌の正体を識る。

「帰るぞ。」

「ええ。」

迎に照応する。

立ち去る前に背後をチラと振り返ったのは感傷に過ぎない。

そして口ずさむ、恋歌。感傷に過ぎなかった。

人魚姫と不老不死は嘆きの歌を呼び

なぜ彼女は水魚であつたか。

鬼灯は考える。

組織から貰つた自室だ。とはいっても寛ぐことはできない。日中は勤務時間として割り当てられ、常に要請待ち状態。ぶっちゃけ仕事が入れば夜でも関係なく行われるのだが。

これでも人間の身体だ。

多少の無理が利くとはいえ睡眠を取らないわけにも行かないし、生前彼女が肌やらに気を使っていたことを考えればそれを尊重しないわけにもいかないのだった。

初仕事。それは異界『唄う水魚の噴水』の制圧。

それはこなしした。問題もなかった。しかし鬼灯に宿る能力は彼女に知識を与えていた。

人魚姫、少なくとも人魚であつたら違つていただろう。

形は人魚。ならばどうして水魚と名付けられた？今になって暴れだした？

製作から80年以上が経過し、何の問題もなく大人しくしていた。異界の力が人へ害をなすよう振るわれ始めたのは最近だという。

もともと深夜に歌声が聞えるという噂だったのが、いきなり被害が出た。

それで組織が乗り出した。——切欠は何だったのか。そこまでの知識は吸収出来ていない。

封入された概念は憎しみ。

そこに秘められているのは一つの伝説からの創作物語だ。

人魚姫のように、人に恋をして、人の姿を得る。

けれど彼女が姿の変わりに失ったものは声でなく、選択肢であり、未来。

『人魚の肉を食べると不老不死になる』

そんなものを鵜呑みにした愛しい者は彼女の身体を引き裂いた。
彼女はただの水魚だ。人魚ではない。

そして愛しい者のために自ら命を絶つという運命でなかった。選択肢など最初から用意されておらず、愛しい者に身を喰われるという選択以外になかった。

言葉に惑わされ、真実が見えなかったその結果。

「余りにも陳腐な響き。」

呟いた言葉を聞いたように、扉が開く。迎だ。

「お、おはようございます……。」

「ああ。」

戦闘以外の時間は珠洲だ。異性や年上を近寄りがたく感じてしまう、平凡で控えめな少女。

鬼灯は演じる。自然で、その少女は本物の偽物。作り物の存在だ。仕事上、加奈でいることが多いにしても鬼灯自身に好悪の感情はない。

けれど水魚にはあったのだろう。その記憶として封入された歴史が、自身を食べた者を愛しく、そして憎く思っていた。踊らされて、こんなところまで来てしまった。

（愛していたのなら、許してしまえばいいのに。）

それとも、愛していたから憎いの？

答えはない。

皆が交ざり、解け合って、水魚の異界は意志なき異界へと変貌した。彼女はもうここにはいない。別れの言葉はなかった。ただ、鬼灯の一部となつて存在する。

「——か？」

「聞いてるわよ。」

問いかけは意識とは別のところで脳内に伝えられた。

実際には聞いてなどいないが、きちんと指令は送られている。だからこそ、再び加奈としての存在になったのだ。仕事。そう、次なる仕事が入ったのだ。しかし、

「でも何故？人の搜索人なら人の範囲でしょ。」

人の搜索など、鬼灯一人にどうにかなるものではない。

それこそ組織の下部を使って人海戦術をでも使えばいい。相手は文化人で今は情報化社会だ、色々操作も出来るだろう。

「異界なんかにさせて、まずいんじゃない？」

わざとらしい猫なで声を出す鬼灯に迎は気分悪くなったとでも言うように顔をしかめ、向きを変えた。そうして話の続きを話し始める姿には呆れが出ていそうだった。

「アレは異界に寄り付く。今回もそう言っ出て行っただ。」

「ふうん？」

納得がいつて（まあそういう人も居るだろうが、珍しい。）、仕度を始める。

異界好きだなんて、そちらこそ異界じゃないのかしら。

首を傾げるような疑問がわいて、しかし口に出すことはなかった。

「で、何を見に行っただの？」

「学校の怪談だ。」

「……馬鹿にしてるわ。どれも嘘っぱちのデタラメよ、そんな」

鬼灯の言葉に資料を机に放り出す迎。パサッと音を立てて置かれた内容に眉をひそめて眺め、

「あら。」

発見する異界。

理屈じゃない、説明できない現象。人を飲み込む部屋。

「……危険よ。ドアの見つからない空洞、空かずの間。開いてはいけない領域よ。」

随分と古い。400年近く昔。

私は良くて100歳程。圧倒的な差だ。時間は異界の強さを変化させる。

（私だけでは太刀打ちできないでしょうね。）

「これじゃあ、助けられない。」

敵の懷に潜り込むようなもの。

実力差に地の有利。異界に異界を重ねた今の鬼灯にもう一つの異界である剣を加えても足りない。……迎くんがどうするか、だわね。

「私が、食べられちゃうわ。」

「拒否権はない。」

苦笑して冗談気味に本当のことを告げても迎はそっけなく返す。

パートナーがこんな態度で、人選ミスなんじゃないかと思う。

最も、迎の仕事は私と人探しでなく、私が仕事をちゃんとこなすか、その監視に当たると言っているから仕方ないだろうと思う。

「そうね。組織にいる人間なら、そうでしょうね。」

肯定する。その含みに迎が瞳を向け、そして苛立たしげに立ち上がる。話の終了を示す行為。

「でも私は異界。いくらでも、どうとでも、なる。——ねえ、異界が死ぬことはないのよ。」

唄うように呼びかけ、その後を追う。

「あるのは滅び。なくなること。在るか無いか。」

くすくすと笑い、扉を閉じようとする。

「そこに自主性は欠片もない。存在しえない。わかったかしら？」

「……ああ識ってるよ。だがな、」

鬼灯が瞳を向け、迎も真正面から瞳を合わせてくる。

閉じてゆく扉の隙間の光のようにその言葉が漏れる。

「俺は律を破り、壊すことが出来る。概念を、——殺すことができる。」

「……行きましようか。」

なんてことのない。向けるべき感情があるはずなのに、それを向ける事はできない。

子どもが傷ついたような、母を捜すような愛の渴望。

温もりを欲しが、小さな男の子のような、達観した雰囲気を持つ青年。

大きな背に大きな身体で、人からの愛を願う異界に侵食された人間。激しく感情を灯す瞳。それを羨ましく思えばよかったのに。

感情を持たず、言葉も持たないことに、悲しむことすらできない私はやはり人形なのだ。

「入る前に捕まえられたらいいわね。」

「人みたいなことを言うな。」

だって、じゃないとその人死ぬじゃない。

そんな言葉が思い浮かぶのに、鬼灯は足を止め、息を飲むしかなかった。

好意な感情の全くこもらない、迎のその言葉はそれほどの破壊力を持っていた。

探索部屋。（前書き）

新しく人物登場！

鬼灯にも必殺技がつ！

ちよっぴり長めになりました。

これからが本編です。たぶん次ぐらい。

探索部屋。

「あれ？こんなところで偶然だね！」

抹茶色の渋い着物を着た、モノクルの人物。

そしてその隣に黒い着物の小柄な少年が静かに寄りそう。

「……お久しぶりです……。」

テンションはモノクルの人物——たぶんこの人が探査対象：博士だろう——とは真逆に低い。気配が薄く、隠密に向いているようだ。いや、従者か。

「おやおやおや。迎くん、君——隅に置けないなあ！こんな可愛い彼女見つけてきて！……どうだい、青春の話なら僕が聞くとってもさ！」

「？」

ハイテンションな博士に鬼灯は付いていけない。

それに構うこともなく、博士は観察するように顔を近づけ、視線を上下させる。

「うふふふふふ。ぐひひひひひ。こんな“異界”は珍しいねえ！。多重に掛け合わさってる。たまらないねえ……。」

これが普通の女ならば逃げているだろう、不気味な笑い方をして観察を続ける博士。

しかし、普通でない鬼灯までもその視線に含められた純粋な好奇心に不愉快を表情に現した。

「帰還命令は数週間も前に出されていたはずだ。それを押して、ここに来ていたんだ。調査の方は期待できるんだろうな？」

何故か機嫌を悪くした迎が問いかける。

「んー。目星は付いたよ？今から入るところさ。」

ほらこっち。と進む博士に迎は難しい顔をして呟く。

「ギリギリのタイミングだったって所か……。」

「ところで彼女は？」

「鬼灯だ。」

顔も上げずに即答した。そんな事は当人にでも聞けばいいのに。

「いやいや、名前もそうだけど、彼女はどこにいるのかな？」

「——っ!？」

ば——っ!

振り向く。いない。逃げた？

その考えを一瞬にして消す。

いや違う。気付けなかった。指摘されて始めていないことに気づくなんて。

「はか……せ」

数瞬前までいた人物たちはみな、いなくなった。

For Hozuki

『やめときなさい』

言いかけた言葉が口だけを模して、誰もいない場所へと空気が吐き出された。

異界の気配は一瞬にして濃密になった。感覚が狂う。

取り込まれた。私が？彼らが？

これだけ強烈な気配を放つ異界に出会ったのは初めてだ。

それにしても気付くのに時間が掛かった。擬態能力があるのか。

接近に近づかなかった。いや、私たちが畏に飛び込んだ？

「ふふ。若輩者の異界に、随分用意周到なものね。」

何もない空間には木霊するばかりで返答はない。誰もいない。けれど確かに“異界”はある。

ここは“異界”の中。聞えてる。

「けれど、防御型のあなたと攻撃特化型の私。」

(どっちが倒れるのかしらねえ……?)

クス、と笑みを漏らす。臨場感も何もない。

もともと分が悪いと分かっている、現状がそうだったただけだ。

あっちの異界は取り込み、消化するまでに時間が掛かる。それまで

に本体を見つけるか、無理矢理抜け出るかすればいい。始末できるかは、また別問題だけど。

それでもまあ、あの子達を吸収されても厄介だ。さっさと脱出するに限る。

（喰い合うのはその後、安全確認が出来てからね。）

「さあて、心で泣いてる坊やを探しにいきましょうか。」

合流目的の二人は図太いし、実力あるし、大丈夫でしょ。

けど、迎くんは——危ういところがある。

For Hakase & Natsume

「ふむ……ふむふむ。僕らは異界に取り込まれてるようだねえ、ナツメ。」

真剣なことかと思いきや、言葉も声音も暢気平穏平常心だった。

それは博士には普通のこととて、こういう状況をこそ望んでいたわけだ。

だがそこには興奮も恐怖も欲もない。

冷静に知的に平然。それが夏梅の尊敬する人物の本質である。

「……博士。結界を張ります。」

黒い着物、その懷から取り出した符。描かれた文字は常人には解読不可能の、しかし古の力と現代科学の粋が寄り集まった高度技術の塊。“異界”に対応するための人の技術である。

紙に書かれた指令は情報変換の能力を伴った、現象攻撃。応用により先の言通り結界も張れる。

四角い閉ざされた空間。その四隅にそれぞれ符を飛ばし、杭で止める。

唱を紡げばバチバチと雷光が奔り、全てを繋ぐ。

「ん、ありがと。」

「いえ……。存分にお調べください。」

定型の、形だけの感謝を述べる博士に夏梅は他では決して見せることのない笑顔を柔らかく向けた。夏梅は幸せだった。気のない返事

でもいい。尊敬する人物の役に立てる、それが嬉しい。

「はいよつと。」

なにやらゴソゴソと物を出し始める博士。その背を夏梅は静かに見つめていた。

For Mukai

一瞬にして引き離された。

鬼灯がいなくなり、逃亡かと考え博士を振り返ればすでに二人ともいなかった。

警告を放つ暇もなく、バラバラにされた。

しかも今現在、取り込まれているらしい。

(切り開くか……。)

しかし、俺には切断力がない。

人類を超えた身体能力に通常装備と多少の異界概念を込めた銃が数丁。この狭い空間で爆薬系を放てばどうなるかは考えなくてもわかる。手の出しようがないのが現状だ。

(……?)

道が出来上がっていく。

不審に思いつつ、進むしかない。

この道の果てに、促された先に何かがある。

For Hozuki

「迎君、どこへ向かって移動しているのかしら。」

この異界の中で、自由に動くなんて、異界の意味でしかないのはわかるけれど、

「でも何故彼なの。」

疑問を持つ。思考に関係なく行動は行く手を遮る障害を断ち切る。

吸い込まれるように漆黒の刃が上から下へと線を付けて走る。

まるで紙のように切れる壁、後から後から増え続ける壁。

(……まず、精神を集中させるんだったかしら。)

イメージする。

一点に収束し、留める。そして、解放。

「斬戟一線！」

振り下ろす勢いで力をぶつける。見えない刀が壁に切りかかる。

幾重もの風を巻き起こし、乱舞のような斬戟が放たれた。

「試してみるのも、悪くないかもね。」

人間の知識。

仮想世界での出来事、リアルにないものが異界の力によって具現化される。

（人間の発想ってすごいよね。）

若干、本人もその威力に驚きながら薙ぎ払われたその先を一直線に進む。

その途中、彼らがいた。

「あら、ごきげんよう。お二人とも」

「——っ！！なんて危ないことをするんだ！」

従者の少年が吠えるのに鬼灯は心配しなくて良かった、と思った。

「——ナツメ、構えなさい。」

「え？」

警告に対してナツメは間抜けな声を出した。

突然、博士が身を起こして素早く物を退け去る。

「来ます。」

あくまで冷酷な声に促され、展開する術式に追加の符を敷く。同時、

「博士……っ！」

中央に立つ夏梅を博士が横から抱き寄せ、その攻撃の線上からずらす。

「……！？」

「間一髪、手荒い救助だ。」

横を奔った剣戟。前面だけでなく、背後の壁までも通過し、どこまでも続く道を作った。

「僕の結界が……」

「うん、破られたようだね。」

博士も若干、この威力に驚いていた。

高々、百年の異界が一振りですツメの結界を破るとは。

見てたえがある。その行く末を、果てを。……面白いじゃないか。けれど察知することができていなかったなら、夏梅は粉々だった。そう思つて、無意識にその腕に力を入れた。

「もつと、精進します……。」

消え入りそうな声で答えた夏梅。少しばかりの身動きをして、漸く自分の腕の中にその存在があることに気付き、博士は力を緩めた。さつと離れ、恥ずかしそうに顔を伏せる夏梅。

うーん、それ以上に頭が固くなつても困るんだけどね。

「ナツメは十分な働きをしているよ。これまで通りでいい。」

「でもつ——」

防御でさえ、あの異界に勝つ事は出来なかった。

それが悔しいのだろう。大きな瞳には涙が溜まっている。

しかし比較の対象が間違っていることにも気付いていない。

（本当に馬鹿な子だよな。）

美少女のような容貌を持つこの少年を傍に置く理由は決して恋心でも愛情でもない。

従順さ。それだけを博士は求めている。養い親へと向けられる、その純真さを利用して。

「あら、ごきげんよう。お二人とも」

割れた先からのんびりと悠長に歩いてきた鬼灯に普段大人しい夏梅が突っかかる。命の危険が迫ったからなのだろうか、それとも結界を破られたことによるプライドか矜持か。

「迎くんはやっぱり一緒じゃないのね。」

鬼灯にはどこか焦りの匂いがした。会つて数時間も経たないというのに、異界に感情はないというのに、それが推察できてしまう。

それは鬼灯がイレギュラーであるからだ。

人に宿る異界。人を構成要素とし、人を受け入れた異界。

それは人と異界との半端であり、どちらをも含む最強なのかもしれない。

「知らん。知っていてもお前には話さん。」

ツレナイ態度を取る夏梅に苦笑する。状況を考えれば今ここにいない迎が一番危険なのだ。鬼灯としては当たり前のこととして言っただけだ。心配などという感情ではなかった。

「今、出口を造るわ。」

下へと剣先を向けられていた鬼斬。それを振りかざす。

斬撃が肉を断つ様に壁へのめりこみ、切り刻み、消失させていく。それは吸収ではなく、鬼灯の能力“暴食”。が強制的に造られる出口。

霧のように、霞のように、幻影のようになっていく。基の世界。異界からの脱出だ。

「二人は校舎から出なさい。この異界は移動ができるから、下手したらもう一度飲み込まれる。」

「鬼灯、君は？」

鬼灯にはその権限はない。しかし的確な判断を下し、誘導する。

博士の質問へは一度、微笑み、真剣な表情で答えた。

「迎くんを追うわ。彼、自分から本体に近づいてる。」

さあ、壁が再生する前に。

そう促す鬼灯。

先ほどの剣戟による惨状は既に修復されている。ここも徐々に治っていくのだろう。

走り、壁の向こう、校舎の壁までも突破した夜闇の世界へ向かう。追走する壁はしかし、出れば追いかけてこなかった。

「さて、もう一回、いくわよ。鬼斬」

鈍色の身体を撫でて意思を示す。

イメージは最初の時より鮮明に、鋭く、素早く、軽く、薄い。

「魂撃！」

一転集中の衝撃波攻撃。

荒れ狂う風が巻き起こるのにこの狭い部屋の中で自分自身も煽られる。

しかし、攻撃力は【斬戟一線】より上だ。こちらの攻撃情報を得て、壁を幾重も重ね分厚くしていく異界に対し、それを使わない手はなかった。でなきゃ、閉じ込められる。

既に四度目のことに、要領は覚えつつも人間の身体は限界を来たしていた。

けれど漸く、その姿を線上に見つける。

呆気にとられた様子の彼に息をつき、けれど歩み寄るほどの体力はなかった。

「迎くん、心配、させないでよね。」

自ら近づいた彼に途切れ途切れの言葉を投げかける。

「異界が心配などするわけがない。」

冷徹な声音には若干の動揺が見えた。

いくら異界の力が通用しないといったとは言え、味方から攻撃されるとは思ってもみなかったのだろう。鬼灯もそんな意図があつての行動ではなかったが、事前に“異界殺し”と聞いていたからこそ攻撃を放っていたという部分もあるので、それに関しては何も言わないことにした。

「博士と従者の子。それと、私の中にある珠洲の意識からも。」

随分もてているようよ？と冗談めかして言う。

けれど返答もなく、息を整え漸く上げた視界には難しい顔で壁を睨む迎。

「……この異界、どうやら私たちをミンチにしちやいたいようね。」

近づくそれに、鬼斬を構える。

「……っ！？私の異界が、——封じられた。」

「っ」

迎の目が向けられ、けれどどうすることも出来ずに頭を振る。汗が垂れた。

『開かずの間』の閉じ込めが鬼灯の中にまで影響している。

いや、そこ中心に攻撃を受けているのか。でも、ならば鬼斬の能力は封じられていないはず。

「迎くん、嫌がるだろうけど——」

「緊急事態だ。わかってる。私情は挟まない。」

冷静なようできて、冷静でない迎に不安を覚えた。

異界が嫌いだという信条は鬼斬にも伝わるはずだ。迎自身に宿る異界染みた能力、“異界殺し”も影響が、分らない。

「……貸せ。」

「——大事にしてよね、それ。」

答えはない。けど、……大丈夫。

「異界を切る異界の剣。【鬼斬】」

名を呼ぶ。それは本質を暴く行為だ。

キイイイイイイイイ！！！

鬼斬が啼き、咆える。

禍々しい闇色の光を纏い、肥大化する剣の先が壁に突きたてられ、スツ——と吸い込まれるようにして、零れ落ちる砂。壁を構成していたもの。それは異界の力自体を殺ぐ。

空間を生み出すだけの力はなく、“本体”が壁の先、現われる。

箱……？

「鍵は、——見当たらないわね。」

「中だ。あの中に、鍵はある。」

言うが早いか、切り掛かる。

寸前で箱の周囲に異種空間ができ、歪む。が、それをも切る。

（ズレル。）

箱が斜めに奔った剣に従って、ずれる。

世界が、その場所からズレル。

「あ、帰ってきた。」

博士と従者、二人が目の前にいた。

「無事だったんだね、二人とも。」

声をかけてくる博士だが、鬼灯はただ鬼斬を返してもらおうべく、迎へ手を伸ばし、迎もそれに応ずることで二人して無視をする格好となった。

「いやーよかったよかった。」

「よくない。アレは人為的な異界だ。」

「へ？ああ、そうだね。うん、そうだったよ。」

何で知ってるの？

と別行動時に得た情報から人為的なものだと知った博士は尋ねるが迎は答えなかった。

鬼灯はそれを切った感触だと思った。

鬼斬を使うことによつて、吸収時の記録が垣間見えたのだろう。

しかし、それにしても鬼斬はどうしてしまったのだろう。

手に戻った今、うんともすんとも言わない。それは鬼斬が普段から無口なので当たり前だ。

しかし、あの様子は——先ほど、迎の手によつて本質を顕現した、その時の変異。

あれは鬼斬の領分を越えていた。興奮しているような声を上げていた。

（迎くんの異界殺しと鬼斬の異界切りが共鳴した？）

迎の得体の知れなさは深まるばかりだ。疑問は尽きない。

けれど、自分はそれを知ることはないだろう。

迎自らそれを話すこともないだろうし、鬼灯が聞くこともない。

——その時は、そう、思っていたのだ。

ヴェルゼブブを語る人外（前書き）

不穏な雰囲気です。遅らせていただきます。

ヴェルゼブを語る人外

夜闇に見知る顔を見た。

金髪の、ちゃらちゃらした雰囲気ある今時の男性。

しかしその顔は迎だ。屋根を伝い、空を跳んで、どこかへと向かう。
(何処へ行く気なのかしら。)

こんな時間に。

本日、日中に実働任務はなく、異界らしきものを書類から発見する作業だった。

その報告を上司となったハシバミに伝え、今日は終了した。
なので任務ではない。武器も何もなく、無防備であることが何よりの証拠。

その視線がつい、と向けられ頬が歪む。ニヤリ、と笑んだ。

それは意図的なものだ。違和感どころではない。アレは迎じゃない。双子かと考える。それならば納得いく。そうでなければ別人格？それもありえそうだ。

理屈でなくありえないのはあれが迎と同人格であるということ。

「見張りは、いないのね。」

気配はない。……例えいたとしても何もできないでしょうけど。

安心して、部屋から出る。

(わざわざ部屋の窓から見える場所を通っていった、という解釈でいいのかしらね。)

異界は眠らない。眠っていないことを前提に、見つかるようにしてきた。

人間としての体力が十分であれば、異界は休息を取る必要はない。

異界の力は根源に持つものであり、その存在そのものだからだ。

供給は無限。減る、ということは異界同士の食い合い以外には起らない。

そういえば、迎の能力には何らかの特殊能力が付随しているのだろうか。

“異界殺し”のおかげで身体能力は人間を越え、その強度も他とは比較にならない程だ。

けれど、それによるマイナスの部分。――鬼灯で言えば無意識下の連続性人格変化。

絶えず流れ、留まらない思考。意志を持たないが故の、輪。

迎なら、……そう、体力や精神面での極度の疲労。もしくはそれ故に別人格の発生という偶発的精神回避。

（別人格、かしらね。）

「何処まで行くのかしら？」

その背が見えるようになり、声を掛ける。

本来ならば追いつけない。純粋な能力の差に決定的なものがあるからだ。

けれど、追いつけた。つまり、そういうこと。

「場所なんて何処でもいいんだよ。ただ、お前と“二人きり”でデートできるなら、な。」

（全くの別人、ってことはないかしら。）

即座に思ったのは先ほどの双子説。いや、もっと他人でいたい。

ニヤニヤ笑いを止めず話しかけてくる迎と同じ顔の男に気分が悪くなる。

内密の話をこんな態度を演じてる、っていうのなら大丈夫だ。

けれど、別人格だろうとなんだろうと、迎がそんなことを言っているのならば、気持ち悪い。気に食わないという以上に、信じられない。

「あなたは誰。」

単刀直入に聞く。

「そうだな、ヴェルゼとでも呼んでくれよ。」

明らかな仮名に眉が寄る。

「おいおい、追求なんてしてくれるなよ？そしたら俺は今この場であんたを殺すことになる。そしてもう二度と現れない。」

「二度と現れなくて結構。あなたに異界^{わたし}が殺せるっていうの？」

「そう。迎と同じように。」

（知ってる。）

やはり迎？いや、その話し方では別人格であることは間違いない。けれど他人であるだろうか。その情報を手に入れるのは困難だ。

組織の情報の中でも迎の能力については機密事項^{トップシークレット}。

下の者には異界対策能力者の内の一人として優秀であることぐらいしか知られていない。

「まあ、どう解釈していてもいい。今日のところは挨拶のみだからな。」

今日のところ、という言い方に眉が寄る。

気分を害す、ということは鬼灯には起こりえない。存在を脅かされることに限り感じる恐怖以外に感情はないからだ。

命令を忠実にこなすために異物を取り去るという意識の他は、知識に培われたほんの少しばかりの察知能力と生存本能。

「宜しくしたくないから挨拶もいいわ。消えなさい、不愉快よ。」

冷徹に告げる裏側には怖れ。この存在に対する根源的な恐れ。

勝てない。自分では抵抗すら出来ず、破壊されるだろうという確信。

「そういうなよ。重大なこと、聞き逃すぜ？」

重大なこと、とはなんだろうか。ここで言い出すということは組織に関することだろう。無視できない。異界は指示塔が必要であり、今の鬼灯にはそれがこの組織だからだ。

「連日の異界事件。あれが全て人為的創作の異界だってことに不審はないか？」

知識欲が騒ぐ。

身体は恐怖に縛られ、断ち切ることも出来ない。

（せめて鬼斬を持ってきていたならば――）

「アレはな、組織だ。ここの真の目的はそれを失くすことだよ。自

然発生的な異界には興味はない。そもそも害意を持たないんだから戦う必要もないだろ。適当に潰してるだけだ。」

この男は何故知っている？何者だ？——どこまで知っている？

「その首謀者っていうのが、俺。」

逆に呆れてしまいそうな、呆気のない白状。告白。

普通なら、信じられないと思うだろう。しかし、この存在に対峙して果たしてそんなことを思うことができるだろうか。その実力がある者を、本気にしないでいられるだろうか。

現実的過ぎるのだ、その言葉は。

「捕まりたいの？」

私にそんなこと言つて、と紡ぐ。毛頭、そんな気はない。

できないのが眼に見えている。そして未確認だが、迎との関係性。

「いいや？ただな、すぐにまた会うことになる。その時のための今日。出会いだ。」

義務的で、故意的な、けれど偶発性。必ずある邂逅のためのシナリオ造り。土台の設定。

それが今夜のヴェルゼの目的。

「またな。」

「もう二度と会いたくないって言ったこと、忘れたのかしら。」

避難する言葉は迎として他の人に見られることの危険性を知っているからだ。

それが本人だろうと、別人だろうと、不審として疑われる。迎は監視される。

「ツレナイな。まあいいか。」

自己完結するように呟きを残し、ヴェルゼは背を向ける。

「迎と宜しくしとけよ？」

「何よ、宜しくつて。」

最後まで不快だわ。

背は消えた。異界でさえ視認出来ない速度で。

ゆりかごの森

「惑いの森、ですか……？」

疑問を繰り返したのは最近顔を出すようになった客へのもてなしを用意していた時だ。

大きく頷く夏梅に真剣さを読み取って紅茶をカップに注ぎ、腰を落ち着けた。それは戦闘時以外では穏やかな性格を指定されている鬼灯が天然の鈍さを持った珠洲であっても同じだった。

「本当は博士も同行する予定だったんだ！でも、」

（ああ、可愛らしいです……夏梅さん。）

「置いてかれたんだ」と小さく、本当に小さく紡いだ夏梅は端の上がつた猫のような大きな瞳を水分たつぷり潤ませ、俯いた。

「えつと……、ご愁傷様です？」

博士と夏梅の関係はどんなものなのか、鬼灯にはわからない。

だが、だからこそ傍からは夏梅ばかり博士に心酔しているようで、今回のように博士一人で出かけられるとなると、どういったものかと困る。

博士も傍に置いているぐらいだから夏梅を嫌っているわけではないようだが、いつも笑顔で分け隔てなくフレンドリーな交友が果たして夏梅にももたらされているかといえば鬼灯には疑問なのだ。信頼関係を築いているというより、主従のようだと考える鬼灯。夏梅もそれを自覚している。だからこそ、八つ当たりする。

「性格変わりすぎなんだよっ！お前！」

「そ、そんなこと言われても、人格が違いますし……。」

言い放ち、冷め始めた紅茶を一息で飲む夏梅。鬼灯は困った顔で、それでも加奈の性格を援護する。それは鬼灯でなく、珠洲の役割として。

「カナちゃんは凄い人なんですよっ！すごーい尊敬できるんです！」
勢い込んで話す鬼灯に先ほどもまでのギャップから一瞬怯み、それ

でも夏梅はこんなときだからこそその強気で言い返す。

「何がどういう風に尊敬できるのかわかんないねっ！お前も要領を得ないし、ウザイ。」

「ひ……っご、ごめんなさ——」

眼を吊り上げ怒鳴るように返した夏梅に今度は鬼灯が怯む。というより完全に怯え、涙目で謝りながら後退した。

「あーもう！だからウザイ。泣くな。」

バンツと机を叩くようにして立ち上がり、

「泣くほどかなー！意志が弱い！だったら最初から反論するなよっ！」

指差し、指摘する。か弱い感じに涙を浮べるのは他から見れば夏梅だけでなく鬼灯にも可愛いという言葉が当てはまるのだが、実際には別格として扱われている二人なのでそれを言い添えてあげる者もない。況してや、ここには第三者がいなかった。

「いい加減、遊んでるな。行くぞ。」

資料を携え、ドアから入ってきた迎。既に準備万端という装丁だ。

それに対して鬼灯は驚くでもなく、眼鏡を外して一瞬で人格を入れ替えた。

「そんなの磁場じゃないの？」

惑いの森の原因究明なんて。と加奈の人格へと切り替わった早々に疑問を投げる。

強気に否定するのは珠洲では絶対になかっただろう。加奈だからこそ。しかし鬼灯であることに変わりはなく、どちらも同じ考え。口に出すか出さないか、その言い方・態度の違いでしかない。

鬼灯は仕事を軽んじるつもりはない。が、何を考えてそんな仕事を寄越すのか、とは思う。

前回の人探しにしても、他に適材はなかったのか。

「違うだろうな。」

憶測を口にするとは珍しい、と鬼灯は思った。

迎はいつでも断定口調。明確でなければ行動はしない。不明な事は

部下を走らせ、詳細を待てばいいという考えの持ち主だ。今回はろくな調査も出来なかったのか。

「安易に出入りが出来ないそうだな。入ったら任意に出れない。方位が見えないのは確かだそうだが、磁石はそれなりの働きを見せている。」

危険度が高いせいで幾度も繰り返し人を使うには都合が悪い、というのか。

そんなことを語りながらその扉を通る。接触した部分から表面に水のような波紋が広がる。

“異界”の扉、空間を歪ませ人を惑わせ、世界と世界を繋ぐための道具。

「確かに、異界のようね。ここから亜種空間が広がってる。」
地面に付いた足。森の入り口に到着したようだった。

下調べの目的はこのように扉を繋ぐ場所の設置の役割もある。
迎は地面に転がる石を拾い、放り投げた。しかし、それは返ってくる。

「壁じゃないな、歪みか。」

放物線を描いた石の軌道は滑らかで、速さが遅くなっている。跳ね返ってきたのなら速度は上がり、その角度は斜めに跳ね上がるか下がるか、直線を描く。

惑いの森は拒んでいる。時空のループが出来上がっているようだ。

「鬼斬。」

呼び出し、顕現。

チラ、と迎を振り返る。それは何とも交差しない。迎の視線は前方の新たな異界へと向けられ、眉を寄せている。

前回の鬼斬はいつもとは違った。迎が使った、そのことに誘発された異界特性の増強。そしてあの男、ヴェルゼの存在。

思考を切るように何の変哲もない普通の剣に見える鬼斬を振るった。見えない糸が風に吹き飛ばされ、切られる。固定された道が正しい

方向へと戻るのだ。

「……行きましょう。」

迎は無言で付いてきた。

「あ——」

少年は何かに気付いたようにして顔を上げる。

それまで摘んでいた木の実、それを入れた籠を放り出して、周囲を見渡す。そして呟いた。

「……誰か、来た。」

森の奥、呟いた声は誰に拾われることなく訝する。

「で？」

仁王立ちし、鬼灯は尋ねた。

「入れたはいいけれど、どうするのかしら。元凶の所に会いに行くのかしら。」

「……。」

迎は無言を通す。相変わらず、いや前以上に愛想がない。

会話をする気がない様子に、答えを諦める。

「そうしろってことね。」

結論付けた。

「——迎くん、あなたが先導した方がいいわ。」

暫くして、鬼灯は言った。

それには苦しみが混じっている。脂汗までが浮び、足下も不確かだ。ぐらぐらと揺れる視界。けれどそれは精神上の問題だけだ。実際には何も起こっていないのだから。しかし、だからこそ鬼灯には的確な精神攻撃だった。

「何……？」

実害のない迎が問いかけ振り返る。いつの間にか二人の立ち位置は逆に、迎が先行するようになっていた。

「この概念、異界^{わたし}にも聞くみたいね。さつきから人格を揺さ振られている。」

簡潔に状況を説明し、頭に手をやって中を整理しようとする。

「少なくとも、断ち切る概念の鬼斬には作用しないわ。この概念自体を切ることはできないけれど、持っていれば方向を示してくれるはずよ。」

ノイズが思考に走る。けれど、状況を整理するだけしておかなければ、今の鬼灯がいなくなるなら、きちんと引き継いでおかなければならぬ。

戦闘的性格である加奈は異界の力を行使することに躊躇いを憶えない。異界を受け入れているからこそ、余計に影響を受けやすい。

「方向はこのまま北、森の中心よ。」

強く感じる異界の気配に、顔をしかめ、腕を下ろした。

「……っあ、迎さん——。」

（入れ替わったか。）

迎は鬼灯の豹変に加奈から珠洲へと人格が移ったことを知る。

鬼灯の、珠洲へと変わった鬼灯の瞳が向けられ、それが不安に揺れ動き、水分気を含むのを見てしまつて、右往左往する彼女に背を向けた。迎は急激に疲労を感じ、今まで以上に相手をするのが面倒になり、無視して加奈の人格が示した方向へ進む。

「行くぞ。」

「……はい！」

迎の冷たい態度はしかし、珠洲には逆に心強く感じて、にっこり笑つて応える。

不安なのは珠洲の人格が司る基本的な感情だ。偽造の、鬼灯が持たない感情を作り出すための、吸収された魂の役割。

だからこそ、いきなりこんな任務時に説明もなく入れ替わられればそれが表面化し、浮き出る。迎の冷たい、けれど引つ張るような断言は珠洲にとっては相性が良い。

最も、迎は珠洲の性格をうつとしいと思い、どちらかと言えば加奈の性格の方が楽だと感じていたのだが。もう少し静かな性格であればより良いのに、と両方に対して思う迎だった。

「待て。何か、いる。」

道なき道を進み、次の藪を抜けるかという時。

（……子供？）

前方、緑の障害を除いたその向こうに広がるのは広場だ。森の中の、光の当たり、集まる場所。開けた部分。

その中央に子どもが木株に腰掛け、待っていた。

何かが来ることを待ち望むように、遠い昔から予言していたように、子どもの無邪気さで、その少年はいた。こちらからは斜め後ろ向きだ。

「……迎さん、あの子。あの子から歪みを感じます。」

横にしゃがんでいた鬼灯が真剣な目つきでそちらを睨む。通常人には見えない何かを見極めている。見えないのに確かにある、というのは異界全てに共通することだ。

「元凶、だろうな。こんな所にいるんだ、当然だ。」

判断は一瞬。子ども、というところに躊躇いは生まれたが、相手は異界。

出来れば生け捕り。そうでなくても、怪我は必須だろう。

異界の行使は見えない、ただの意思によるものであり、前動作もなく、遮ることも外部からは出来ない。だから、気を失うまで。戦意を喪失するまで。ボロボロになるまで。

戦う。あの幼い子どもと。

武器に手をかけ、踏み切る。

「ねえ。出て来なよ、そこにいるのは分かってるんだよ。」

こちらを見もせず当て、

「えっ……！？」

指で示されれば鬼灯の体が躍り出る。引き寄せられたように感じた。

その身体を掴んで押さえることは出来たはずだ。しかし迎はしない。能力も分らない相手にわざわざ姿を晒し、情報を与えるべきではない。対抗策を練られる可能性がある。

「こんにちは、お姉さん。」

につこりと微笑むのに鬼灯は、いや珠洲は恐怖しか覚えない。

裏がある、とか無邪気だ、とかそんなことを考えてるわけじゃない。ただ、この状況で笑えていることに恐怖する。

敵の前に引きずり出された一人の少女としての感想。

「……つき、みはその力を受け入れてるの？」

子どもに、問いかける。

それは彼女にとっては勇気を振り絞っての行動だ。迎は姿を隠したままで、今何か出来るのは己のみだ。言葉は防衛であり、攻撃でもある。鬼斬を手放し、何も持たない彼女の唯一つの武器。

「……。仕方ないよ、気に入られちゃったんだもん。この子は僕の一部。」

言葉に、一度何かを言いかけ、でも言葉は出ずに閉ざされた。

そして再び口を開いた時には諦めの、それでも授与への肯定を示した。

「人と関わるのが怖い？」

「っ！恐くないよ。」

反射的に子どもは返す。感情に揺さぶられ、瞳に涙が溜まっていた。それに呼応するようにして周囲の木々がざわめき、体を揺らしている。

「恐くないけど、あつちが拒絶した！僕を捨てたんだっ！」

何があつたのか、それは知らない。けれど想像するに難くない。

一人、この森に住む少年。年の割に細く白い、折れそうな肢体。長い前髪に隠された、色違いの瞳。

迫害？親から捨てられた？人々に拒絶された？

彼女には分からない。それでも、言う。

「もう一度、人を得ようとは考えなかったの……？」

かぶりを振る幼子。

（迷い子になってしまったのね……。）

どうすればいいかわからなくなった。そして、この森で異界となった。

それが現実で、結末だ。私たちが来ることで幼子の過去は終わる。今から、新しいものが、変化が訪れる。

「ねえ、私たちと一緒に来てほしいな。」

両手を広げる。もう、幼子の意思どおりに引き寄せられたりするようないことはしない。

彼女は受け入れる態勢を取った。さあ、飛び込んでおいで、と態度で示す。

「確かに君は普通じゃない。けど、だからこそ私たちは会えた。私たちは歓迎するよ?」

笑顔で促す。幼子が望んで、けれど手に入れることが出来ずに成長するしかなかった温もり。それは拒めない優しいさだった。

「……うん、この子の仲間の気配、感じるよ。お兄さんは、僕に近い。」

おなかに手をあて、同調する。

それは異界の気配を感じたのだらう。異界を行使する者、異界と同一化している者の気配。

少年は類似したものを迎に感じる。

「僕は、行っているの?そこに僕の居場所はある?」

彼女に確認する。すべてを預けていいのか、不安でいっぱいのか。かけ。

最初で最後の問い。それだけがすべてだった。

「あるよ!」

幼子は飛び込む。その温もりへ。

久しく感じるもののなかった、他人の温もり。母の愛情だった。

感情の揺らぎ

「……詳しく説明してもらおうか。」

待機所のテーブルに对面で座る迎と鬼灯。

軽くリン、森にいた少年の健康診断をして一息ついたところだった。とはいっても健康診断に含まれるのは通常のもの以外に異界用のものである。

現在はその結果待ちだ。博士がそのまま持ってきて詳しい話をする事になっており、三人でこの場に止まっている。

「えつと……調書に書きますよ？」

「いい。」

話せ、ということだろうか。相も変わらず口下手で無口なんだなあ、とホツとした心地で思う。

（でもなんでこんなに機嫌悪いんだろ。）

珠洲も相変わらずの鈍さで疑問に首を傾げつつ、リンを膝の上、抱き締めて答えた。

「この子、食べちゃったんです異界。」

あっけらかんと言いつ放つ鬼灯に迎は呆気に取られた。その素直な表情は惜しげもなく晒され、珠洲は微かな色に頬を染めた。

（迎さんが素直だなんて、なんか照れますね）

それはズレた乙女思考であつた。

「だから力が使えて、寝てる時とかは無効で、意識があるとこの子の許可なしに森の出入りができなくなってるんです。この子自体の出入りは、……出来るんだよね？」

「うん、僕が離れたら森は戻るよ。」

珠洲の言葉は最後にはリンへの問いかけとなった。リンも直ぐに答える。

「……なら、いい。」

「えっ？は、はい……。」

若干ふてくされたようにも思える、素っ気無い返事。自分から聞いたのに、と思う。

そんな子どもみたいな動作が目につくのだ。やはり今日の迎さんはいつもと違う、と思った。

そして沈黙が場を支配した。迎が無言で紅茶を飲み、珠洲は何うように迎をチラチラと見てそわそわする。リンは三人の中で一番大人っぽく、冷静に二人を観察していた。

「面白いことになってるようだねえ。」

「ひゃわあっ!？」

急に声をかけられて珠洲が意味不明な奇声を発した。

「博士、結果でたんですか？」

新たに増えた客人にお茶の用意をして鬼灯は尋ねた。

声をかけられたのは急なことだったが、彼が来たのは全くもって急ではなかった。だから驚いたのはポケポケしている珠洲だけだった。実はリンも驚いてはいたのだが、感情は余り表情に出ない性質である。そのことを自覚したのも珠洲のころころ変わる表情と照らし合わせての結果なのだが。

「うん、普通に普通の子だったよー。」

のんびりと答える博士は十分寛いでいるようで、珠洲も綻ぶように笑顔を浮べた。

「分離は吸収されて体になった以上、できないけどね。木の実でも食べたのかな？」

博士の問いかけはリンにされたのだが、珠洲の膝の上にいるリンは眼を合わせようとせず、逆にその視線を避けるようにして珠洲に抱きつく。

「嫌われちゃったのか反応がつかないんだけどねー。」

笑いながら迎の反応を面白げに観察する博士。迎は眉をひそめていた。

その先にはオロオロと対処に困る珠洲、鬼灯がいた。

「そついや鬼灯ちゃん最近その性格ばかりだね、どうしたの心境の変化かい？」

頑固な様子のリンを頭を撫でて宥める珠洲に次の話題が博士から投下される。

しかし、膠着した現状にはありがたいはずのそれはあまり珠洲に歓迎できる話題でもなかった。

「あ……、なんだか最近力が安定しなくて、リンに影響を受ける今の姿が楽なんです。制御を預けられるから……。」

少しばかりの説明をして濁す。

最近、調子が悪い。けれどそれは珠洲自身にも余り説明の出来る状態ではないからだ。

要領を得ない説明よりか現状をどうするかの方策を練った方がいい。つまり、事態の把握。

それには暫し、時間が掛かりそうだった。

だから、調子が悪い、という不安要素だけを告げておく。

「それで始終へばりついてるわけなんだ。」

「そうでもないのよ？」

言葉と同時にそれを体現してみせる鬼灯。眼鏡を取っただけで雰囲気が変わった。そのことを察してリンも席を隣に移す。話が本格的に仕事へと移ったのを敏感に感じ取ったのだろう。

「無理に変化しようと思えば出来るの。それに、いつも一緒ってわけでもないわ。」

リンは加奈へと変わった鬼灯に興味を移すでもなく、お菓子を摘む。二人は会話を続ける。迎は始終沈黙を保っていた。

「けどね、問題は他の人格にも影響が出てるの。いきなり凶暴化するかも知れないから、気をつけてね？」

冗談めかした言い方で虚言とも言切れないことを言う鬼灯。その手はリン捕獲任務の報告書に動く。そして書類として明確には書けない、極最近に始まった自身のことについての会話を行う。報告義務に従って、また周囲に多大な被害を出さないために、警告を発し

た。

「それに、力の制御もしにくい。手加減を間違えるかもしれないから。あんまり近寄らないほうがいいわよ。」

「だが、仕事だ。」

合いの手を入れたのは迎だ。博士の持ってきたリンの資料の中に任務書類も入っていたのだろう。こちらへ寄越されるそれに軽く目を通す。

「『踊り続ける紅い靴』『透明な姿見』『加護の腕輪』『干渉の耳飾』……沢山あるようね。」

「童話シリーズのオンパレードだ。どれも大したことのない。集めたものはそのまま自分のものにしていいそうだ。」

童話シリーズとは童話に登場する物を素材にした異界。異界として発見・確認しやすいのが特徴で民間に広がっている場合が多い。持ち主の好悪は激しいと聞くが、利用に関しては誰でも手の出しやすいタイプ。

確かに、数は多い。しかし、それだけに利点がある。

「……それは、気合が入るわね。」

鬼灯の精神は異界の傍にあった方が力は安定するだろう。付加の分、縛られる。

力が干渉しあい、制御が利きやすくなるだろう。

「そうそう。僕はこれから調査があつてね、出かけるんだけど、君らに夏梅をお願いしたいんだよ。」

立ち上がり、出かけようとした鬼灯と迎に言葉をかける。

「夏梅はね、今、定期検査中だから、後で合流すると思うよ？よろしくね。」

バイバイとにこやかに手を振る博士。その手にはティーカップがあり、紅茶が残っている。それを飲んでからこの場を後にするのだろう。

リンは無反応にお菓子を食べている。二人だけを残すことに躊躇いを憶えたが、特に言うこともなく、ただ頼まれた、と頷く鬼灯だった。

た。

これまでのお話 余話（前書き）

暫くの間、更新停止していました。

私事の方が込み入って中々……これからはちょっとずつ更新できると思います。えっと、がんばります。

これまでのお話 余話

これまでのお話。

女の子たちの園である学校に通うスズちゃんは毎日毎日、楽しく暮らしていました。

仲の良いおともだちはカナちゃん一人ですが、寂しくはありません。カナちゃんは何でもできる凄い人なので、凄く憧れていました。彼女と二人ぼつちでもちつとも哀しくありません。正義感溢れるカナちゃんはいつでもキラキラしていて、スズちゃんはいつでもそんな彼女を応援し、二人は友情の絆を強く結んでいくのでした。

そんな時、二人は学校のないしょ話を聞きます。夜になると裏庭のほおずきの木が光るといのです。そしてお願い事を叶えてくれるといいます。カナちゃんには夢があります。そしてそのためには多少の危険もちつとも怖くありませんでした。そして行動でもってそれを示したのです。スズちゃんは怖がりながらもカナちゃんにくつついて行きました。

——そして木が見えました。

それはピカピカ光るキレイな光景。夢見たいな、おはなしの中のような美しさです。

木の実は大きく、中には人形が入っているようで影がありました。地面にとうえいされて、スズちゃんにはそれがまるでランプのように思えました。

カナちゃんは夢を言います。そして、一瞬。

そこからは、スズちゃんは思い出たくありません。

ただ、その時からカナちゃんは変わってしまって、またビョウインに連れて行かれることになりました。スズちゃんは何故止められなかったのだろう、と悩み落ち込みました。

その時、スズちゃんはほおずきの木を調査するために来た人たちと会いました。彼らはふしぎなことを調べて、人にとって危ない事はきちんと解決するために行動している、正義の人です。カナちゃんのことを知った彼らはスズちゃんに協力を頼みました。

もちろんスズちゃんは賛成しました。カナちゃんが変になった原因を知ったら何とかできるかもしれない！不安も大きかったです。スズちゃんは正義のために勇気をふりしぼってもう一度あの夜のようにはおずきの元へ行きます。

——結果、スズちゃんは何も出来ませんでした。

前と同じように、それ以上に、思い出したいくない光景を見てしまったのです。彼ら二人の内一人、女性は死にました。木はもう一人によってなぎ倒されました。

スズちゃんはカナちゃんがどうなっているのか、と気になってピョウインに走りました。

カナちゃんはやはり、カナちゃんじゃありませんでした。そしてスズちゃんもスズちゃんじゃなくなりました。ほおずきの木と同じ存在になりました。人ではなくなってしまったのです。人としての生活は出来ないのです。

そうしてスズちゃんは自分と同じような存在を作らないため、ふしぎで危ないことをするあの存在を倒すことに決め、彼らの仲間になることにしたのです。

スズちゃんは戦い続けています、今も。

……という感じです、夏梅さん。」

「つまらないよ。」

そんな言葉が返されて珠洲は苦笑した。

ここに来た来歴を聞かれただけなのだ、別にお話形式にしないで良かったのである。それをわざわざこの形で話したのだから、面白く感じて欲しいものだ。自分の半生に対して面白い、と感想を抱かれるのもいかなものだが。

「何してる。さっさと、仕事行くぞ」

「あつ……待ってください！」

ぶっきらぼうな声の彼。けれど、それは単に不器用なだけなのだと思う。人と接する事を覚える前に人と接触を断つことを覚える必要があった。

けれど、別に感情がないわけではないのだ。表に出すのが苦手なだけで、表に現われにくいというだけで、感情がないわけではない。

——“異界”という化け物になってしまった珠洲とは違う、本当の意味で感情をもつもの。

記憶から再現するだけで何の感傷も持たずにただ自然として表情を作り、情報から模範のような感情を持ち出す今の珠洲とは違う。

——ほら、今も。

扉を開けて待っている。さりげない動作。歩く速度は彼自身の速度よりも遅く、歩幅が小さく動きの鈍い珠洲にあわされてた歩調。

彼は実に人間らしかった。人間から外れていながら人間を模倣する珠洲とは違って。

赤い靴の自殺と鏡の蜘蛛の物語（前書き）

長さ的な問題で二つの話が入ってます。

タイトル通り、前回に示した『踊り続ける赤い靴』と『透明な姿見』の収集です。童話から異界として伝承に引っぱりましたが、どうにもその感が薄い。——ご赦免を。

少しばかり、伏線が入ってますよ。分かりやすすぎて何ともいえないですが。

赤い靴の自殺と鏡の蜘蛛の物語

「まずは『踊り続ける紅い靴』ね。」

今回は徒歩だ。お店で通常の売り物として出していた靴が曰くつきというところで店に置かれたままなのだ。扉を使つてはいきなり街中に出現することになる。だから本部から直接、問題の店へと行く。遠ければ道をつなげればいいのだが、近隣なので電車を乗り継いで向かう。それが“普通のこと”のようで、鬼灯は落ち着かない気持ちになった。捨てたはずの人間性を人格が叫ぶ。その変な感覚を珠洲は首をかしげて表す。

（迎さんが隣にいて、電車に乗ってるなんて……なんだか、面白い）一般人のように平和な光景に迎がいる。そのことが珠洲には珍しく、微笑ましいものに思えた。そして、感覚と経験で思う。電車は、初めてだ。鬼灯は知識が豊富だけれど、経験は少ない。何故なら木だったから。木だったから、経験を得ることがなかった。

（でも今は、歩けるんです。鬼灯にとつての経験はあの時から。私に入ってから）

珠洲の身体に異界が入り込んで、そこからは初めて続き。それがいいことだったのかはわからない。鬼灯の本体は無くなった。残された子どもである鬼灯しか今はいない。他の子どもがいるのかどうかも分からない。鬼灯は鬼灯の木の一部でしかない。その統合機関、親はいなくなつたのだ、意識も記憶も共有は出来ない。

何も知ることが出来ないという状況で、経験をj得る事は鬼灯の欲を満たす。存在意義を成り立たせるものである。だからこそ、鬼灯は一つの個体として活動する。

「大きさは使用者に合わせて変わるから問題はないな。」
確認するように迎は言った。

店で試した時は抜群に心地よく、試着者はその魅力に取り付かれた

ように買っていく。けれど、それは数日も立たずに戻ってくるらしい。持ち主がその靴を穿いて歩くと、例外なく事故が起きる。交通事故、線路転落、陥落事故。悉く、足が歩いていつてしまうように飛び出す。

「なんだ、普通に穿けるじゃない。何が問題なのかしら？」

赤い靴を穿いた少女は薔薇の中に突き進んだが、鬼灯にはそんな力が現われない。異界であることは穿いてみてわかったが、その能力は低い。誘発的に出来事を呼び寄せることと瞬間的な能力行使以外、極めて低い能力。

「上位の異界には効かないってことなんだろう。」

そう、結論付けて迎も解決の判を下す。

「『透明な姿見』に正面から映された者は透明になったように行方不明となる……ね。」

またもや電車かと思えば車の出迎えがあつた。老舗のお嬢さまが姿見に映された者らしい。その親が依頼人。物語は白雪姫。その中に出てくる魔法の鏡がこの異界。

「鏡は元々“向こう側”に繋がりやすいからそのまま引き摺りこまれたのか、と思ってただけ、それでもないらしいわね。」

応対して異界を分析する。一応、迎にはすぐ対応できるように鏡の後ろに待機してもらおうと思つたのだが、そんな必要もなかったらしい。封鎖された部屋に浮ぶ、霊体の意識。彼女はどこに行っていない。ここにいるが、見えなくなってしまっただけ。

「影を引っ張られて、本体が向こうに行ってしまった。入れ物のなくなつた心はこちら側では見えなくなつた。」

「救出法は？」

「影を引き出せば本体は帰ってくる。でも、魂との鎖が劣化したり

遠くに行き過ぎて千切れていたりする者は、無理でしょうね。」

けれど彼女には鎖がついている。それを引っ張って、強度を確かめる。劣化とは言わないまでもあまり新しいものじゃない。丁寧にゆっくり、そつと扱わなくてはならない。

「鏡よ鏡、一番美しいのは誰？」

見通す先、鏡の内部に捕らわれた少女の体が映し出された。

「引っ張り出してくるから、出てきたら鎖を切ってくれる？」

鬼斬を手渡しながら言った。迎に鬼斬を預けることには未だ抵抗があつたが、鬼斬はこの手の異界と相性が良すぎて一撃にして消滅せしめるだろう。勿論、内部のものも含めて。そして他に方法を探るうえにも、外からの攻撃では鏡が壊れてしまう。潜入は必須だった。（人間の身体で、いつまで入りこめるかしら？）

人間の身体を引き込む鏡だからそんなに心配もいらなだろう。

時空に迷うまでに相手から誘いに乗ってくれるとうれしいんだけど。鏡の異界に触れれば、身体が沈みこんだ。鎖を辿って目的の場所へ向かう。

（どうやら、相手方は出かけているみたいね）

こんなところで戦闘になっても困るんだけど。さっさと抜け出しましょう。

影を拘束する荊を加工された異界の短剣で切る。

しかし

（早いわね）

呼び鈴みたいなものでもついていたのか、随分と察知するのが早い。その素早い動きでほとんど距離を詰められる。細かく動く手と大きく空けた口。ネバつく口内と鋭い歯を見せ付ける。幾つもの赤い瞳の一つと目が合い、不快を感じて鬼灯は短剣を放つ。

蜘蛛の複眼にそれはずぶり、と刺さり込む。随分柔らかく入ったように見えたのは短剣の性能特性によるものだ。痛みに奇声を上げて怒りの度合いを上げてゆくその生物から逃げるように背を向ける。

鎖を掴み、少女の身体と固定されているのを確認した。

（強度は十分。後ろのあれに鎖を噛み切られないよう、注意しなくちゃいけないわね）

少女の身体はこの空間内のせい、魂の重みがないせい、ずいぶん軽い。けれどその分意識もないので先に行くように促して自力で脱出させることも叶わない。鬼灯自身が荷物のようにつれていかねばならないのだ。

少女の身体を担ぎなおし、鎖を巻き取り回収しながら進む。道に迷わないよう、慎重に進みたかったのだがこれでは無理だった。すでに蜘蛛は回復し、こちらに向かってきている。

武器となる短剣は蜘蛛の眼に刺さったままである短剣一つのみ。

あの蜘蛛ならば鬼灯の方が上位格であるが、異界の攻撃なら絶対防御が出来ても物理攻撃になってしまえば鬼灯の方が圧倒的に不利だった。体格もそうだが、この空間の支配権は向こうにある。身体能力が上がったところで所詮は人の身体。ただの暴力には人間の体は耐え切れない。

（直接戦闘は避けるべき、なのよね。もしくは超近距離で応対すれば小回りの聞くこつちの方が有利なはず）

蜘蛛は遠距離攻撃にしか持たない。しかし、それが何の有利になることが。

「火遊びは好きかしら？」

懷に忍ばせておいた紙。夏梅の作った札である。炎を起こす術式の書かれたもの。本来、異界には扱うことの出来ない異界対策用の戦闘用具である。それを、封印の施された——紐で縛られた——状態で持つ。そのままでは発動しない。

すでに鏡の出入り口は視界の先にある。鎖を通して空間を繋いだままの状態、蜘蛛の異界が形成したこの世界へと清浄なる光を降り注ぐ。

鬼灯は少女の身を置き、その場から離れるように蜘蛛へと向かう。かの異形からは一瞬としか思えない速度で近寄るが、蜘蛛は条件反

射か動体視力か、その動きに動きで持つて対応する。頭上近くに取
り付く鬼灯に向かい腕は振り上げられ、糸は空にばら撒かれた。目
的を持つように鬼灯へと迫るが、それはかわされる。着地の姿勢か
ら素早く立ち上がり、疾走すると前転するとその眼に突き刺さる短
剣へと手を伸ばして掴む。それを支点に地面へと前転するようにし
て着地。腕の攻撃はバランスを崩させ、糸は自身を拘束するように
蜘蛛の身体へと張り付く。

「哀れなものね……。」

無様な姿に背を向けて、避難した。

と、キオオオオオオオ！！と蜘蛛の奇声が背後に上がる。炎上す
る。

（早く出なければ……）

空間を形成していた主が消えたのだ、現実でも異界でもないこの
空間はただ歪み、消滅する。

「っ」

一瞬の判断で少女の身体を鏡の向こうへ突き放す。

「っあああ——！」

一瞬後に襲う痛み。身体がバラバラになるかという衝撃に鬼灯の
体は空間を転がった。蜘蛛の異界の一撃が鬼灯の身体を撃った。

「っっほ」

腕を支えに体を起こせば唾液と交じり合った血が空気とともに吐
き出される。身体は動く。しかし、その動きはどこか鈍く、先ほど
までの素早さは完全に消え失せていた。

一方の蜘蛛は炎に身体を焼かれ、今にも命尽きんとしながら瞳を
ぎらつかせて鬼灯を見ていた。それは怨恨。赤い色彩で照る眼には
同じ異界ながら脆くひ弱な存在の内側に寄生した同胞。自らを滅ぼ
さんとした、上位者。

「己——許さんぞ……っ！！」

その弱者なる肉体で見下す上位者に向かい蜘蛛は言葉を吐き出し
た。そのことで鬼灯の誤解も解ける。なぜ、あの獄炎で息絶えなか

ったのか。甘く見すぎていた。実力を分かりやすく数字で表すとレベル5の自分が居てレベル1の相手を倒そうと思っていたらレベル3だった、というくらいだろうか。その驚きに値する。尤も、どちらも低次元だということには変わらない。

「話せたのね、あなた。勘違いして油断しちゃったわ。」

口元に残る血の痕を無造作に拭い、しかし身体は力が抜けたまま鬼灯は蜘蛛と正面に相対する。逃げられない状況。瀕死なのはどちらも同じだった。

痛覚はない。負荷がかかっている為に動けないだけだ。指令に順じて回避運動を行動しようとする身体は身を起こそうと何度も手と足で自らを支えようとする。しかし、どうにも上手く行かない。神経系に衝撃が走ったのか、立ち上がる行動が出来ず四つん這いからずしゃり、と地面にぶつかる行動にしかない。

（もう、駄目ね——）

笑顔で、眼を瞑る鬼灯。小者、と油断していたのはこちらだった、と反省する。異界としての本能はこの危険に身を震わし、警告を発するが、人間の体は動きそうもなかった。

己の命を諦める思考をしながら鬼灯は己を支配し始める不穏なものを理性で押さえつけていた。破裂しそうなほどの衝動は動かない身体を動かそうとして、無茶な指令を飛ばす。

——殺せ。

蜘蛛の攻撃、猛打が始まろうとしていた。

——殺せ。

恨みを持った瞳は血のように赤く、蜘蛛の身体は焦げ臭かった。その無数の腕が振り上げられている。今にも放たれんとする。

――殺せ。

鬼灯は本能から来る指令に、自身の意識が飛ばされそうだった。

「遅い」

一閃。

白刃が煌く。そして、鬼灯の目前、蜘蛛がズレた。

「せつかちねえ……」

苦笑する。その身は動かないまま、表情だけは浮かんだ。

悲鳴すらを残さずに消え失せた蜘蛛。現れたのは迎だった。その手には鬼斬が握られている。鞘という封が着いたまま、それを振ったそうだ。威力は抜き身より減退しているが、その異界の猛威は十分に振るわれているだろう。すぐさま出なければ時空の狭間に閉じ込められしう滅してしまう。その出入り口はすぐ背後にあった。「彼女は？」

「もうすぐ眼が覚めるだろう」

迎は鬼灯に近寄ると、無造作に抱き上げた。一瞬驚いた顔をした彼女だが、じっとして迎にしがみ付く。

鏡の膜は粘つくように二人の身体を包み、やがて世界を白く埋め尽くす。余りの眩しさに眼を閉じると、違和感。不快な圧が消えていた。

目を開ければ部屋に戻っていた。主は未だ眠りに着いたままであ

る。穏やかな呼吸が静寂に満ちている。

「姿見、は手鏡に加工してもらいましょう。その方が持ち運び便利
よ」

鬼灯は回復してきた身体を確認しながら笑顔で提案した。

何かが芽生えた 前編（前書き）

シリーズで戦闘場面で前後編です。

何かが芽生えた 前編

「『加護の腕輪』は飛ばして『干渉の耳飾』なの？」

「ああ、腕輪の方には別件が混じってる。最後にする。物を揃えてからの方がいいだろう。」

ふうん？

まあ、いいか。私には拒否の権限もない。順番が変わる程度なのでそれほど気にすることもない。ただし別件とは何ぞや、と野次馬根性のようなものが芽生える。それに首を傾げたが、それは予感だったのかもしれない。不吉な、狂ったような赤に染まることへの不安。

——今日は鎌のように鋭い、下弦の月が出る。

「『干渉の耳飾』回収、と。簡単だったわね？いつもいつもこうだと簡単でいいのだけれど。」

「油断するな。今回は引き取りだけだったが、それ自体の能力値は高い。」

迎の言うことは間違いない。干渉の耳飾はその名の通り“干渉”の異界力を持つ。意志を持たない異界であるが故に使用者の意志により能力が具現する。装飾者の思うように他人の思考を捻じ曲げ、また望まずとも使用者に他の者の悪意を突きつける。良い意味・悪い意味の両方でその場に干渉する存在。人々との関係性に影響を与え、感情を揺さぶる能力。

「異界はそれだけで自立的存在。だから、人が関わらなければ何も問題は起こらない。互いに領土を弁えて、それぞれの距離を保てば、私たちは隣人として互いを受け入れられるのに」

——拒絶。そして過剰な受容。

異界を排除すべき対象として行動を取るものが居れば、逆にその

能力をしようとして接近を図るものが居る。この耳飾もそうだ、使用者が善人だったから良かった。しかし、それも長期使用と続ければどうなったことか。精神を狂わせ人格を歪ますこともありえた未来だ。

鬼灯は自らの耳へと取り付けられた小さな存在に触れる。異界と異界との接触で空間が揺らぐようにして僅かに鈴のような高い音が鳴ったが、その能力が発現されるでもない。

この耳飾——干渉の力を利用しようとすれば、その威力は馬鹿にならない。干渉し、人の意志を捻じ曲げ、洗脳することさえ、出来たかもしれない。そんな恐ろしいものが人の世に持ち込まれ、通用されてゆく。それは混沌とし、独裁を作り上げ、世界の構築を変えてしまう力だ。

……他の異界にしても同じ。人の手に渡ることはそれだけ人の世に影響を与える。しかし、それが使用されることなく、そこにあるだけでは問題がない。不干渉を決めてしまえばいいものを、人は呼び起こす。そして災禍を自ら起こす。人の手によって創られる異界が、人という存在の恐ろしさを物語る。その異界が偽物でない、同等の力を持つ異界としてあるだけに。

「来るぞ」

説明もないまま待機して、しかしその言葉の直後に風が吹く。どつと流れる空気に髪が煽られ、それを片手で抑える鬼灯。そして彼女とは対照的にまっすぐ前を見据える迎。それが待っていたものだった。

鋭く、けれど小ぶりの刃物の筋を空気に描く風は鎌鼬のそれを似ていた。渦の中心に、影が浮かぶ。

「——夏梅」

後から合流すると聞かされていた夏梅は今まで接触することなく、

ここまで着た。次に向かう先以外は全て回収を終えているのだ、今更になって、と思う。けれど逆に考えればこの最後の段階となって彼は合流してきた。それはこの加護の腕輪への警戒だろうか。

鬼灯は人間のように気を緩める、ということも警戒するということもない。全てが全て、いつも通りに気配を整えている。何かを気にするわけでもなく、本能からその存在を直感するからだ。だから、気分が安らぐということもないし、気を引き締めるということもない。あるというのならば、考え直す、認識し直すということだけだ。認識は油断に繋がるとはいえ、態々事前に息を呑む、覚悟などということは一切ないのだ。恐怖がないから、とも言えよう。

——けれどこの時、鬼灯が感じたのは不安。そして予感だ。恐怖の前兆。

掌に搔いた汗を拭うことなく、手に持った鬼斬を握り締めた。自らの内から発せられる警告はヴェルゼに会った日から続いていた。心に立つ波は最高潮に達していた。

「案内は僕が頼まれてる。3人だけで行っよ。」

夏梅が促すのに、言葉をかけた。尤もそれは確認のようなものだった。

「『加護の腕輪』でしょ？害意があるような名前じゃないわね。」

『加護』という名前からは悪意は見えない。それどころか、使用者を守る意志を感じ取れる。

「加護という名称は的を射ている。が、その使用者が悪だ。悪人が守護を使えばそれも悪になる。」

異界の能力を自らの利益に還元しようとする者が使用者。異界には主が相応しいかどうかを判断するものがないからこそ、誰でも使用が出来るからこそ、その能力は悪に染まりやすい。悪を守ることですえ、異界は厭わない。

「名のある盗賊——その当主が持つてる。實力もかなりのものだけど、彼等は一般人。手加減、忘れないで」

「……彼らは悪党なのでしょう？」

悪党ならば傷つけていい、というほど傲慢でも人間の世界に加担してもいないが、自業自得だろう。異界の力をこっちに持ち込んで影響を及ぼしているのだ、再び繰り返さないと限らない。手加減などとしてはこちらの達成度が高く、安全性も低まる。実力が拮抗するのならば、それは生存を分けることになるだろう、指示だ。

「それでも人間だ。僕らが敵対するのは異界。人間を殺せば、それは法の下に罪を背負わされる。立証できないとしても、罪は罪に変わらないからね、命は購わされる」

「——皮肉ね」

人を守る組織が、人と戦う。守る為の道具を使って悪事をする人と戦う。

「作戦、なんてものはないよ。けれど、ソレはリーダーが持つてるんだ。そいつをおびき出さないと、どうにもならない」

森の中、自然に出来た広場に居を構えた標的を見据えて夏梅は言った。遠めにも一際豪華なテントが目に入り、けれどその横に隠れるようにしてある小さな一人用のそれに目を向けた。幾つも張られたテントの外、見張りなのか武器を携え立っている者、各自に自由な時間を過ごす者が広場にいる。見えているだけで二十人は下らない。——彼等は立った三人、そんな場所へ足を伸ばした。

「お兄さんたち、こんにちは」

出迎えに来た男たちをにつこり笑って鬼灯は待った。

夏梅の集めたところによると、盗賊は金以外の物には興味がないらしい。女子供も極悪非道に殺す代わりに、酒にも女にも手をださ

ない。純粹に金を奪うことに興味があり、金儲けが目的。けれど殺すこと、虐殺はよくやる手段。

「お嬢ちゃん、こんな時間にこんなところうついてどうしたよ」

「そんな子供も引き連れちゃってさ。俺たちが誰だか知らないのかい」

からかうような問いかけには厳しさが含まれていた。笑いあう彼らの瞳は鋭く、冷たい。残虐性を湛えながらも理性的なそれは、命令か何かで抑え籠められたものだろう。獲物を見る凶暴なその視線は変わらずそこにある。

「知ってるわよ。盗賊、なんですってね」

がらつと雰囲気が変わる。殺気立つ男たちに、隣の夏梅が身体を固くするのがわかった。警戒、というよりも感情を押さえ込むようなその雰囲気は人形のような無機質を漂わせる。只管に固く、無感情という一点に集中している。

けれど鬼灯は変わらず軽い笑顔を浮かばせて対応した。

「話があるの。お頭さんに会わせてもらえると、嬉しいのだけれど」

夏梅と鬼灯が出て、迎は待機。先ほど言ったように作戦なんてものはなかった。ただ、女子供の虐殺が好きということで、その対象者である二人が出ただけのことである。迎が出ても一発で戦闘になることがわかっていたからだ。少なくとも、楽しみながら殺したい側である彼等は穏便に捕まえ、甚振ろうとするだろう。

「何の用だ、それが言えなきゃどうにもならねえな」

隠すこともない殺気は『お頭』という単語により一層激しいものと成果てている。けれど、怯むことはない。人外であり感情を持たない鬼灯は言うまでもなく、人の身でありながら人外を相手に第一線で戦ってきた夏梅も同じく。逆に、盗賊の方が二人に不気味なものを感じ始めるほどに、彼等は堂々としていた。

「言えるわよ。——教えてもらいたいことがあるの。うつん、持つ

ているなら渡してもらいたい、かしら」

交渉を導き出させる言葉に盗賊は一瞬呆気にとられ、馬鹿馬鹿しい、とばかりに殺気を霧消した。何の冗談か、と二人に笑いを向ける。か弱い、高校生ほどの少女とそれよりもまだ幼い少年に何が出るというのか。

「それは何のことだ？首、だなんて言わねえよな」

笑いの賭け事のように飛び出した言葉は冗談にしても過ぎた言葉だったと気づいたのは少女がそれに表情を変えることもなく、素直に言葉を返したからだ。

「違うの。勿論お金なんて言わないわ。逆に、それを渡してさえくれば出来る限りのものは用意できる。お金なら国家予算ぐらいまでは譲歩できるわ。地位も用意できるし、戸籍も、市民権も」

何を言っているのだろう、と首を傾げ顔を見合わせるものが多数。盗賊はこの少女の迫力に、ペースに巻き込まれ始めていることに気づかないでいた。変わらない微笑は表情をうまく隠し、いやそれが常備のものであると認知させ、恐ろしいほどに平静な少女に対しての違和感が次第に大きくさせる。この少女は最初から最後まで本気でものを言っているのだ。頭でも狂ったか、と思うがその瞳には狂気も何も映っていない。――偽りのない言葉だ。

「盗賊に物をねだるなんざ、えらく肝の据わった嬢ちゃんだな」

冷や汗を浮かべながら、盗賊は言った。けれど、その本心は自分のほうこそ肝が据わっていないかのごとく、後退りする。精神的に追い込まれていた。見えない恐怖に犯されていた。あの瞳と瞳を合わせるだけで鋭いナイフでも首に向けられている気分になる。

「――あんたにそれだけ価値のあるものなんだ、相当なものだろう？やと思うのか？」

凜とした声はその場にやけに響いた。“ヤイルさんだ”“副長だ”などの声が続く。威厳があり、それなりの格を見せ付ける、威

圧。それに盗賊はさわめき、その前を空ける。一直線に、鬼灯へと向かう、その道に男は立っていた。

知的な風貌は同じ衣服を身に纏っていて尚、盗賊の野粗からは一種、異様。参謀と思われる、鋭い観察の瞳が鬼灯へと向けられていた。そして同様に、鬼灯もまた、彼を観察しながら交渉を続ける。

「私の価値と世間の価値が同じだとは思わないわ。あなたたちにとっての価値も、一緒だと思わない」

「けれど、私にとっては何を変えても大事なものの。形見、とても言えばいいかしら」

ああそうだな、俺たちにとってはちつぽけな価値だろう。形見、なんてものは大抵くだらない、思い出か何かにしがみ付いたただ古いだけの長物。意味のないガラクタだ。だが

「価値なんてそれ一つありゃあいもんさ」

そう、その一つの価値だけで十分。そいつにとって大事なら、それを質にすることもできる。そいつにとって本当に大事ならば、下手なことはいらない。物が取られている以上、できない、と言うべきか。——そこまで考え、ヤイルは笑う。

皮肉に嘲りを乗せた表情。それは最初盗賊らが浮かべていた下品でどうしようもない欲望に満ちたものでも、ただ一人の少女に不気味なものを感じ冷や汗を背後で笑った貼り付けた笑みとも違う、暗い満ち足りた欲望の笑顔。理性の仮面をつけた、猛禽類のソレ。

「それほどに大事なら、文字通り何に変えても取り戻してもらおうじゃねえの」

ヤイルは紡ぐ。

「代償は——いや、その前にその子供は何だ」

視線が移動する。

先ほどまでは全く気にも留めなかった、いや気づいていなかった

その影。いつの間に、と思う。気のせいだったはずの不気味な不安が一気に這い上がる。

「彼は受取人よ。私がどうなるかわからない。だから、彼に預ける」「逃がすとても?」

二人ともを殺してしまえばその物を失うこともなく、殺人が楽しめる。その方が楽だ。この女がどうやってここまで来たのか知らないが、この場所を漏らされることもなく、何かしらの噂を立てられることもない。

「自衛はできる。それに、二人とも殺すつもりなら、最初から問答無用じゃない? それこそ、交渉を持ち出した時点で。あなたたちは馬鹿じゃない、そう評価してるのよ」

少女の――女の口調は丁寧な口ぶりではない。言葉だけを聞いていればこちらを挑発する目的のように思える。だが憤りを感じない。何故だ。

見下すような、遥か高みからの高圧的な物言いのはずなのにそれを感じさせない。それが当然であるように思える。自信に溢れ、不安など欠片もない。あくまで対等。

「その子供が俺たちに危害を与える可能性は?」
盗賊と知っていて赴いている以上、自衛が出来るというのならそれなりの手誰。子供とは言えども油断が出来ない。尤も、年端も行かないガキ一人に殺されてやるほど俺らは甘くない。逃がす可能性は万一にあったとしても、だ。

この霧深い森の中ではいくらこちらの手数が多いといえども、搜索するのには手間も時間もかかる。相手が少数とはいうのは逆に見つけづらくなる。こちらの被害も考えねばならない、ということか。

「ないわ。彼は私に何の感情も持たない。私がどんな眼に遭おうとも、使命を果たすだけ」

少女の微笑みは他者を魅了させるものへと変わっていた。余裕のものであって、それは少女の運命に対する心構えを見つけ出せた。

少女は——代償に自身の身を要求されることも、命も選定の材料となっていて、に気づいているのだろうか。賢いその頭脳はその後の運命が嘆き苦しむと見据えているのだろうか。

まさか年頃の少女が盗賊相手に交渉を持ち出してただで済むとは考えていないだろう。それほど頭の回らない者ではない。逆に命を取られることも考慮に入れて、だからこそ自分以外の者を連れて来たのだろう。それが子供だとして、その長所は小さく素早い。油断を誘うなど思いがけない発想を持つ。けれど、それだけでは圧倒的な優位性は変わらない。

——ならばこの余裕はどこから来るといつのか。
ヤイルは自身の内に本能的な恐怖とともに好奇心のような熱いものが灯るのを感じた。

「——聞こう、ソレは何だ」

息を呑むのは主に盗賊の側だった。ヤイルが交渉に応じるとは思わなかったのか。

鬼灯は余裕のまま、唇に浮かべた微笑を深くしただけだった。

「腕輪よ。ブレスレット」

満面の笑み。それが深い森の中、感情を持たないはずの彼女に浮かべられた。

「『加護の腕輪』——あなたたちのボスが持っているはずの、その品」

鬼灯はヤイルの背後に現れた大男を見据えて、言った。

「嬢ちゃん、肝っ玉が据わってるな」

野太い声の大柄な男。その顔には大きな傷跡が真一文字に走り、肉体は鍛え抜かれて服を窮屈そうにしている。きちんとした製法でなく、破かれたような後の残る肩口から晒された腕にも刀傷と思しき傷跡が幾重にも並んで太くこつこつとしたそれを飾り立てる。誇

りを持つ歴戦の戦士のようにさえ見えるが、それは間違いだ。彼は悪党であり、その心根は知らずとも、その行動は悪に染まっている。ヤイルが現れたときと同じく誰かが“長”と呼んだ。

男の視線は広場全体に向かい、盗賊らはざわめきを一気に静め、その場を離れた。

それぞれに持ち場があつたのだろう。外的に対する警戒は十分にしておく、という厳肅なルールはこの盗賊らにも適応されるのだろう。理知的な風貌のヤイルはともかく、この男——見た目以上に頭が良く回る。

「はじめまして、お頭さん」

「おう、ハジメマシテだな。だが、もう二度と会うことはない。初めても何もないんだよ。盗賊をなめちゃいかん」

男は気のいい返事をして、脅しのような言葉を吐く。その腕にはしっかりと目的の物があつた。太い腕には似合わない、繊細な装飾の金鎖による女物の腕輪。紅色の宝石が装飾として付されていて煌々と自らを主張していた。

「約束事を破るとは思わないのか？ 命があつての品だろうに。命を刈り取ってから、奪い返せば済む話じゃ」

豪快な笑みを見えつつも冷えた瞳をして男は言った。けれど、それ以上に冷えた声音で鬼灯は返す。

「——さっきも同じ話をしたわ。私を殺すなんて、そんな隙があれば逃げ切っている」

「……そうじゃな、まずは代償をもらうか」

その価値を知っていると見える。盗賊ならば利用せずにはいられないだろう。いや、誰だつて利用するはずだ。着けておくだけで自らの身を守る盾となるアクセサリーなど喉から手が出るほどの品物。それを望むならば代償は大きい。代償が何か、と明確にせずとも暗に言われていた。逆に言葉にしないからこそ、何が望まれているかが分かるというものだ。

「駄目よ。この子が帰るまでは、駄目。譲歩しても同時だわ」

相手方は夏梅のことまで範囲に入れて考えている。当たり前だ。女子供を切り殺すのが好きな連中に対し女子供だけでこの場に赴けば自ずと知れる。

けれど、だからこそ、連れて来た。これだけの餌があつて尚、交渉に応じる素振りもみせないことはない。ここに迎がいたのならば、警戒してそれを見せて来る事はなかっただろう。隠されて、終わりだった。そうなればこの盗賊たちをどうしたところで、こちらには場所が分らない可能性がある。手の出しようがない事態には陥らせたくなかった。

「——好きにしろ」

放り投げて遣される腕輪に鬼灯は笑んだ。男は背を向け、もと来たテントへと帰ってゆく。

「じゃ、持って帰ってね」

「……ああ」

無愛想に返して、一度だけ夏梅は鬼灯と視線を合わせた。その瞳には微かながら心配のようなものが浮かべられていた。作戦の成否よりも良心がこの時ばかりは勝ったと見える。けれど鬼灯は笑みを浮かべたままだ。そう、心配などする必要は最初からない。

軽い感触の腕輪をシャランと音を立ててその小さな手の上に落とした。紅の宝飾は輝かしいばかりの色を鮮やかに放っている。

「さあ、お楽しみと行こうか」

夏梅の遠くなる背を見つめる鬼灯に、ヤイルの言葉が掛かる。代償に自らを差し出すとしても、目的だけは果たす必要があるのだ。それがルール。

——尤も、抵抗しないとは誰も言っていないけれど。

「待て坊主！」

森の中、自然に出来た広場から遠ざかること数キロ。幾つもの影が小柄な一つに追隨するように自然の迷路の中を動いていた。それは鬼灯が交渉したはずの盗賊らが夏梅を追っている光景。——鬼灯との約束を破ってまで盗賊は追いかけてきた。

「ちっ！すばしっこい」

「おい！妙な技を使うぞっ」

そう盗賊らが思うのも無理はない。夏梅は異界に対する脅威として育てられた。術符の使い手でもあって、その子供という不利はあっても、その戦闘経験は彼らよりも長い。能力を使えば、また戦闘スキルだけで言っても、夏梅は盗賊らを相手に優に勝てる。けれど、だからこそ、この状況というのは夏梅にさえ不利だった。

「つやりにくい！」

人を殺さない。——それは夏梅の攻撃力の高い能力では相当な困難だ。異界という化け物相手に戦う為の技術は、けれど人を相手にするには高すぎる技術だ。

「呪縛！」

集中を要する術式を移動しながら多数相手に行く。それだけでも天才的であるが、戦況は変わらない。森の中とはいえ、森は夏梅に味方せず彼らにも味方しない。リンを連れて来れば良かったか、と思うがフォーマンセルは目立つ。とりわけ子供が多すぎる。団体行動今回のような任務には不向き。

「三線結界！」

符を三方向に投げ、それらを角に空間を分け、中から出さない。本来は異界の攻撃に対する守りとなるが、内側の強度も強い。数人捕まった者もいるが、まだまだ追いかけてくる。

数ある術式の中、使えるものは補助系ばかりだ。呪縛で鳶を動かして拘束しても単体にか効かず、また刃物で切り付けられれば取れしてしまう。逃げるだけの時間が欲しい。

「何処まで着いてくるつもりだ？」

あの場に戻る為の時間が……と汗の滲んできた自分にそんな余裕があるのかと問いかけつつ思う。手に握られた安い輝きを放つブレスレットが汗で滲む。

何かが芽生えた 後編

「さあ、約束だ。——代償をもらおう」

不躰な他の盗賊の視線も殺し、丁寧にテント内へと案内されるのが鬼灯には逆に不審に思えた。さっと内側のカーテンを閉めれば密室になった。ヤイルの雰囲気は甘く、恋人でも口説くようなそれだ。腰を抱く腕にも、下卑たものは感じられない。あくまで知性的に、けれど寢所へと誘ってくる。……そういう約束だったのでそれについては文句を言わない。代償は鬼灯自身であり、鬼灯の所有権は盗賊たちだ。その身が汚されようと、切り刻まれようと、何をされても問題はない。ただ、訝しみを覚えるだけ。武器の点検もしないとは、この男にしては無用心すぎる。

瞳が合わせられて、言葉もなく唇が重なった。吐息が飲み込まれ、舌が入り込む。けれど乱雑に荒らすでもなく、唾液を交わす。身体は抱きしめられても押し倒される気配はなかった。瞳には確かに欲望が灯っていたにも拘らず、そっと唇は離れた。

やはり、他の者たちとは違う。また、交渉に自らを差し出した者に対する態度でもない、と鬼灯は息を整えながら思った。

「抵抗はない。身体が震えもしない。——けれど、慣れているようには思えない」

確かめるように口を出すヤイルに、鬼灯は初めて笑顔以外の表情をこの場において見せた。

「そうね、あなたは慣れているでしょうけれど、私は初めてよ。けれど、何処に震えることがあるというの？」

疑問だった。純粹な、知識欲。鬼灯の本心から来る、人間へと求めるもの。皮肉でも何でも無い、単なる好奇心。それは鬼灯にとつては何よりも大事なもので、腕輪を取り返すために交わした、“何

を代えても大事”よりも大切なものだ。そのために鬼灯は存在している。意味であり意義理由。この人の世で知識を蓄えるのに組織は非常に便利だ。しかし、だからといって目的と手段とを取り違えてはならない。

「初めてのことには不安が起こるものだ。それが望んだことでも、覚悟していたことでも、未知数の未来への不安は湧き上がる」

「生きている上で普段感じることの少ないのにいつでも付きまとってきやがる不安だ、と零して、鬼灯は一つの知識を得た、と満足に笑った。それを正面から見て、ヤイールは言葉を零す。

「——本当に、興味深いな。その度胸、気に入った」

あんだ、奇麗だしな、と何でもないとのように褒めてくるヤイールは鬼灯のシャツボタンを外しながら顔を埋めた。肌に息が掛かり、くすぐつたいと身体が逃げる。その背に回されていた腕はいつのまにか肩へ、そしてその薄い肩を堪能するように指を滑らし、肩に掛かった髪も紐も外し、鼻を近づけ、首の後ろへと口付けた。所有印のように、誰の眼も届かない場所へとされるそれに、身体は拒否か甘美か、震える。

「恋人にならないか？」

その問いかけに鬼灯は首を振る。瞳は冷えた色を湛え、表情は笑顔のまま無表情。けれど、そんな鬼灯がヤイールには悲しげに映った。

「俺が嫌いかな？」

「わからないわ。嫌いも好きも私にはないから。でも、嫌いじゃないわね」

くすり、と小さく頬を緩ました鬼灯は、自分が自然の表情を引き

出されていることに既に気づいていた。そしてそれに戸惑い、戸惑うことにも戸惑っていた。

人間ではない、感情も持たないただの“異界”という現象が、人間の思考をトレースした人工的な感情を持つ人格である珠洲。彼女は一つの人格として独立させてある。感情に似たものを持つことができる。

けれど、そんな機能をつけた覚えもない、鬼灯本体である自分がなぜそんなことができるのか。“感情”というものが芽生えたのか。加奈の人格をベースにしているとはいえ、それは正確には加奈ではない。珠洲とは違う。加奈は鬼灯の中で確固とした人格を保てず、他のものと混ざり合っている。取り込んだものの知識を貯蓄する鬼灯の能力で彼女の性格を真似て、言動を起こしているだけに過ぎない。“異界”が人の世にあるための、動き喋る、人という器の人形。それが鬼灯である。

——鬼灯に感情が芽生えることも、表情が出るなどということもない。

表情はコミュニケーションを取る為に筋肉を動かして作ったものに過ぎない。感情は人の性格や行動パターンから推測し同じような反応を身体に命令して行っているにすぎない。

「煽るな。引き返せなくなる」

するりと動かされた手は下へと向かい、唇も追うように露わにされた上半身をなぞって下がる。その感覚に不思議なものを感じる。愛されている、と勘違いしてしまいそうな、軽口を鵜呑みにしてしまいそうな夢のような感覚が鬼灯の中に溢れてくる。

「それこそ、知らないわよ。でも知らないことが不安って言うのは、分かったような気がする」

——引き返せなくなるのは、こちらの方だ。

気づいてはいけないものに気づかされてしまったのかもしれない。鬼灯は知識欲が本能に焼きついていて。けれど、それがなければ不安ということも、何かの衝動によってそれを望むのではない。知識を集めるという機関でしかない。知らないことがあれば吸収する。それだけのはずだった。次々と知識を収めることだけが存在理由だった。それだけに意味があつた。

感情というものも、人間というものも、知識が足りない状態であるから人の世にいるだけのただの現象だ。鬼灯の木であつたところと変わらず、ただ知識を待つ。知識を取り込む。それだけではなくなつたのだろうか。自分は、何かが変わってしまったのだろうか。不安という感情に、初めて自覚した感情に、鬼灯は目の前の身体へと取り縋る。

「なんだか、可笑しい話。あなたのこと、私何も知らないのに、——安心できる」

人は寂しい時に温もりを欲しがるのだという。ならば今の自分はどうか。子供のように他人を感じたがつて、隙間を無くそうとする。他人という距離感でないのならいい。……けれど今の自分たちは何者なのだろうか。他人でも自分でもない。友人でも敵でもない、——人と異界。そんな奇妙な関係性。それは鬼灯にとっては決して変わらないはずの縁だ。それ以外の関係性が、この人の世であるはずがない。けれど、望んでしまうのは、やはり人を取り込む存在として、その中に人を含ませているからだろうか。

「——名前は？」

名——それはその存在を現すもの。本質でもあり、欠片でもある。そしてそれは必ずしもただの符号ではない、力ある言葉。呼ぶもの

にも、呼ばれるものにも、与えられるものがある。

存在、関係性、本質、あるもの。……ならば自分の名は？

「あるようでないものよ。鬼灯の木の実——そこから私は生まれた。だから鬼灯」

？ぎ取られた実の一つでしかない、自分に、果たして鬼灯などという言葉があっているのか。世界中に散らばった、他の実がどうなったのか、何も知らないというのに、自分は鬼灯という主の名をもらった。それを名乗る度に知識欲が疼く、“世界を見る”と。本能が囁く、“子供らはどうなったのか”と。しかし、今の自分にそれは分らない。知識を蓄える全ての母、欲しい物も要らないものも、世界にあるすべてが集う世界樹——それを肖る知識の木、鬼灯の木。その異界の一部が人間の体に入っている。そんな歪性が今、自分の中に埋まっている。

「考えすぎるな」

「考えることが性分なの」

「考えられなくしてやろうか？」

「……できることなら」

それは願いを込めた言葉だった。その思考は止まらない。知識の泉は人格を蓄えた故のこと。鬼灯の中には知識に相応するだけの人の命が眠っている。感情が、想いが、意識に刻まれた傷み、繰り返される。延々と自らのうちで木霊する魂の叫び。——全てに耳を塞いで、聞こえなく出来てしまえばそれほど楽なことはない。けれど亡霊は鬼灯に思考の停止を許さない。

「名を、呼べよ。知ってるんだらう？」

「——ヤイル」

呼んで頭を胸元へ引き寄せる。その広い背へと腕を伸ばし、身体
の線をなぞる様に徐々に、腕へと手を伸ばす。

「……外がやけに騒がしいな」

知っているか、と暗に問いかけられ、鬼灯は笑った。伸ばされた
腕が止まっていた。手のひらサイズに収縮した鬼斬が後一步のこ
ろまで腕輪へと接近するのを読んだかのような絶妙なタイミング。

一瞬の瞳の交差、同時に動いた。

鬼斬を捕らえようと手首へと向けられた腕。ヤイルの腕に嵌る
簡素な金属輪へと鬼斬を尽き立てようとする。——僅かに、ヤイ
ルの方が早かった。正確には、腕輪へと達した鬼斬が力の反発に異
界を押さえ込む間に鬼灯自身が押さえ込まれた。電気のような進り
が鬼斬を伝ってきて、防御に移った身体は自らの視界を塞ぐように
腕を突き出し、それが大きな隙として押し掛かれた。もとの
姿勢が不利だったせいもあり、手首を押さえ込まれた。加えられる
力に少女の身体は握りを崩し、鬼斬が絨毯のような布地の上に転が
った。

「降参しろよ、殺しは出来ねえだろ」

ヤイルの言葉は的確だ。鬼灯は殺しなんてできない。経験さえ
なければ、組織の規則としてもできない。

「甘く見ないで」

異界として、人を喰らうのは鬼灯の性分である。巻き込む形では
いくらでも殺している。人は異界に誘われて狂気に陥り、自滅する。
異界は人を殺す。他意なく、命を奪おう祖つるのでもなく、禁忌に
触れるが故に異界を原因として人は死ぬ。

瞳をひとつ瞑って一呼吸。鬼斬でない、異界の能力を腕輪に真正
面からぶつける。

「っ」

二人の距離の間に入り込んだ風が引き剥がそうと、風がヤイルに直前からぶつかる。

手首を拘束する手が弛んだのを、今度は鬼灯が手首を掴み入れ替えを試みる。だが標的にした途端に素早く手を隠す。だが、鬼灯は失敗に怯む事無く、身体の下に伸びた足を開いた隙間に押し込んで折り畳んだ勢いで蹴り付けた。

華奢な足はそれを感じさせない力強さだった。が子の手のひらを掴むような容易さで足首を掴みあげる。そのまま放り上げるように揺さぶられたのを反動に、地面に着く際に足をばねのようにして再度の突撃をかける。今度はヤイルも真正面から、腕輪を盾にして攻撃を受けた。

カキン！と弾き返される鬼斬。

ヤイルはテントの外に弾き出される。鬼灯自身も“異界”と“異界”の力の衝突に吹き飛んだ。衝撃のわりにダメージが少なかったのは、テントの弾力ある壁のおかげだった。

地面にずり落ちた身体をすぐさま立ち上がらせ、自らの放った凶刃を見やった。傷一つついていない、漆黒の刃。腕輪に弾き飛ばされこそすれ、勝ちには譲っていないようで、刃毀れ一つなく凜としている。

鬼灯は他にも問題ないことを確認してから、そこらに散らばった服を適当に羽織り外へ出た。

さっと開いた視界に、先ほどまでいた森の空間には戦闘が行われた後があつた。地面は抉り取られ、砂埃が舞い、皆が武器を構えている。その中、伏した背に鬼灯は視線を合わせて微笑んだ。細身の身体は、けれどぎゅっと絞られたもの。筋肉が立ち上がるためと動く。褐色の肌、知的な相貌。上半身には鬼灯と同じく、引っ掛けた

だけの上着。

「はやり、あなただったようね」

無傷のまま立ち上がったヤイルを見やる。

——異界封殺の剣“鬼斬”が効かない。

その事実はその男が本物の加護の腕輪を持っていることを露呈する。

腕輪の所有者はヤイルだ。お頭も、あの男ではなくヤイル。

——夏梅に渡されたものは偽物だった。同類だからこそ、気づけるそれに、彼等は油断していたのだろうか。余りにもあっけなく、攻撃が出来た。ただの少女だと、本当に思っていたのか。ヤイルは本当は気づいていたのではないか。気づいていて、尚、それが実行されないことを願っていた、と考えるのは芽生えてしまった淡い想いから来る希望的観測だろうか。

「やりやがったな……っ!？」

「この女あ!!」

無言で冷酷な色を瞳に浮かべるヤイルとは打って変わり、周りの盗賊は騒いだ。相手にしていた者に背を向けて。

「——あなたたちも約束を破ったじゃない」

あまりにも無防備に過ぎるが、私たちは彼らを傷つける権限がない。隙であっても、拘束するしか術がない。一人、一人と音もなく捕らえられていく様は鬼灯にしか見えない方向だった。

「何の話だ？言いがかりはやめてもらおう」

ヤイルの声は氷塊のように冷たい。先ほどの甘さとは、かけ離れていた。

「子供相手に二十人は多いんじゃないかしら？」

「な——そんな……なんで」

疑問を口に出した盗賊の言葉に、鬼灯は貼り付けた笑顔のまま耳を済ませた。

「気持ちいい戦闘音。あの子はうまくやっているようね」

人に知覚を越えた感覚で、夏梅が戦うのを聞き取る。武器などの反射音と今尚、逃げ回るように息を切らしている夏梅。人数を当てるのは造作もない。何より、夏梅が例え人を傷つけないという約束をつけたままにしても、盗賊がえりすぐりの優秀な武人だとしても、夏梅にあれだけの消費を強いられるとは、かなりの人数が向かったはずだ。迎には彼の補助をしてもらいたい。しかし、

「……どうしましょう？」

加護の腕輪と鬼斬は同格。ならば次に期待されるのは純粋な実力勝負。けれど、手誰の男と素人の小娘。鬼灯の絶対防御は異界の力に対してしか効果を発揮しない。どちらが勝つかなんて予想が出来そうなものだ。——ただし、鬼灯には異界としての得点で痛みを感じない構造だ。人間としての規格外。致命傷と出血量さえ押さえておけば疲労や痛み、眠気に鈍ることもなく不休で戦闘行為が出来る。スペックはそれほどでなくとも、

——死なない兵士ホムンクルスの類似品（異界をその身に宿した人間）は人間相手には十分脅威になりえる。

問題があるのは装飾だ。この間から連続して集めた童話シリーズそれは加工され制御の緩くなった鬼灯の異界に抑制を促している。元は鬼斬と同列の腕輪と鬼灯では鬼灯の方が格上だ。相性の悪さを考慮すれば装飾を外しても能力は互角か少し上ぐらいか。

——あいつには、できるだけ頼りたくないわね。

術はあった。勝つ可能性はほぼ絶対的。けれど、それは不確定要素が多すぎる。

鬼灯に戦う術を提供している人格がいる。しかしそいつは余りにも狂気に塗れた、子供だ。

「迎くん、あの“お頭”さん、その他は任せたわ」

ふふ、と笑って鬼灯は厄介ごとを押し付けた。そして考えてもやってみなくてはわからない、と早々に問題を投げる。一人で相手に出来る人数ではない。ヤイルと自分が同等ならば、他は迎に任せるのが妥当だろう。それから夏梅のところへ援護に行ってもらおう。決めて、鬼灯はヤイルと対峙した。

カキン——ッ！鬼灯が金属音を鳴らす。そしてリン——と鈴音も合わせて鳴った。

それは鬼斬の能力が腕輪によって拡散され、周囲に飛び散った音だ。正常な空気に戻すように空間に響き渡り、腕輪の異界も反発のように甲高い音を揺らす。

ヤイルの持つ普通の剣が異界の剣と渡り合う。それは腕輪の力の助力によるものだ。そしてそれには異界の剣である鬼斬は異界以外を切ることに適わない剣だということも所以する。二つは対等に打ち合っている。

「もし違う形で会えたのなら、俺たちはうまくやれたと思う」

「——私も、そう思うわ」

けれど、違う形ならば会うことはなかった。絶対に会うはずがない。何か一つ掛け違えてしまったらここにたどり着くことはなかったし、今の鬼灯はいなかった。

……“もし”なんて過去を希望で見ることは人間にしかない感情だわ。

「あんだ、それでいいのか？」

その問いかけが何の意味であるのか、正確には分からない。けれど、

「言いも悪いもないわね」

現状には満足しているといえなくとも、そうであるべきだからこそ做っている。人の世に即す為には必要なこととして認識しているからだ。

「――二人で逃げないか？」

「鬼灯」

迎がヤイルの誘いを遮るように鋭い声を挟む。

「わかってる。――お誘いは嬉しいけれど、あなたはいいの、仲間でしょう？」

明確な意思を出さず、鬼灯は問いかけた。

迎の言うことはわかる。さっさと片付けろ、という意味は、全力を出せというもの。

鬼灯は次元を開く手鏡――『透明な姿見』であつたそれを、ポケットから出した。

――ひとつ、鬼灯自身に施した異界の抑制が外れる。

「あなたを慕っている、仲間でしょ？ねえ、本当のお頭さん」

ヤイルの言葉が本当に、真実のものならば、仲間さえも構わないというのならば、戦わずにすむ道もあるというのに。

鬼灯たちの、組織の目的は異界が人の世で害をなさないこと。組織に集め、監視してしまえばいい。鬼灯のように、利用できるならば、尚更良い。

装備品である腕輪には所有者が必要であり、その所有権は格上の異界が異界に認められた者だけ。封印を施し加工して扱うことが出来るのはほんの一部。リンの時の様に所有者毎抱きこむ、という手立てもある。

「……本当に、最初から知っていたみたいだな」

苦笑するように言って、距離を取るヤイルに鬼灯は剣先を下ろした。

「俺を落とすのも、計画の内、ってやつか？」

「それは違う。あなたは、本当に、……素敵だと思うわ。でもね」

「私は、人間じゃない」

鬼灯は瞬地する自動歩行の靴——『踊り続ける紅い靴』であったそれを、脱ぎ捨てる。

——またひとつ、鬼灯自身の能力を拘束する枷が緩む。

「その腕輪と同じ——“異界”。人の世に零れ落ちた、ただの“現象”」

人間の体に寄生しても、変わらない。ただの現象。人の世の隣に存在する世界の、異質物。

だからこそ、人は組織を造った。人という脆弱な存在でありながら、異界を相手にする者たち。人の世のバランスを崩さないため、均衡を保つためにも、異界は隣人であって人の世に存在してはいけない。

「あなたには感情がある。——現象なんかじゃない。それは、俺が保障する」

ヤイルの瞳は冗談とはかけ離れ、真摯に本心を語っていた。だからこそ、鬼灯は苦笑した。感情など、芽生えるわけがない。胸の痛みも、暖かさも、涙も、出るわけがないのだ。

鬼灯は人の身に寄生しているだけで異界である。中身も何もかも、人など欠片も持たない。

話し合う二人を横目に、迎は次々と盗賊を気絶させていく。多数に無勢ながら、速やかに行動不能へと落としていく流れは美しく洗練されたものである。

二人は二人だけの空間を形成し、威嚇しあい、話し合い、——その他の出来事を傍観していた。どちらも、盗賊が倒れ迎が倒してゆく様を見て、知って、それでなお声をかけることも手を出すことも

なく、ゆつくりと話を続けていた。

敵意を張り詰めながら、先ほどまでの恋人のような口ぶりを混ぜて、そして競り合う。

「……所有権を破棄しなさい」

一生籠の鳥として組織で拘束されるか、所有権を破棄するか。その問いかけをしても、無駄だということは鬼灯にも分かっていた。けれど、鬼灯は心を読み取るピアス——『干涉の耳飾』であったそれに手を伸ばし、取り外した。

「何が何でもほしいというのなら——腕を切り落とせ。俺らに降参も白旗もない。納得させて見せる」

聞きたくなくて、知りたくなくて、外したところで声に出されれば同じだった。

——心は変わらない。

——またひとつ、鬼灯の肥大して制御しきれなくなった力が放たれる。

再び、ヤイルと鬼灯は真正面から互いを見据え、ぶつかり合うとした。

けれど、突然の横槍。

「あんたら！お頭に手え出すんじゃねえ！！！」

視線が流れた。

盗賊の、その太い腕に首を捉えられ、ぐつたりと意識を失った少年の姿を瞳は捉える。

ふいに、血の香りが鼻についた。

「——っ！？あ……くうっ」

「鬼灯！」

様子の変わった迎が声をかけるも、それは見えていないようだった

た。ヤイルは均衡が破れ、絶好の攻撃機会を逃した。

「何を馬鹿なことをやっているっ！」

鋭い叱咤がヤイルから盗賊へと向かうが、今の鬼灯には関係なかった。

鬼灯は身を屈め、激しく動悸する心臓を押さえる。それでも収まりきらない興奮があつといきとなつて身体のうちから出てきていた。一瞬のうちに距離を詰めた迎に、震え落ちる鬼灯に差し伸べられた手に、鬼灯は拒絶の言葉を途切れながら取り出す。

「迎く——、離……れて」

辛うじて立っていた体が膝から落ちた。ガゲンツ——と沈んだ身体は制御権を半分根こそぎ奪われたからだ。荒い息は暴れたがる身の内からの衝動によるものだ。

鬼斬を握っていてさえ、意識が刈り取られそうなほどの能力の波がある。砂利を握り締めても、押さえ込むように身体を包めても衝動は変わらない。抑えきることが出来ないならば、被害だけは最小に留めなくてはならない。

突き出した腕は迎を拒絶し、瞳は目標を見据える。

——ヤイル。

彼が、助けてくれるだろうか。

「隠、れ——。人格、変わり、……そう」

——私じゃ、抑えられそうもないわ。

そう、言う鬼灯には感情が灯っているように思えた。

（あの男が言うように……？）

迎はそれを冷静に否定した。そんなはずはない。鬼灯は異界だ。

現象には感情はない。加奈の性格を抛り所とした鬼灯には感情は出ない。感情を持つとして、それを司る人格は主に珠洲だ。そしてそ

れさえも以前の記憶をトレースして生み出した偽造の、その場に合わせたパターンによる反応。本物の感情でもない。

思考を切り替え、無言で指示に従った。

「――久々」

身を起こす。しかし、その姿は先ほどの苦しみなど一片も見えず、ただ超然と立つ。か弱い少女の身体のはずなのにその威圧感は圧倒的だった。

「っ」

迎は息を吞まざるを得なかった。顔を上げたその表情は、今まで見たこともないほど強く強烈な“感情”を前に押し出していた。憎しみに彩られた、その瞳は爛々と輝き、狂気に満ちている。

「あー。相手、発見、だな」

声音は男性的だった。

「――おまえ……いや、来いよ。遊んでやる」

ヤイルが目を見張ったのが迎にもわかった。迎自身も相当に驚いていた。

鬼灯は人格を意図的に変えることはない。意志を持たぬ人形として、化け物として、人に指示されねばならぬ存在としてあり続けるからだ。組織に来てからも、その前も。

以前の記憶を持ったまま人格を与えられた珠洲はそのまま学校に通ったし、組織に来いといわれれば請われるままに組織に協力する。人格の設定は戦闘行為などは加奈、それ以外は珠洲ということになった。そして、まずこの状況で人格が変わることはないはずだった。そして、その二人のどちらでもない人格も、現われるはずがなかった。

「はっ！！調子こいてんじゃねえーぞテメエ！！！」

よくよく聞けば中性的な声だった。けれど、これは――加奈でも珠洲でもない、第三人格。

迎は呆氣に取られた盗賊の元から夏梅を取り戻し、氣絶させる。しかし、未だ信じられずにいる。目前に広がる現状に、ただ距離を取って、ヤイルと鬼灯の戦いを静観する。

特攻を掛け、韋駄天のように走り怒濤の勢いで鬼斬を振るう。

ヤイルはそれに対応しているようにでいて、出来ていない。反応速度を超えた動作で振るわれる一刃一刃が重く、押し掛かるようにヤイルを攻撃していた。

「オラオラオラ！！来いやア！！」
叫び、好戦的に。

少女の身で、細い片腕で振るわれる力は、けれど人の限界に達するほどの強さだ。それは守護の能力を持つヤイルだからこそ、そして異界以外のものを切れない鬼斬だからこそ、傷を負わないでいるような戦闘だった。一方的な攻撃、ヤイルは完全に負けていた。技量どこの話ではない。いや、技量でさえも互角か、ヤイルの方がやや低い。勝敗は目に見えていた。

「弱え。弱えっ！！こんなんじやつまんねえだろおが！！」

吠えるように、鬼灯は言う。だが、それに付き合わされたヤイルは息も絶え絶えだ。何より、精神を削られる。

幾合も合わせた剣は実体を持っている。それが身を貫く感覚が繰り返され、けれど血は溢れず痛みもない。心を殺されるような、戦いに疲弊していくのは体力だけじゃない。恐怖が身を竦ませ、動きも鈍くなっていく。時間の感覚がなくなり、剣を握る手の感覚もなく、身を守るためのだけの防御を続ける。

己の剣は届くはずなのに、掠りさえせず、相手の剣は身を貫きながら傷一つつけない。けれど、安心が出来ない。身を貫くその衝撃が今度は本物かもしれない。また嘘のように通り過ぎるのかもしれない。そんな不安と恐怖に心を蝕まれる。

「こんなもんかよおお、異界の力はあ！！！！傷の一つでも付けて

見せやがれえっ!!」

立ち上がれない。立ち上がることが怖い。ジッとしていることさえも怖い。ただ距離を取りたい。安全な場所に行きたい。

——本能的な恐怖は時間と共に戦闘意欲を根こそぎ奪っていった。

「ちっあっけねえ……」

“敵”がいないことに気付き、鬼灯は舌打ちをして鬼斬を納めた。そして、迎へと向き直る。

「っ」

——完全に気配を消していたはずだ。距離も十分に取っている。けれど、それは“彼”には関係ない程度のことだったのか。敵として認識されていないからこそ良かったものの、その一部始終を見ていた迎は剣を治めてなお、鬼灯を恐怖していた。適わない。けれど、恐れていても意味はなかった。

「——傷つけたぶんだけ、返ってくる。それが“世界”だ。強いものが生き残る。」

そうだろ?と無邪気に笑い、鬼灯は眼を閉じた。

迎はぶつとりと意識を失って地面に倒れた様を見送って、それが起き上がらないと確認してから慎重に次の行動へ入った。

拘束具として機能させていた装飾をカチリ、カチリ、と一つずつ嵌めていく。

「アレはなんだったんだ?」

後ろからの声に迎は、牽制することもなく振り向いた。ヤイルは身も起こせないまま声をかけてきていた。

「腕輪の所有権を破棄しろ。でなければ連行する。人を殺すのは規定違反だ。余剰の戦闘も許されてはいない」

疑問を挟むことは許さない、と感情のこもらない瞳で宣言する。

もし、聞かれたとしても答えは迎の内にない。

「あいつと……一緒にいられるのか？」

場所と場所を繋ぐ扉に座標を設定する。勿論、移動先は本部である。

「仲間たちとは離れるだろうな」

けれど、ヤイルは立った。拘束するまでもなく、それまでのやり取りで鬼灯への執着は見せ付けられていた。聞かれた時点で仲間よりも鬼灯へと比重が偏っている事は知れた。

「——忠告だ、あまり、のめり込み過ぎるな」

扉を開き、先へ入るようにと促して言った。

「……嫉妬にしか、聞えねえよ、あんちゃん」

扉が閉まる。その場には、頭に放置された、仲間として裏切られた盗賊たちが倒れていた。

あいまの間

暗く、けれど明るく。

そこは不思議な空間だった。

男と、少女がいる。少女は椅子に座り、けれど眠っているように頭を横へと傾げている。そんな少女を男は、少女の視線に合わせるように、しゃがみこんで俯いた顔を斜めに見上げている。両手で頬付きして、つまらなそうな瞳でずっと見ていた。

「――あ。また、誰かが死んだ」

何かが閃いたのと同じく、唐突な声を上げて男は言う。誰も聞くことのない言葉を、けれど話しかけるようにして。煌びやかに、幾筋もの光を反射して溜め込んだこの空間には幾つもの色がある。けれど寂しく、淋しく、何処か陰鬱で重苦しい。空間から逃れること叶わなくなった光もまた、少女と同じく眠りにについている。

「ねえ、誰だと思う？君のために、また誰かが命を落としたんだ」
今度は明確に、眠る少女へと声をかけた。

返る声はない。頭の中でもすやすやと幸せそうな眠りの呼気がするだけだった。

以前は身体が眠っていても、その心は明るく弾んだ声を上げていたというのに、男は久しく少女の声を聞いていないことに気づいた。手を伸ばして頬に手を寄せれば柔らかな官職と暖かくも冷たくもない温度が伝わった。

「……みんな頑張るなあ。君は眠り続けているのにね」

じっと見つめる。少女の顔にはかつて男が愛したものの面影があることには気づいていたが、だからといって少女自体に愛情が沸くことは無かった。

散っていった命は代償だ。少女のために刈り取られる命。少女のために生きながらえる命。少女はけれど、眠り続ける。少女のために何かをしようと思う心が男にはない。

少女自体、世界のことなど、とつくに飽きてしまったようなのに何が少女の為なのだろう。少女はいたいどれだけの間眠りを楽しむつもりなのか、外のことなど知ったことではない、と眠りから覚める気配はない。

「もう、行こうかな」

次の瞬間には一人、少女だけがその場にいた。少女は我関せず、と眠り続ける。男がいたことにも気づかなかったくらいだった。空間も少女と一体として、暗く明るく、眠る。

——それは一つの幸福の形。無理矢理壊すほど悲観的なものではない、安楽だった。

「珠洲」

「——加奈ちゃん？」

彼女は首を振った。

それは心の内であった。広い空間に、水色の世界。そこに珠洲は立っていた。

声をかけられて振り向けば、加奈。けれど彼女は首を振った。彼女は加奈の形をした、他の何か。メッセンジャーとして、相応しい形を取っただけの、何か。

「鬼灯」

優しく、そつと、唇は紡いだ。世界に波紋が広がる。

魂だけの珠洲はそれを知っていた。鬼灯の中に取り込まれた人々の命。その中で混ざり合ったものの一つが自分である。鬼灯という存在しか、ここにはない——いや、こんなせい身体だけの世界など、今までは何処にも存在しなかった。

「鬼灯は人じゃない。現象。感情を持たない」

言葉とならず、けれどそれは伝わった。鬼灯の中の世界なのだから

ら当たり前といえは当たり前だが、それならば何故、このように分離しているのか。

珠洲自身、魂に取り込まれごちゃごちゃとした場所にいたはずだ。意識も意志も記憶すらない、命の宿らない知識の塊としてしか存在しなかったはずだ。

それが、こうして一人取り出されて存在している。

“珠洲”——と名乗り、人と触れ合っているのは珠洲ではない。

鬼灯が人格を使い分けているだけであり、その本質は鬼灯に帰属する。以前までの、人であった頃の珠洲ではない。魂の入れられていないただの器であることには変わりなかった。

「魂を幾つも入れ物に入れて、けれどどれ一つ人形の中になかった。なのに、どうして？」

珠洲にはわからない。何故、今更になって彼女は自分の前に出てくるのだろうか。これではまるで——

「一つの魂を持った」

感情を、異界という現象が持ったというのか。生き物ですらない、機械的で反射的ではない、ただの存在が。

「命は始めからあった。でも——」

あるようでないもの。現象として現出するにいたり人の世では形が必要だった。

あるものは装飾品、あるものは植物、あるものは生物。そこに存在する理由として、意味が、本性が必要だった。

森は内に存在するものを守り、腕輪は人を守り、空間もまた大切なものを守る為に存在した。耳飾は感情を知らせ、鬼斬は切るため、鬼灯は知識を得るために存在した。

そのために命を与えられたもの、そのために意志を与えられたもの。鬼灯は命は与えられても意志は与えられなかった。欲求と本能、命を与えられた。

命はあっても意志はないから人形のままであった。

「鬼灯は、私は——本当に、生まれた人格？」

それは珠洲にどう見えるのか、と聞いているのだろうか。

彼女は、いつもは加奈の性格を利用して、加奈の様に振舞って、その言動は限りなく人に近い。それは視ていたから知っている。でも今までは持たなかった疑問を持つ時点で、問いかける時点で、疑問を差し挟むべくもなくそれは一つの人格としての意識の芽生え。

珠洲も加奈も、表に出ているのは鬼灯であって、本物の、魂を伴った以前の“加奈”でも“珠洲”でもない。鬼灯だ。それは知っている。魂の玉には加奈の魂も含まれているのだろう。会うことの叶わない、ごちゃごちゃの存在として加奈は鬼灯の中にいる。だから、“あなた”は、加奈ちゃんの性格によく似ているけど、加奈ちゃんじゃない」

断言した。不安を抱える彼女に、勇気を分けた。後押しするように、拒絶するように。

加奈ちゃんならば、こんなことを問いかけたりはしない。久しぶりに会えると思った加奈ちゃんは、けれど、何処までも彼女だ。現実での姿が珠洲であろうとも、その言動が加奈であろうとも、今この場に現出する姿が加奈であろうとも、どれも魂の違う、別個の存在だ。

——加奈ちゃんに会いたい。

それだけが今の珠洲の全てだった。加奈に憧れ、目標として、追って、ここまで来た。加奈に会いたいという気持ちだけが明確で、だからこそあの全ての境界線が取り外された魂の塊で一つの魂として存在し抜き出すことが出来たのかもしれない。

「珠洲は強い。加奈はもう、形を捨てているのに」

全てが融合し時分も他者も分からなくなるあの感覚の中で自分が自分であることを失わないですんでいるのは、もう二度と会えないと分かっている加奈への思いからだ。いっそ、融合してしまえば、加奈とはいっても一緒だ。魂の塊の中で、みんながみんなごちゃ混ぜになる。でも、希望は自ら捨てることが出来ないでいる。

「ありがとう——話せてよかった」

踵を返す彼女に、珠洲は人恋しさを感じたが、すぐに違和感を覚えた。魂の塊に引つ張られる気配がない。この場に留まれという事か。塊の中で、融合を迫られるのところに一人でいるのでは、どちらが責め苦なのか、わからない。

優しいのか、厳しいのかよくわからない。それとも、意識の芽生えたばかりの彼女の不器用な親切なのか。

「——こんにちは」
ぞく——っ

誰もいないはずの空間で、自分一人しかないはずのこの場所で、声がする。

振り返れば、見たことのない男が背後にいた。瞬時に距離を取る。唯一、この場に来れるはずの鬼灯でもない。魂の塊の中にもこれほど異様な気配をまとった者はいなかった。記憶の片隅にも出てこない。

「だ——」

誰何する言葉よりも、男の指が額に触れる方が早かった。

ぐあん——と頭の揺れる音がして、溢れる知識に男の存在を知った。

王と姫と少女の理由

「なんだ、あれは！！説明しろっ！！」

戻った意識に、開口一番かける言葉は間違っているだろう。けれど迎がこのような態度であると責め辛い。珍しいことに迎が激昂している。説明を求める前に説明をしろ、という気分だったが鬼灯も自覚があるだけにバツが悪くなる。

「……どっかの馬鹿なバーサーカーよ。血の臭いに反応して出てきちゃっただけだわ。」

口を動かしながら腕を動かし、動かせずシャラン——と音が鳴った。

拘束具は異界のものであるらしい。人間の使うそれは冷たく、金属の重さを湛えるがこれは重さを感じさせず、物理的な拘束としては弱いが動かす度に清廉な鈴の音が響き、動かす気力を根こそぎ奪う。尤も、この音は頭の内に起こるもので、実際には鳴り響いてはいないのだろう。

見渡しても鬼灯の記憶にない場所。組織の本部ではあるのだろう。暖かく、明るい部屋。それでもここは牢獄だ。横続きに連なっている部屋は透明な仕切りだけで羞恥を煽る。

対面する迎は壁に括りつけられていた鬼灯を開放し、机についた。軽く現状を聞く。ヤイルは異界所持者として組織の一員になったそう。他の盗賊たちとは縁を切った。異界の能力で接触しても分らないように、間柄というものを切り刻んだらしい。

そして拘束は“あの男”に対する警戒のためらしい。第三人格——名前さえない人格の一つ。鬼灯としての本来の意識が戻ったところで、部屋を移るらしい。それとて自室ではないらしいが、この場所よりかはマシだろう。そして漸く、補足説明をする余裕が持てた。「最近、自分の制御が利かないのよ。人格が入れ替わりやすくなってるって、言っただじゃない」

自身の力が安定しない為に、人形としての意志の無さを他人に制御を預けるという形で実現させていたのがリンによる接触だった。鬼灯自身の異界を押さえ込むに当たり、他の異界からの影響は強く作用する。そのために他の装飾として携帯できるような異界の確保という今回の任務は都合が良かった。能力を無理矢理抑えつ避けるような愚行ではあるが、凶暴な性格——今回予想が当たり出てきてしまった第三の人格——などの被害を考えるに、少しずつ慣れさせていく必要があるために必要な準備だった。尤も、制御を得るために制御を外すという、腕輪の件はヤイルの実力が高かったことに文句をつけるぐらいしか出来ないだろう。本末転倒ではあるが。「私の中には幾つもの精神体が混ざり合って統合している。表に出るのは明確な意思のあるものだけ」

その点で言うならば、それができるのは珠洲だけだ。鬼灯の中にあつてさえ意志を強く持ち続けるといことが出来ているのは彼女には目的とも言うべき願いが、絶えずそこにあるからだ。勿論、もとは彼女の身体ということもあつて、意志の強さが鬼灯に勝れば外に出てくる事が出来る。本物の——大河珠洲という一人の女子高生という存在に戻る。

そうなれば鬼灯に明け渡している身体を取り戻して、リンのように身体の内にも異界を含め融合しながらも人としての存在となりえる。しかし主導権・所有権を委託したために主従が変わっているのだが、命を、目的意識を持たされた鬼灯はリンの明確な意思のない役割だけの異界よりも制御が難しいのが実際のところだ。人である彼女に、鬼灯でさえも制御できない力が制御できるのかは不明。

「戦闘時の加奈と通常時の珠洲。それは人格を応用するだけで魂状態を引用しているわけではないから、問題はない。取り出そうと思わなければごちゃ混ぜで人格も魂もないと一緒なもの。意思もないだから今回の場合は、——そうね、“例外”」

鬼灯は自身の能力がここ最近以上に高まったことについて一つの見解を、不確定な推測を持っている。けれど、それを今ここで話す

ことは出来なかった。

「アレの琴線に触れるような出来事が起こったから支配権を強引に奪われた」

名前もない人格が台頭するほどに強烈な、“琴線”——夏梅のことが原因だ。

「強者になりたい、強者と戦いたいって出向いてきた生粋の馬鹿。戦闘以外に興味はない。人懐っこい性格で切り結んで相手が生きていたら懐くわ」

目の前の敵にしか興味はない。それに女子供も“弱い”から苦手。過去に何があつたかは知識で知っている。だからこそ、扱いやすい性格だ。子供で、成長しきっていないその心は憎しみと怒りと、戦闘においてだけ強い意志を持つ。血の匂いがしなければアレが目覚めることはない。

「真剣でなく勝負しておけば手元において置けるぐらいの、飼い馴らしが出来る性格よ。それほど問題ではないわ。」

問題は、——私自身。

「異界の力を上手く、制御できない。だからこそ今回のことが起きた」

任務をこなし、異界を取り込むごとに大きくなるそれはもう最初の数倍にも膨れ上がり鬼灯の手に収まりきれるものではなくってきている。

「だから、他の異界で押さえようとしてたんだ？今までが大丈夫だったなら何か理由があるんじゃない？」

突然の声は博士のものだ。こっちこっち、と手を振り部屋に入るように促された。そこがこれから暫く過ごすことになる部屋なのだろう。リンと夏梅がいた。どうやら、夏梅は軽症だったらしい。見た目には何処も傷がついてないように見える。

トテトテと鬼灯に近寄ってリンは手を取った。そして何かを感じ取るように眼を瞑り、言う。

「……異界の力が、どんどん膨らんでる」
「リン」

鬼灯は諫めるような声音でリンを呼ぶ。人の身体に異界が入るという奇妙な具合を共にするものとして感じるところがあつたのだらう。

「取り込む分、掌握する異界が大きくなるのはわかる。でも増加の仕方が異常だよ」

どちらかといえば無口な方のリンが諫められても尚、追求するほど、この話は根が深かった。

「けれどこれは私の感覚の問題だから……」

「それは気のせいなんかじゃないんじゃない？調べてみようか？」
難しい顔をしている一同に、取り成すように言いかけて、博士の声が横割りする。

今から胸が高まるねえ！。とカラカラ笑う博士に今度は夏梅が諫めた。

「だあって、鬼灯くんは通常の刃物なんかじゃ傷つけられないからさあー。試す、いい機会だと思わないー？下位の異界封じのナイフで事足りるかな？」

鬼斬を使ったら消滅するのかなえ？なんて、不吉なことを言い出す博士にそれは止めて頂戴ね、と釘を刺しつつ会話を進める。

「どっちにしても、私は暫くここで生活することになるんでしょう？」

「まあね。一週間か、二週間か、一ヶ月か。わからないけど。」

お上の考える事は僕にもわからないからねー。と暢気に言つてのける博士。割りと特殊な位置にいるみたいだが、博士もお“上”には違いないはずだ。自由も聞かせているために行方をくらませることも容易く遣つて退ける。

「珠洲ちゃあーん」

ひょこつと扉から頭だけ出して声をかけた少女に鬼灯——珠洲のまねをした状態の彼女は顔を上げた。

「マリネさん」

「遊びに来ましたあ。つと、それ招待状？早く着すぎちゃいましたあ？」

マリネは机に散らばった小さな手紙のようなものを見て、鬼灯が何かを言うよりも始めに状況を知る。任務のない時は鬼灯のところへお茶を飲みに来るのが日課であり、研究者であるマリネは毎日のように顔を出していたのだ。今回のように部屋を移って尚、謹慎するためその旨を伝えようとしたのだ。

「いいえ、気にしないでください。逆に、気を使わせてしまったようですね」

「呼んでくれようとしたんですかあ？ありがとー。でもお、私が珠洲ちゃんのお茶飲みたくなっちゃっただけだからー。ふふふふ」

ちなみにこのお茶会は飛び入り参加が多い。鬼灯の入れるお茶はおいしいと評判なので常に三人から四人ほど来ていて、このように独占できることにマリネはにつこりと満足そうな、少し含みのある笑顔を見せた。

「今、用意しますね」

そう言って何も無い場所から器具やら何やらを取り出しお茶を完成させていく。

——まるで手品のようだ、と思う。

実際には異界の能力を使って場所と場所を切り貼りしてショートカットをして取り寄せているだけなのだが、その流れるような仕草を見ていると無から有を作り出す神の次元の生きもののように思えた。

「ああー幸せですう」

入れられた紅茶に一息、マリネは幸せのため息と感想を漏らす。

お菓子も持ってきたので甘い甘い時間だ。これで仕事の時間などにせずにいられたらもつといいのに。一日中だらお話できる。そんなことを思いながら話題に花を咲かせていく。尤も、色気のついた話などではない。殆どが仕事に対する愚痴や最近思ったことなどをマリネが殆ど一方的に語り、鬼灯が頷き静かに聴くというのがいつものスタイルだ。

けれど今日は違う。鬼灯がこんなことを言い出したからだ。

「マリネさん。私、最近変なんです。胸が熱くなったりするんです」
「——女の子の話題は大抵が恋バナか秘密か流行か恋バナですよ。心臓がバタバタするなら恋バナですね」

鬼灯にもついに春が来たか！と興奮しそうなのを抑え、抑え切れない緩む頬の筋肉を紅茶を飲んで隠し、人生の年長者としての鷹揚さを見せようと落ち着いて答えてみせる。口調が変わらないので鬼灯にしてみたらいつもと同じにしか思えなかったが。

「恋、ですか。私、異界ですよ？」

「それでもお、恋はするものではなくてえー落ちるものですからあ」
表情が余り変わっているようには思えない鬼灯の顔を眺め、けれど声音には滲み出るその心情を察する。区切り区切りの言葉はその驚きとパニック、不安さを象徴するではないか！と爛々と瞳が輝いて身を乗り出しているにも気づかないまま、未だ年長者としての威厳のようなものを保とうと表情を取り繕うマリネ。

「ふふふ、二人だけの秘密ですねえ。秘密の話。私の秘密も話しちゃいますよお」

紅茶を飲み干し、もう一杯と注ごうとした鬼灯に黙って静止してから顔を寄せた。

「私い、鬼灯と同じなんです」

今度はきちんと内面も落ち着いたようで、耳に吹き込まれる言の葉は……いつもと同じ語調なものにも拘らずやけに、——冷たく、冷静に聞こえた。

「——マリ、ネ」

鬼灯はその時、凍りついた気がした。顔を離して立ち上がるマリネ。唇に指を添えて呟くように、唄うように言葉を紡ぐ。

「おにんぎょさん、今日は何しましようか、って」

その瞳とかち合う。それは硬質な色を湛えて底が見えなかった。

「もう時間なのでえー失礼しますですう。今日はありがとでしたあ」
鬼灯がシヨックのようなものから立ち直る前に彼女は退出の意を述べた。そこにいるのは先ほどお茶を飲んでいた時と変わらない、楽天家で昼行灯のマリネ。

「ふふふふ、秘密の共有、しちゃいましたですねえ。いろんな人に自慢できますですう」

スキップでもしそうな足どりで扉へと向かう。鬼灯には背を向けているのに、未だに硬直が解けない。背筋は凍りついたままだった。扉が開き、その姿が隠れ、扉が閉められる。それまで鬼灯は動けず、話せずにいた。

「夏梅ちゃんとかあ、リンちゃんとかあ、博士とかあ、迎ちゃんとか！でも話せませんねえー言えませんがねえー」

指折り数える素振りを見せながらも彼女は鬼灯を振り返らない。不自然なほど鬼灯のことを気につけない。もう用はない、とでも言いたげに。

「——でも、ご主人様には言っちゃってもいいかな？」

「そういう不用意な発言はどうかと思うけど？」

こんな場所で、と苦言を述べるのは同胞の少女。

「ふふふ。ヤキモチですかあ？」

彼女の皮肉にマリネは幸せ気分のまま言葉を返す。若干的外れだったが。

「あんだと話すのは疲れるから嫌だ。さっさと行きなよ」

フィアは吐き捨てる。彼女としてはこれ以上会話するのは無意味、ということをお願い知ったが為なのだが、それを正面きって“勝った”などと喜ばれれば、それはもう、堪らなくなる。その場で子供にするように叱りつけてしまいたい。

「お仲間なのに冷たいですねえ。行きますけどー」

マリネは最後までそんなことを言っただけで去っていく。

また、こんな調子のマリネが二十代の半ばだという事実と自分の方が年下だという事実を思い出して、悩んで、結局止めるのだ。話す必要なし、と評価したに過ぎない。

「お見舞いに来たよー」

フィアは軽く挨拶して、部屋に入る。そうすれば仮とはいえ部屋の主となった少女がフィアを迎えた。

「お久しぶりです、フィアさん」

柔らかな微笑みはちつとも十代の少女の煩雑さが無い。優雅で、落ち着きがあつて、マリネなんかとは比べようもないほどに大人びている。

……大人びた少女がいれば、子供過ぎる大人もいるって事が。個性ある面々が多くて困る。これで組織として成り立っているというのだからフィアにしてみれば不思議だった。

——何の縁か、嫌がらせか、異界の能力適性者として意志ある異界との交渉役という大それた仕事を請け負っているが、私自身は普通だ。

「途中でマリナと擦れ違った。すんごいウザイくらい浮かれまくってて、どっか頭でもぶつかればいいのにつて、何度思ったことが」
席を勧めお茶の準備をする鬼灯にフィアは簡素に感謝を述べる。
「暫く顔出せないから、その前に会おうと思つて」

「いつも遠出ですね」

「長期任務しか用意されてないんじゃない？それ以外、引き受けたことない気がする」

何かを思い出したのか、顔を歪め、それを振り払うように紅茶を飲もうとしたが、熱いことを忘れていたのか、口をつける寸前で留めた。

その仕草がやけに幼く見えて、鬼灯の口元が緩んだ。年齢にあった行動を取り平凡・没個性を目指す彼女がそうやって失敗する姿は微笑ましい。いつもハキハキとした彼女はその実、小さなことでクヨクヨとして、そんな自分に駄目だしするようにして明日への活力に変えているのだ。そんな彼女を見ていればこっちまで頑張りたくなってくる。加奈と珠洲が掛け合わさったかのような彼女が凄く好ましい。

「珠洲、今だから言うけどね、最初はあるが嫌いだった。けど、変わったよ」

「あんたはあんたらしくいなさいよ。周りに引つ張られちゃ駄目。自分が振り回すんだよ」

じゃあ、と片手を上げて名残も無く出て行くフィアはどこまでも凜としている。立ち姿がカッコイイ、とか仕事をしている女だ、とか。普通だったらそんな評価かもしれない。

けれど、彼女はそっけないながら助言をしてくれて。珠洲にとって、いや鬼灯にとっては良き友人である。

「あ、そうそう。はい」

一度扉の外に出た彼女が戻ってきた。その手に掴むのは一人の人物で、彼は鬼灯の茶飲み友だちの一人だ。常連さんになっているのだが、何故だかいつも人に連れられて来る様な気がする。

「部屋の前でうるちよろしてた」

「あ、え、えっと、ここに、こんにちは、珠洲さん」

「こんにちは、郵便屋さん」

郵便屋さん、と呼ぶのはあだ名のようなものだ。彼の所持する異界が移動の扉だからだ。任務地に移動する為に使われる扉は組織と発つ先とに固定して自由に使えるようにしてあるのだが、この扉は一つではない。彼の異界は扉を作る能力であり、彼自身はそれの出入りを管理する者だ。だから、ものや人を運ぶという意味で“郵便屋”と呼ばれて親しまれている。おずおずと、挨拶する彼は、任務時にはこやかに送り出してくれるが、平常時は人見知りのようにおどおどおろおろとする。

しゃきつとしなさいよね、と一言を置いてフィアは今度こそ完全に出て行った。

「お茶、いきませんか？」

鬼灯から切り出すと、郵便さんはい、と返事をしてにこやかに笑った。

「よっぽど暇なのね、蠅の王様？」

鬼灯は窓辺に腰掛け、月を背にする男へと声をかけた。

「可愛い女の子を助けに来た勇敢なる王子だろ？」

「あら、私は捕らわれの姫ではなくて、毒リングを持った悪い魔女よ？」

軽口に軽口で返す男とはけれど王子などという甘い関係性を持った覚えはない。どちらかといわずとも、——敵だ。

「あんたノリがいいんだな」

意外だ、としみじみ言つて無邪気に笑つて魅せるヴェルゼ。鬼灯も笑みを返す。しかし、こちらは冷えた視線による、凍えた微笑。「合わせてあげているのよ、ヴェルゼ。私って優しいでしょ？自分に何かした相手を侵入させてあげるなんて」

鬼灯の力の原因はこの男だ。このタイミングで来たのなら間違いない。前回の接触によって植えつけられた、何かしらの能力と見える。何か余計なものをプレゼントして鬼灯の内部を圧迫させて窮屈にしているのか、能力による作用で能力を成長させているのか。どちらにしろ、態々敵に塩を与えてくれたわけだ。

「そうだな、暢気なお間抜けさんだと思ったよ。畏つてわけでもないようだしな。そちらにもそちらの都合があると見える。仲間になりたいつてか？」

「冗談言わないで」

ぴしゃりと言い放つて、一息。

この男と話すのは鬼灯に不安と不快感を与える行為だ。以前の無自覚なままとは違って、今は自意識が明確に芽生えてしまった。

表面は友好的ながら鋭く刃を向け合っているかのようなこの会話が辛い。一步間違えば、たちどころに天敵同士の食い合いが始まる、そんな緊張感に満ちている。

「どうせ人工の異界を作つてばかりいたから“製作者”から辿られるのを恐れてそろそろ“本物”を使いたいだけなんでしょう？それに私を利用するつもりっていうのが皮肉ね」

仲間から裏切りの異界が出た、としたいのか“異界の自然暴走事件”として結末を用意したいのか、それはどちらでもいい事。

けれどヴェルゼはそれに曖昧な笑みを浮かべただけだった。当然らずとも遠からず、ということか。それもあるが別の狙いがある。

「——もとに、戻しなさい」

強い語調で押せば、それには眉を寄せる。

「好かないか？強いだろう？」

声音に陰はない。だが表情には理解できない、という不愉快が浮かび上がっていた。強いということはそれだけで彼には随分と“良

いこと”なのだろう。それ故に、強すぎる、という鬼灯の主張が分らない。

「この状態は私の意ではないもの。ああ、このまま拒否するようならうつかりあなたを捕まえてしまいかもしれないわね」

「実力が対等だというのか？」

「からかい口調で述べた鬼灯にヴェルゼは上等だ、と受けて立つように言ってみせた。

確かに、いくら力が増長したとはいえ制御ができなければ意味はない。加えて、制御から外れた力を使って尚、この男に勝てる確証は無かった。ヴェルゼの力は未知数。だが、鬼灯の能力は組織の深部まで潜り込んでいるこの男にはお見通しだろう。

「守られるだけの人間とは違うの。……それに、あなたは人間ですよ」

「——さあ？どうだか。そもそも人間だという定義はなんだか」

誤魔化しているというよりも本心で分からないような口ぶりにこちらの方が分らなくなる。考えを放棄したとも、諦めたとも取れた。

けれど、彼には確かに人の気配と異界の存在が交じり合っている。そして二つが交じり合った気配も外見も迎にそっくりなのだ。人と異界の共存する鬼灯もリンも同じといえは同じだが、決定的に何かが掛け違えているような、そんな違和感がある。

「お姫さんのことはよく分かる。何故、迎と同じ姿なのか。それが本音だろう」

核心を突くヴェルゼの言葉。夜の空間に響き、彼を王と称するのに相応しいような気にさせる。獰猛で野性的、孤独と不安を内包する。牙を持ちつつ静謐さをも兼ね備えている。静と動、二つの性質を持ち合わせた夜の王。

「少なくとも、あんたはアイツを信用している。組織を背に守るところまでは出来なくとも、組織に忠誠を誓って何事も逐一報告するほどでもなく、異界でない個人の感情で迎を見ている」

「憶測ね。何かあれば私も組織に報告するわ。今は何の証拠もない。実際の被害も何も出ていない。あなたの言うことが全て狂言だという可能性もある」

「捨てきれないだけさ。それを未練というんだ、“異界”」

姫、とも鬼灯、とも呼ばない。代名詞でもない。“異界”と呼ぶ声。

鬼灯に動揺が、不安が広がる。まるで迎に言われたようだった。冷たく、硬質な、侮蔑した声音。迎ではないと分かっているというのに、何故こんなにも心が軋みをあげるのか。

「分からないわ。私には感情なんてない。私は個人ではない。鬼灯の木の一滴、一部、一欠けら。……知識による人間的行動を繰り返し、コミュニケーションを図るだけ」

「その本体は何処に行った？」

びくんと体が反応する。威圧に押されたのかもしれない。核心を突いたからかもしれない。けれども、真実に触れたからではない。

「接続は随分前に断ち切られているはずだ。他の子供たちを感じ取ることができないだろう？」

真実ではない。事実ではあっても、そこから導かれるものは真実ではない。

「確かに、私たち全てを統括する本体はなくなった。そしてパイプを失った欠片は飛散し、それぞれに自由を手に入れた。けれど――」
「知識の共有はなされている」

それが真実であれば鬼灯は鬼灯でなくなってしまうような気がした。恐怖が、生存本能に即するときにはしか湧かないはずの感情が心から浮き出てくる。

「これは異常だよ。勿論、人間の中に異界が入り込むのも、ただの

人間が異界を御しきれるのも変なことだが、まったくないわけじゃない。現に、姫さんのお仲間にいるだろうか？」

それはリンのことを指しているのだろうか。

組織では異界の扱いに三種類ある。一つは封印して寝かせる。一つは所持するのに適当な人物を手配して封印をつけて制御し組織の為に使用する。一つは異界との利害によって契約を結び組織に役立てる。

この異界との契約は異界に気に入られた人物にも適応させられる。最近で言えばヤイルだ。あの腕輪は所有者が権限を破棄しない限り外れない。

「だがな、だが、異界の本体から孤立して存在するのは違う。あんたは——“本体”になったんだよ」

「——わかつていたはずだ、その能力。その知識。導き出されないはずがない」

何かが、瓦解する。

変わってしまったことを自覚させる。

鬼灯は、鬼灯の実の一つとして、ただの人形であるならば感情が芽生えたとしてもまだ良かった。

けれど、違う。鬼灯は鬼灯の木——その本体であるというのなら、それは純然たる現象が意志を持ったということ。感情を持ったということ。“異界”が変容した。

——かつての、“異界”のように——

「な、に……？」

変な言葉が思考に過ぎった。

けれどその言葉を考えることもなく、ヴェルゼは言った。

「もう一度言う。俺のところに来い。今なら、まだ間に合う」

「――おまえはこちら側の存在だ」

「……何が間に合うって言うの。目的も分からないものに関わるつもりはない。信用できない」

辛うじて出した声は、自分でも分かるほどに情けない、震えたものだった。不安が滲み出ている。それでも、自身を奮い立たせた。ここで言うておかなければ、自分が揺らぐような気がした。感情を持ったからこそ、この男と対峙するのが余計に怖くなった。震え上がる心を直に感じ、震えを押し留めるのに酷く体力を消耗する。神経がすり減らされる。

「あんたは利用されているだけだ。この組織事態、目的が分かるのか？その創立の所以は？どれくらいの規模だ？」

矢継ぎ早に聞かれて、しかしそれ以前に疑問に対する答えなど一切求めていないのが分かった。そして、己がその問いに対する答えを有していないことにも気づかされる。

「あんたはどうせ利用できる駒。情報も与えられず、ただ尖兵として消耗されるだけだ」

その時の鬼灯の心情をそれ以上に的確に表すことは出来ないだろう。まるで見透かされている。羞恥心など無くとも、震えは身体に走る。恐怖が鬼灯に走る。

けれど、鬼灯は何も言えずとも、首を振ることが出来た。

「なあ姫さん、俺はあんたが必要なんだよ」

俯き、否定を繰り返す幼い仕草の鬼灯に一步近寄ってヴェルゼは優しい声音で囁いた。

「俺にはさ、大事な妹がいる。アイツの妹でもある。だからさ、助

けてやりたいんだ」

——妹。

その言葉がやけに耳についた。彼にそんな存在がいることが不思議でならない。大切だ、などという感情を持つ相手がいることを、これだけに似ていて血縁ではないという答えもない向かいに対する態度と“妹”への態度の違い。

わかった、分かってしまった。自分を必要だといいながら、異界と呼ぶあの無機質な声。鬼灯とさえ呼ばずにいるのは、鬼灯を鬼灯として認めていないからだ。

必要なのはその能力。そして、それは手段でしかない。異界は——ヴェルゼにとって目的を果たすための道具でしかない。

彼には自分と妹の世界があつて、そのほかに迎という存在があるだけなのだ。組織や異界はそれに付属するものという認識でしかない。

「何故、人の側に着く必要がある？」

鬼灯は無意識の内でも拒絶を繰り返したのだ。ヴェルゼに改め疑問を口にされてそれに気づいた。意志は変わらない。組織から脱退するつもりも、彼の仲間になることもない。

差し伸べられていた手がさつと引つ込むのを眼で追いかけてしまつて、眼を伏せた。

「——わからないわよ……」

ただ、いつのまにか守りたい人や大切な人たちが増えていただけだ。

ザ——ツと吹いた風がその人物を浚うようにして姿を消した。

紅い舞台

——命を刈り取ることを恐ろしいと思ったことはなかった。

それは直接的ではなかったからなのか、それともそう思う“心”がなかったのか。執着さえもなかった、今は、そのどれもが条件を満たしている。

「っ」

崩れ落ちる、小さな体が前にある。

その体軀を屈ませて、患部へ、広がり続ける血の噴出すところへ手を当てる。

それは心臓だ。自分と対峙した小さな体の、胸に、禍具が突き刺さり、湿らせている。

——それが何処の誰のものか、その禍具を扱うものは誰なのか。鬼灯は自らを見下ろし、視線を下げて、その“腕”を視た。腹から突然生えたそれはゆっくりと引き抜かれる。

いつも生意気で、上から目線のような口だつて聞く。幼いながらもその瞳は明確な意思と覚悟の上にいつもあつて、自分より年下なのに頼れるつて思っていた。一つのことだけに集中する性質で、固執して、その対象が博士だけに絞られると、途端に借りてきた猫か何かのように従順に忠実に、使命感に溢れていて、真っ直ぐ立っているのに憧れた。典型的なツンデレで、喜怒哀楽は激しいけれど、大人顔負けの冷静な判断を下すことも出来る。一緒にお茶を飲んで、威嚇した動物のようだったのが、段々と他の人たちとも打ち解けて、気軽に掛け合いのような喧嘩の様な話を一杯した。

「——夏梅？」

返事はない。けれど身体は倒れ、鬼灯に寄りかかり血に染め上げていく。

「あーあ、鬼灯のせいだからね」

余計な死人が出た、とフィアが呟く。血塗られた刃を確かめる様に触り、退屈そうな顔で、何気ない風に仲間を切り捨てた。

「
」

なんと言ったのだろう。その表情はやっぱ小生意気な、幼いもので、声も聞き取れないほどに小さな、小さな紡ぎ。

「——鬼灯」

呼びかける声はいつたい誰のものだったろう。諫める為のものだというのに、気遣いがある。

けれど鬼灯は——音もなく。ただ、ただ立っていることしか出来ない。

「夏梅さん、どうして……」

急に口調が変わった鬼灯に迎は凍った表情を見せた。それは人格入れ替えの証拠だった。

動揺して理性が飛んだ為か、制御不能の為かは迎には判断のしようが無かった。それに、どちらにしても状態は似たものでしかない。理由はいみない。現状——今が危険なことには変わらない。

「そんなの、告げ口しようとしたから」

告げ口——謹慎中の鬼灯がこの場へ来たのはついさっきだ。用件も何も聞いていない。けれど、“彼女ら”が告げ口、と呼び、このように組織を構成する人物を手掛け、殺人を意とするからには、組織への反抗の目的のある意志グループとみなせる。

鬼灯がその仲間だというのは。いや、裏切ったということか。夏梅を襲ったのは、鬼灯に対しての見せしめか、罰か。どちらにしろ仲のよい人物を目の前で刺されること、何も出来なかった事実というのはどうしようもなく心を抉る。それが鬼灯に対しても適用されるのかは別だが。この様子では効果があると見える。心がないはずなのに、感情のないはずなのに。ただの現象のはずなのに。——ヤイルに会った時を思い出す。感情が宿っているように見え、一度は否定した可能性がこの場で、こんな時に浮かび上がってくる。

……鬼灯は、どうしようもなく人間的だ。

切り捨てることが出来るのか。自分は、何を思うことも無くその存在を断罪できるのか。

迎の思考は敵を前にして、けれど鬼灯にだけ注がれる。

「それに犠牲が必要だったんだよ？」

マリネが言った。始終笑顔を浮かべた彼女は、能天気でも何でもなく、ただ嘲っていたのだ、自分を。その腕は郵便屋に絡みつ き、二人は恰も恋人同士であった。けれど、郵便屋はいつもと違う。同じなのは姿形だけで纏う雰囲気も気配も身のこなしも、全てが違う。何より、存在が違う。郵便屋の形のあの存在こそこの組織に反抗するグループの頭。

——たった三人のグループで何が出来るというのか。

出来ることといえば、そう。鬼灯の心を傷つけることだけだ。自分と仲のよかった存在は、あけてみれば悉く敵だった。そんな馬鹿げた話がここにある。

「犠牲——？」

自分にどんな罪が架せられているのだろうか。ヴェルゼとの逢瀬は誰に告げるとも言われていない。知られてはまずいこと？それはそうだろう。けれど、自分はそんなことの為にここへ来たわけで

はない。会議室の中に大勢の人がいるのは分かっていた。そこには博士も夏梅も、迎もいることを承知で、この場に来た。

会議の中断に対して組織や上司に罪を問われるのならばいい。けれど、なぜ彼らがそれを罪という？——自分は、ただ迎に問い質したいだけだ。真実を。

この不安を払ってくれ、とそれだけしか望んでいなかった。けれどそれが彼らの禁忌に触れた？……夏梅にあんなことをするほどの何かを、自分はなしてしまったのだろうか。

「姫さんのことを起こすためさ」

郵便屋の声と迎の声が重なる。不意に感じた寒気に距離を取った。隙を見せていい相手ではない——迎は。

「「よお、この場面を見るのは初めてだろ？こうして現実を見るのはどういう気分だ、姫さん」」

「迎くん、あなた——」

迎の口から発される言葉は、迎本人のものではない。よく似た、違う存在。

——ヴェルゼ。

何もかもの原因。悲劇の、根源。

「「おっと、勘違いしないで欲しい」」

迎は自分の口から、自分以外の意志による言葉が発されるのを聞いていた。ままならない身体は、まるで誰かに乗り移られているようだった。けれど、それが誰に分かるうか。

自分は敵としてみなされる。

「「俺はヴェルゼ。迎とは別だ。あいつも“ここ”にいるけどな」」この男は誰だ。馴れ馴れしい。しかし弁護をもする。

自分の身体を掌握したこの存在は、……差し詰め幽霊か。そんな

非現実的な存在がいるとでも？しかし現実には“異界”という存在がこの世界にはある。ならば幽霊も否定できないと？

——異界の能力だろうか。

「『そうだな、分かりやすく言うと、俺は迎の中に間借りしてた、寄生体とでも言おうか』」

言葉一つ漏らせず、指一つ動かせないこの状況が酷く苛立つ。

それは鬼灯の眼を見て、酷く揺さぶられる。何故、俺なのか。そこに理由が潜んでいるように思えた。何の関係もないはずなのに、こんな男など——ヴェルゼなど俺は知らない。

「『もちろん、俺の身体は別にある。ただ、それが使えないからこうしてここに身を隠してた』」

体が使えないとは？——数々の疑問が渦巻く。

そんな今、この状況は有り難いともいえる。激情に駆られ迂闊に動くこともないこの状況。冷静にいられない自信がある。

「『まさか、探し続けていた敵が自分の中にいるとは思わないだろう？』」

——ヴェルゼ

それは組織の目的の一つ。いや、それこそ大本だ。

人の世に存在する異界——そんな歪を意図的に生み出す存在が、ヴェルゼだ。組織はその男を捜していた。けれど、直接対峙したことはなかったはずだ。俺も、この存在も。

——どこか感じる既視感。それは自分に出会うかのような不思議な感覚。

ヤイルはその会議に出席していた。

それは鬼灯を抜かして、組織の構成員の八割が揃っていた。残り

は任務中や最低限の警備らしい。大きな部屋だが、組織全体の構成員のほとんどが出席となると、狭苦しい印象を与えている。傍には迎、リンという幼子、博士と呼ばれる怪しげな男、夏梅が座っていた。順に出入り口に近い席だ。

ここ数日、迎は監視役という名目で鬼灯の謹慎中はヤイルのパートナーとなっていた。組織に入って、まだほんの一週間も経たないそんな右も左も分からない状態で、ヤイルはこの会議に参加することになったのだが、議題が鬼灯。それも自分と戦った時のことに所以すると言うのだから出席しないわけにもいかないだろう。

——異界が意志を持つ、その異常性。そして今後の対応。

資料を配布され、次々と報告者がそれらを上げていく。といっても、鬼灯の監視役でもある迎が発言することが多い。もしくは研究者だ。そういう場面を見るとこの組織も普通の会社のようなものとヤイルにも現実感が身に沁みてくる。何せ、この組織は得たいが知れない。輪郭も定かではないように思っていた。

廊下で擦れ違う人でさえ、見たことのある人物のみで、十人程度による小規模組織なのではないかとさえ思ったほどだ。そもそも、この組織も建物もどこの国にあるかもしれない。

任務に出かける以外は出られないようになっていくらしく、中庭はあれども外に繋がる出入り口さえ見つからない。建物は上も地下もどれだけあるのかさえ把握することが出来ない迷宮になっている。任務時でさえ、異界の扉を使用しているのだから、この場所がどことも査としてしれずとも生活が出来るようになっていく。

——鬼灯はもともと、“異例”として注目を浴びていたらしい。

異界のできかた（・・・）は自然発生型、人工発生型、そして出現型の三つに分かれる。

自然発生は長く期間を経た事物に異界が宿するというものであり、

それはリンという幼子の中に吸収された異界——“森”など。

人工発生型は以前からあったが最近では急激に増えているらしい、異界による“事件”の原因。古いものに力が宿るのは当然としても、それを意図的に暴走させて事件を起していると思われるもの。自然発生型は伝説や噂話となっているものが多く、危険性が無ければ組織の回収対象にはならない。だが、この人工発生型は人の世に大きく影響を——言ってしまうえば殺人など——犯罪事件に関わるために即座に対処する。これが元々の組織の出来た理由らしい。——“水魚の噴水”だか、かなり危険な異界もあつたらしく、何人もの構成員が亡くなつたらしい。それを壊し、吸収したのが鬼灯というわけだ。

そして出現型は、“異世界”と呼ばれる、隣り合わせの別空間からこちらに“渡つて”きたもの。突然、人の世に現象が起こり始める。——空間隔絶の能力を持つ“間”や、異界の能力を切断することの出来る刀——“鬼斬”など。

もう一つの分類法——異界側に立った分け方として、二つに分けられる。前者は研究として、また時間を経た方が能力の格として上げるので、その見分けとなる分類法だが、こちらは戦闘スタイルといったほうがわかりやすい。意志を持ち、自らの本性に基づき能力を行使する“自律型”——“森”もこの部類に入る。リンという気に入った者に対して“力を貸す”“協力する”という関係性を持つ。もう一方は他律型——装備型のもは殆どこれに辺り、使用者を自らの意志によって選ぶ代わりに能力の行使は他者に全権を預けたもの——“鬼斬”などのように誰にでも使用できるものもあれば、選定者以外は使用を拒み傷つけることすらある異界もある。後者の方が圧倒的に多いので、組織は封印を施したり、能力の弱いものであれば符術などで制御権を奪って行使している。

鬼灯は自然発生型の部類だ。そして自律型。これだけならば問題はない。しかし、人の体の中にある。——それはリンのように人と協力する形とは歪んだ関係性だ。外側は人でありながらも、それは

単なる異界でしかない。現状に当てはめるならば“人に協力する自律型”が近い。しかし、鬼灯は個体として存在している。自由に歩き回り、能力を行使する。それが他の異界に能力の制御を預けるなどということは、ない。

——だからこそその“異例”。能力が吸収であるからこそできる芸当。

細かくすれば他にも分類法は多々あり、人の行動などによる一定の現象が起された場合にのみ能力を発生させるものや、人を惹き付け呼び寄せる能力を持つものなどもある。ちなみにこの後者には鬼灯が代表例だ。物事を引き寄せる性質——それも本性によって変わるものだ。

「その、鬼灯が“感情”を持つ——人のように？」

改めて説明されるとその異様さが際立つ。

あの時、初めて会った時、ヤイルは突き動かされるように鬼灯にのめりこまされた。その強い瞳が、恐れのない心が、好奇心の塊のようできて知的な彼女が——ヤイルを惹き付けた。けれど、それは情が引きずられたというのか、能力に。

本能的な恐怖を抱いた。あの状況で微笑を浮かべる姿に異様だと思ひ、けれど惹かれるような部分もあった。感情豊かに見え、しかし現実には微笑み以外の表情をみせることのない無表情に、彼女を何とかしてあげたいと思った。……それが、能力のせいだということか。

ヤイルは自身の心を信じることが出来ない。初めてあった少女に現を抜かし、長年ともにいた仲間を切り捨てた。それは普段の自分ならばありえない行動ではないか？

考えれば考えるほどに分からなくなる彼女への思いの正体。

——しかも、そんな彼女が自分との出会いをもとに“感情を得た”？

それはまるで、どこかのできすぎた物語だ。仕事で惚れさせた相手を本気で好きになってしまうような、裏切り利用する為に近づいた者に恋をしてしまうような、そんな三流よりも拙い恋愛話、使い古された悲劇。

——そんなものだというのが、俺と、鬼灯の物語は。

自分がわからないからこそ、苛立つ。何も理解しないままに弁護の為の言葉を開きそうになる。自分に自信を持ちたいなら、この思いに自信を持ちたいなら、疑うよりも先ず先に信じればいい。けれど、自分は自分を疑ってしまっている。——俺のこれはただの能力効果なのか？

——この思いを、本当に気のせいにしてしまっていていいのだろうか。本当に？

思考の狭間にいる時間は、そう長くなかった。しかし、外の時間では既決するに値する間だった。会議の終わり、結論を聞かされる。いいや、聞かない。聞きたくない。

ヤイルは“人間”になった異界を、鬼灯を認める。だからこそ、組織などという曖昧な存在の結論などに揺るがされるわけにはいかなかった。

立ち上がり、抗議の言葉を開きかけた。

——コンコン！

強めの、ノック音。

静寂に響く音に全ての視線が集まった。入り口の扉をすかさように、強い視線だ。

それは会議に出ていないものだけがする動作。皆、それが誰なのか分かっていて。この場にいないものなど、限られている。

扉は誰が返事をするでもなく、静かに開かれる。

……ああ、やはり。

ヤイルは自覚するしかない。

能力の影響にしろ、何にしろ、自分が彼女に強く、焦がれていることだけは事実なのだから。

彼女は口を開く。一番近いのは夏梅だ。

そして、惨劇は起きる。

能力と王の異界

ヴェルゼがちらつとマリネを見る。それだけの視線の応酬で、けれど万全だった。

「大人しくしててね、みんな」

指で何かをツイ、と引つ張るような仕草を見ると、見えた。それは部屋中を横断し、囲いを作っていた。いつの間に作っていたのだろう、檻は眩い輝きを持つ、糸によるものだ。マリネが示した指に掛かる、煌めく白。それは眩い輝きを持つ、糸だった。

ヤイルたちの視覚を覆いつくし、巨大な繭の状態にまで作り上げる。分厚い皮革のように、彼らを隔離し、残されたもはただ夏梅と、身体を乗っ取られた迎。そしてかつての仲間だった“敵”——鬼灯の味方は、いない。

「さあ、わかつたろう。姫さん、“あんたが悪い”んだ」

「私、が……」

糸は糸ではない。鋼糸と呼ばれる部類で、下手に触ればこちらまで切断される鋭さを持つ。また、それは白い光を纏う。紫電——それが蛇のように糸を駆け巡っている。

「そうだ。“あんたのせいで”傷つくものがある。“あんたがいるから”傷つくものがある」

「夏梅が傷ついたのは、私の、せい——」

力なく、鬼斬が切っ先を下に向けた。

夏梅は床に倒れている。血が広がる。赤いものが視界一杯に埋め尽くす。

絶望と虚無。後悔と反省。虚ろに、鬼灯は言葉を繰り返した。

「大人しくしなさい。この異界、触れれば消し炭になるわよ」

目の前の物体に安易に触れようとしたのか、警告と忠告を織り交ぜた言葉を放つ女はハシバミだ。幹部の一人で彼女が総括するグループにヤイルは所属する。鬼灯や迎、リンも彼女が直属の上司となっているが接点は薄い。

「……鬼斬が向こうにあるのは痛いわね。術師の方は？」
術師は首を振る。

試行錯誤しようにも、大抵のものは作用を施す為に触れなければならぬ。 “天才” の名を冠する術師の夏梅ならばまた話も変わっただろう。防御には疎くとも、攻撃力、貫通力に関しては右に出るものはいない。その手数の豊富さからこの機を脱出できただろう。しかし、当人は向こう側にて重症の意識不明。

そしてもう一つの打開策である鬼斬は鬼灯の手にある。向こう側で一人敵と対峙している彼女とともに。実際、あれほどの切断力を持つものは他にない。

空間を繋げる能力の郵便屋も向こう。異界の影響を受けないはずの迎もどうしてか身体を乗っ取られ向こうにいる。手は、ない。

——歯がゆい。

この壁の外で、ヴェルゼは鬼灯を洗脳するかのようには批評する。突然現われた存在だ。ヤイルにとっても、この組織のものにとっても——しかし、鬼灯にはそうではなかったのか。むしろ、ヴェルゼから見ても突然現われたのはヤイルの方が。

「その刀があんたの所にあるのは嬉しい誤算だった」
声が響く。姿は見えない。カツ——と靴音。

迎だろうか、ヴェルゼだろうか。

そこにいるはずの人物は音だけしか悟らせない。それが、憎々しいこの壁の向こうに二人がいるのはわかつているのに何をやっているのだ。

迎は何故、止めない。何故、間に割って入らない。何を、呆然としているんだ——ッ!!

「っ！」

怒りに繭へ触れればピリツと鋭い痛みが走る。まるで帯電をしている。触れた部分は一瞬の接触到煙を上げた。ヤイルはその腕には加護の異界がついているために大きな怪我をするには至らなかった。しかし完全に防ぎきること出来なかった。

組織に入っすぐ、腕輪は封印を施されその能力は大方落ちてしまっている。ヤイルへの牽制だ。しかし、それが今は枷となっている。

「ヤイル。あなたの異界は守る為のもの。この場では適さない」
能力に能力で押したところで、加護の腕輪は攻勢に転じれない。刃物に加護を加える程度で、それは物自体を丈夫にする意味しか持たない。貫通力も攻撃力も上がるわけではない。ヤイルの異界とはそういうものだ。

あくまでもヤイルの身を守る為。それ以上でもそれ以下でもない。だが、だからこそ、今必要なのはヤイル自身が攻撃となること。抑えられた能力でどこまで対応できるか……。

（最悪、丸焦げの感電死だな）

——だが、今ここで命をかけなければどんな時に命を賭けられるだろうか？

「守りたいものを守れなくて、どうする……っ！」

ヤイルは掌に触れさせた。皮膚の焼ける匂い、爛れる肌。けれ

ど、力を入れ、繭へと手を押し付ける。

「鬼斬は異界斬りの剣だ。“だから”あんたに濃縮され納められていた異界も暴発するように出てくる」

どれだけ制御を他人に預けたところで、意味がない。

鬼斬は暗い輝きをその場に灯す。強弱をつけるようなそれは何かを伝えるようにも思える。

——そう、鬼灯は一人じゃない。

鬼灯の中にはいつだって、他がいた。珠洲も加奈も、殺人鬼も、いくらだっている。鬼斬は鬼灯の補助としていつでも一緒にあった。組織に入った当初からのパートナーだ。よくよく考えれば迎よりもよっぽど相棒らしいじゃないか。

それに気づき、薄く俯いたまま微笑を浮かべた。鬼斬を握る手に力が戻る。

「待ち遠しい。どれだけ願ったことか。さっさとこの世界に来いよ、異界」

誘うその声に、鬼灯は手を取ってしまうのか——？

そんな不安に後押しされるように理性が弾けとんだ。

「ッ！ここを突破するぞ——！！」

ヤイルは齒軋りしながら叫ぶ。不満が爆発するのと同じ時、拳を叩きつけた。

己が傷ついたって関係がない。ただ、彼女をとられたくない。

——ふいに風が吹き込む。

「——ッ！」

素早く距離を取り、見据える前には、……光が見えた。

「鬼斬——！」

鬼灯は一瞬で踏み込み、ヴェルゼに——駆け込んで間に入ったマリネ諸とも迎へと剣を着き立てた。追撃に備えるように飛び退る二人を追い続けることはせず、踊るように翻り背後の繭へと傷を刻み込む。——分厚い殻は割れ、中身がトロリと出るように中に閉じ込められた人達が出てくる。

「——無茶をするっ！」

指された部分に手をやり苦々しい表情を浮かべるヴェルゼ。油断していたのか。予想外の攻撃だったのか。どちらにしろ、ダメージは受けたようだ。

「そうかしら？ 鬼斬の性質を知っていれば当然のことでしょう」

異界封殺の剣——それは逆に異界以外に作用をなさない。人には攻撃ができない。

「感情が出てきたと思ったら次の瞬間には仲間を躊躇無く攻撃する冷徹さ——少しぐらいは動揺したらどうなんだ」

「信じてるの。私は私の仲間を」

一瞬。その隙が欲しかった。だから、迎へと攻撃した。その攻撃が通るかどうかは賭けだとしても、死には至らないだろうと考えた末だ。鬼斬は迎を気に入っている。だから、“間違え”ない。

人質がいては分が悪い。夏梅のことも気に掛かる。——そのことに焦りが生まれたのは事実だった。けれど、瞳は一瞬たりとも逃さなかつたはずだ。

なのに、

「調子に乗るなよ、鬼灯」

声をかけられて、初めて首筋にある感触に気づいた。咄嗟に動こうとした手は拘束されている。抵抗は無理。反撃のチャンス——

「無駄だ」

「がは——ッ！」

地面に叩きつけられる。脳を揺さぶられ、腹部を靴底で圧迫され、両手を串刺しにされた。

人の身体であつても中身は異界。痛みは感じない。はずだ。今までだつてそうだ。

なのにこの違和感は、身体を苛む。衝撃を受けたように上手く動かない。

——感情が開いたに依じて脳が怪我を痛みとして認識してしまつたのか。

（こんな時に——っ！！）

「抑制された能力じゃない、異界としての能力を今ここで！曝け出せよ！」

「ツツツツ！！水球！」

ヴェルゼの言葉は煽る為のものだ。揶揄するようでもある。鬼灯は散らばる思考を集中させ、螺旋を描くように水を作り出し、放弾する。だが、それは届く前に破裂する。マリネだ。

「マリネは操り人形^{マリネネット}。痛みも感じない。もう忘れちゃったあ？」

ヴェルゼの後ろから顔を出すように這い蹲る鬼灯へ問いかけた。

“私い、鬼灯と同じなんです” “おにんぎょさん”——つい先

日聞いたばかりの言葉だ。忘れるわけがない。

（本当に、そうね。同じ、人形）

彼女に感情は、ない。糸を使って見せても、彼女自身が糸に操られ、命じられるままに動く。不屈の兵士。よく、人に擬態している。柔らかい肌、よく変わる表情、違和感のない動き。けれど、成長までは誤魔化せない。組織で働いていたその間に年を取ることは無かったのだろう。

「——でも違う。私の主は私よ。あなたのように他人に思考を預け停止したりしない」

私は自動人形だ。オートマティ自分で歩き始めた。

「……それ、挑発なのかな」

低い、声だった。口調は同じでも、いつもとは違う。明らかに自分を害したと表情で語る。雰囲気で怒りを表す。ヴェルゼは動けない鬼灯を他所に、足を退け、マリネへと場所を譲った。

「——私ね、あなたの代わりなんだよ？」

言葉は空気を揺らし、言霊となった。強い視線には憎しみがあリつたけ込められている。鬼灯の身体を蹴り、踏みつけ、気持ちまでを踏み躪らんと行動する。叩き込まれる攻撃よりも、彼女の感情の方が鬼灯を突き刺していた。

「あんたのために、私は生まれた！あんたがこちら側にいないから、私は作られた！実験体！」

鋼系の異界を使ったマリネは、人形だ。けれど異界でもある。

人形の身体に埋め込まれた異界が意志を持った形——それがマリネ。

それはどこか鬼灯に似ている。人の身体に入り込んだ異界である鬼灯と相似なのだ。ヴェルゼが鬼灯を必要とした、理由。けれど、それは紛い物では足りなかったのだ。マリネ

——人の中に異界、という形が理想。

「ねえ、何とか言ったらどうなの！それとも、話す価値もない？こんな状況で？」

彼女は意志を持っている。

それは中に埋め込まれた異界の特性か、それとも彼女が時間をかけて芽生えさせたものなのか、鬼灯は知ることはない。けれど、どちらにしても結果は同じだ。

彼女は思考を放棄した。“主”にすべてを託してしまったのだ。

それがどんなことかも、考えずに。

「自分を捨てできることは出来ない。だから、放棄なんて死ぬまで出来ないのよ——っ！」

床に貼り付けられ、身動きできないままに鬼灯は叫んだ。途端、身動きしなかった四肢を動かし、跳ね上がる。縫い付けていた楔は鏡の能力で別次元に飛ばした。狙う先は、

「——ヴェルゼ！」

組織の輩を抑えてヴェルゼと鬼灯の話す場を作り上げていたフィアの声が上がる。

けれど、ヴェルゼ避けることもせず、ただ暗く俯き、只管に何かを耐えるようにしたかと思うと、

「もう、用はない、か」

突き出した腕で全ての飛来物を掴み、握った。パキッと乾いた音が誰の耳にも届く。

開いた先に異界の産物であるナイフが粉々に砕けていた。それは明らかに人の力ではない。そして、迎の顔には面影の似た青年が重なって見えた。

「金髪——ヴェルゼ！」

ゆつくりと、分離をする。まるで幽霊にでも離脱されるような、不思議な光景。重なった二人が顔を明確に別個にし、腕が増え、胴体が離れる。ペラリ、というように前のめりにもう一つの身体が剥

がれた。

しっかりと実体を持って足を着く片方とは別に、抜け殻となった身体は糸の切れた人形のようにペシャンと倒れかけ、迎はよろけるようにたたたらを踏み後、膝を着く結果に留まる。

「フン——ッ」

見下し、分身である迎をヴェルゼは笑う。そして、郵便屋の身体に入り込む。

「……久しぶりだな、兄弟？」

郵便屋の姿形が、ブレて一瞬。金髪の迎——ヴェルゼがいた。

愛しさと憎悪の狭間に眠る者

鬼灯はその時のことを忘れることはないだろう。ヴェルゼは兄弟と言った。憎しみと悲しさを交えた瞳がそこにはあった。親しみはない。けれど、何ともいえない愛しさがあつた。離れきれない、諦めきれない未練。鬼灯に未練を捨てると、組織を抜けて仲間へと唆した彼がそれを抱えているのだろうか。そんな人間的な部分……。

——ヴェルゼは人だろうか？それとも異界？

鬼灯には判断が出来ない。ヴェルゼがどういう存在なのか、何を考えているのかも、何もかも、知らないのだ。ただ、数回言葉を交わしただけでしかない。

（違う。ヴェルゼは敵。情をかけてはいけない。その思考を考える意味はない）

けれど、彼の本心はどこにあるのか。

異界を作って、組織と敵対して、異界を協力させる——迎を兄弟と、そして妹がいると言った。助けてやりたい、とも。人の側に着く理由を尋ねた。そして鬼灯を“こちら側”と称した。

（それはヴェルゼが人の側にいないということ。けれど、それならば迎は？“妹”は？）

決して異界側だとは言わない。けれど、少なくとも人の味方ではないだろうヴェルゼ。

敵対する迎とヴェルゼ——。

「もともと、現象であるだけの異界が能力を抑えようとするから問題だったんだよ。……ま、そうでもなきや人間の器に入れるわけがない、か」

……俺も同じだな。

ヴェルゼの呟きは意味深で、とても穏やかだった。

状況を勘違いしそうになる。親が子供に指摘するような、正しい

ことを正しいと認識させるための、厳しくも優しさの伴うそれ。鬼灯への言葉のように聞こえて、その実、ヴェルゼを身に迎えていた迎への労わりのようにも聞える。

「ヴェルゼ、あなたは本当に——」

組織の者たちが戦っている最中に、敵の心情を考えるなどという馬鹿なことをしてしまっている。“普通”の人は避難し、異界対策の集団は異界で対応し、異界の依り代や異界は組織のために戦う。相手の駒が薄くとも、実力で考えれば防戦一方に見えて、実際はヴェルゼ側の方は余裕でこの“話し合いの場”を作り上げている。鬼灯はそれでも、彼を理解したいと思っていた。子憎たらしい笑みを浮かべたのではなう、表情を削ぎ落としたようにただ感情もなく膝を着き静かに内省へと語りかけている迎を見下ろすヴェルゼ。異界を嫌いといい、その存在を滅ぼすために在るように振舞う迎。

(……よく、似た兄弟だ)

向けられた気配に、鬼斬を構え直す。チャリ、と音を立てて一度は鞘に戻した鬼斬をすぐさま引き抜ける体勢に持ってきておく。力ウンター狙いの抜刀術——居合。けれどそれは次の瞬間、憂慮に終わる。

「——違う。俺は、俺には兄弟なんていない」

それはとても小さく、けれど底冷えのするような声だった。

漸く整えた息で、しっかりとした声で、その言葉を発した。だからこそ、狂気の走っているかのように感じた。その声音には嘘偽りなく、厳然とした事実を語る。けれど、戸惑いはあった。混乱と疑問。けれど自分にとっては代わらない現実だとする言葉。

——迎に兄弟はいない。少なくとも、彼にとっては。

「……ああそうだな、お前にとっては兄弟なんていないも同然だった」

対するヴェルゼは肯定した。現状をわかっていた、というように、

迎の否定を——のレジ新の存在の否定を受け入れる。

「お前には見えなかった。いつでも否定してばかり、受け入れよう
ともしなかった——ッ！」

だから、だから——っ！！

淡々としていた様が徐々に熱がこもり、最後には言葉に詰まる。

その様子が酷く切羽詰っているのだと感じさせる。ヴェルゼも冷静
にはなりきれないほどのものがそこにはある。それこそが、二人を
兄弟だと、語っている。

「存在を否定されるのは辛え。胸が張り裂けそうだった」

「……そんな、嘘だ」

迎は信じない。兄弟だというヴェルゼに仇敵を見る目を向ける。

ヴェルゼは語る。敵としながら存在しながら、兄弟だと迎へ畳み
掛ける。

「俺はお前なんて知らない」

「まだ認めないつもりか」

互いに主張を捻じ曲げるつもりも、撤回するつもりもない。真正
面からぶつかり合う。

そのどちらが真実とは誰にも判断ができない。それを知る者はこ
こにはいないのだ。当事者二人が互いに違うことを言っているのな
らば、当事者をもう一人連れてくるしかそれを確かめる術はない。

……両親・姉妹兄弟。——“妹”

けれど、迎はその存在を認めないだろう。兄弟を認めず、兄妹も
認めない。

では親は？——人の世ならば離婚した両親に一人ずつ引き取られ
た結果、兄弟の存在を知らされた者と知らされなかった者。妹の存
在を迎が知らないのならば彼が引き取られたのは父、ヴェルゼは母
の元。妹は離婚後に生れた。……そんな話は人の世にいくらでも転

がつているだろう。しかし、これはそうではない。

“異界”に深く関わった話だ。異界の気配が各所に散らばるか。それとも“核”となったか。

——簡単に済む話ではない。

「まあいいさ、もう意味はない。迎、お前は用済みだ」

先ほどの乱れようとは打って変わり、ヴェルゼは常のニヤけた笑みを浮べて目的行動へと移る。警戒に鬼灯は背後へと足を引き、距離を取った。戦況の変化を読んだのか、周囲で戦っていた者たちも集中をコチラへ向け始める。フィアと戦っていたヤイルも互いに牽制しあいながら、こちらへと遠慮して一旦距離を取った。——戦況は混雑極まりない。

ヴェルゼと鬼灯、迎が中心に。その傍にヤイルとフィアが応戦。他の異界がマリオと多勢に無勢ながら力の均衡を保つ。

けれど、そんな中、ヴェルゼは笑っていた。

「体はもう、いらぬ。——来い、鬼斬」

「——っ！？かは……」

その声音にブワツと総毛立つ。身体の内底から、耐え難い、抗えない想いが沸いてくる。同時に、異界の力が暴れだした。身に掬う、暴力を押さえつけるように、膝を落とした。胸が苦しい。息が荒くなる。狂戦士ジャンキーが無理に出ようとした時よりも激しい衝動。

堪らず、身体が床へと転げまわる。放出できない熱を逃がしたい。痺れるような感覚だ。

「つく……！！」

そんな中、掌に収まっていた鬼斬が身震いする。カタカタ、と鳴るのはまるで歓喜のようだ。手の中で暴れ、押さえつけられることを厭い、——それほどまでにヴェルゼに焦がれる。

飯主の、鬼灯の手を赤に染めて、ヴェルゼの元へと飛んでいく。

「王の名に惹かれるか……っ!」

片腕で身体を起こし、憎々しく鬼灯は毒づいた。傷つけられた腕から血が流れ、体温は下がっていく。頭の方も冷めた。疲弊と貧血で鈍くなった身体に衝動は逆らえない。身体の支配権が戻りつつある。

ベルゼブブ——バアル・ゼブル。

かつては嵐と慈悲の神として尊称を受け“気高き主”と呼ばれていた。にもかかわらず悪魔とされ、罪深き戦者になった。七つの大罪の一角、暴食の^{グラトニー}名も冠す。

ヴェルゼは鬼斬と手にし、嬉しげに告げる。

「さあ、生贄は捧げられた。開くぞ、——扉を」

ひゅん——と切っ先を鬼灯に向け、

「「異界の王」「異界の愛し子」——止めなさい」

「——っ!」

(いつの間に……!?)

背後からの声に、ヴェルゼは鬼斬を一閃させて飛びのくが、それは掠りもしなかった。

その姿は瞬き一つの間に消えている。

「やあ、こんにちは。お父さん登場です」

鬼灯の目の前、蹲る彼女にしゃがみこんで、挨拶をした。

驚き、何もいえない鬼灯を気にすることなく、“お父さん”は手を差し伸べてくる。

言葉を紡ぐ気力もなく、勿論手を伸ばされたところで体を持ち上げるほどの体力もなく、鬼灯はその手をただ見つめた。けれど、“お父さん”は鬼灯の手を掴み、その身体を引き寄せた。

「っ」

(なにを——!?)

身体はあつけなくその腕の内に入る。

性的なものでも、暴力的なものでもない。それはまるで、保護するかのような、接近。

それに、安心した。身体が動かなくなつてさえも解かれずにあつた緊張が緩む。

（知っているような気がする）

既知が安堵をもたらすのか。

……わからない。けれど分らないことに対する不安もない。

鬼灯はこの状況で、何故か親を見つけた子供のような安心感に包まれていた。鬼灯の木がなくなつて、ずっと感じていた寂しさと恐怖が埋まっていく。

「久しぶりー息子ども」

男は言つた。

鬼灯をその胸に抱きとめ、やる気のない声で対峙する二人に手を振る。挑発のようにヒラヒラとされる手。

「そろそろ喧嘩止めたらどうだい？——っと、そのために出てきたんだつた」

にこやかにそう言つて、けれど自身を振り返るようにする。それはコミカルさがあつて、この場の雰囲気にとぐわない。

「僕の家族が迷惑かけまして、皆さん本当にごめんなさい」

男はその場にいる者たちに頭を下げて“困つた顔”“申し訳なさそうな顔”で謝つた。

始終、渋面を作る迎。始終、ニヤニヤ笑いを浮べるヴェルゼ。始終、マイペースに表情豊かな“お父さん”。

「な、にこれ」

叫んだ喉は噎れて、音を紡ぐ。その場の誰もが抱えた疑問だつた。

「君とは前々から話したかつたんだよね。いよっ！息子どもをたぶ

らかした魔性の姫君っ！もてもてだね！」

その声は部屋全体に響くかと思われるほど大きく、明るく、影のないもの。

「——あなたが“異界”？」

その時の鬼灯は既に気付いていた。暖かく、胸に込み上げる気持ち懐かしさ。

この存在は——異界の、親。それは世界を内包する存在。

こことは別の次元の存在。それは正しく、“異界”——“異世界”。世界そのもの丸一つ。

けれど、男は鬼灯の問いかけを無視した。

「妹」と“君”が似てるから。だから、惹かれるんだろうね」

状況さえも忘れて問いかける鬼灯よりも、まったく状況を視界にさえ入れていないこの男は、何を言ってるのか。悪女の如き皮肉の次には“彼らの妹に似ている”などと——。

「……どれだけ失礼なのかしら」

若干体力の戻ってきた鬼灯は憎まれ口を利いた。

けれど、その隣で感謝する。男に接触した辺りから身を裂くような衝動が無くなっている。鬼灯の中にあつた異界の暴走は沈静化しはじめた。親に宥められた子供だ。

「家族喧嘩だよお？人と結婚した僕と、双子の息子に身体の弱い娘の五人家族です！奥さんはねえー随分前に死んだけど、二人は長生きだからね。異界に気に入られて人の身でありながら異界の能力を扱う双子は、人間の体に異界を持つ妹に二つの見解を出した」

一テンポ。二テンポ遅く、最初の問いの答えが返る。返答を気にしていなかった、ただの感想のような疑問。降って沸いたそれを口にしただけであるというのにそんなところだけ律儀だ。

「片や見捨て、片や命をかけて守ろうとする。ヴェルゼは後者で、異界を人の世に呼び寄せればいいって案を出してあげたら、すぐに

呑んだよ」

あつさりとバラス、ヴェルゼの目的。

どこまでが信用できるのかは分らないが、実際に二人は男の命令に大人しく従っている。——父親である事は免れようもなく、子であることも免れない。

“異世界” “世界”——この男から異界は生れる。造られる。

けれど、それとは別に、人でもない彼の血の繋がった子どもがいる。

——迎、ヴェルゼ、妹。“妹”は見たことがない。けれど、少なくともヴェルゼも迎もただの異界ではない。どちらかと言えば人に近い存在。それはつまり、

「どういう、ことだ——」

ヤイルの声が飛ぶ。視線をやれば、戦いなんて、そこにはなかった。

皆が停止するように静止し、攻撃の意志もない。異界はすべて、男の統率下に入った。

「ねえ。始まりはなんだったか——君はもう、知っているでしょう？」

人差し指がコツン、と鬼灯の額に当たった。

思い出す。

「“恋”——そして感情が生まれた？」

あの時、珠洲と鬼灯が己の内面世界で会った時、この男は珠洲に会っている。

人差し指が額に、知識を与えられた。今まで空白だった、“異界”に関する知識。

不自然なほどにまっ白だったそのページは本来ならば鬼灯が真っ先に求めるものだった。

けれど、それにもかかわらず、無意識下で起源を探ることを止めていた。止めさせられていたのかもしれない。

“異界”は“人”と出会い、感情を持ち、“個”を得た。そして

恋をし、会いを知って、子が出来た。現在の始まりはそれだった。

「そう、出会いは運命に変わり、必然は恋を呼んだ。でもさ、それって間違いかな」

純粹な疑問。異界は異界であるが故に答えられない。答えを出すことが出来ない。判断がつかない。そして鬼灯もまた、答えはない。けれどそれは本人にしか出せない唯一の“答え”だ。

「始まりが恋ならば、終わりは——なんだと思う？」

疑問。問いかけ。

男は鬼灯になおも問いかける。人に一番近いからこそ、彼女しかないのだ、と。

「愛」——あなたは、誰が好き？」

今度は鬼灯が問いかけた。異界は目を丸くして驚く。

こんなにも人らしいのに、余りにも存在は人から逸脱している。

だからこそ、悲しい。人に焦がれ、人を真似て、けれどそうして近づいても得たのはニセモノばかりで、だからこそ余計、人から遠くなる。

「異界じぶんが好きさ。そして人も好きになった。でも、それだけじゃ足りない。僕は餓えている。教えてくれ、何が足りない？」

それは答えに覚悟の必要があつた。

全てが沈黙する中で、鬼灯だけが発言を、言動を許されている。だからこそ、違えてはならないのだ。瞳を逸らすことも、偽ることもなく、胸を張って、ただ述べる。

「もう一度、好きになる勇氣」

「失うことを恐れて、失ったことから眼を逸らして、……今のあな

「たはただ、絶望しているだけだわ」

「ねえ、異界。あなたは彼女を愛していたんでしょ」
問いかけに、男は答えた。

「もちろん。愛していた」

「今は？今も愛してるんでしょ？」
問いかけに、男は答えなかった。

「……」
自信なく、困った顔で、眉を寄せ、悲しげな表情を作るだけだった。

「——今も好きで、愛していて。それでも愛は芽生える。愛は一つじゃないから。大切なものは幾つあってもいいから、だから、無理に忘れようとしなくて」

男が答えないから、鬼灯が答えた。そのことに男は泣き笑いを見せた。その顔はやはりヴェルゼに似ていて、やりきれない様子はどこことなく迎に似ていた。

「理想、だね？」

鬼灯は頷いてみせる。

大きく、肯定を返して、その戦いは幕を下ろした。

終幕の真実

いつのまにか、見失っていたのかもしれない。

そこは暖かで優しい場所だから。穏やかで、落ち着いて。——そんな平穏な日々は僕が憧れていたもの。

けれど、違った。

それは夢だ。

いつか遠い日に望むものであつて、少なくとも今じゃない。僕がいるべき場所はここじゃなかった。そこに僕はいない。

本当に望んでいた場所——昔から知っていたじゃないか。昔からいた。誓つたじゃないか。

暗く淀んだ闇の底に這いつくばってもいい。僕は救いたい。

沼から泥を掻き出すような際限ない世界で、それでも僕は諦めないと誓った。望み続けようと約束したんだ。

「っ」

夢から覚める。

同時に痛みが走った。腹部から全身にかけて、身を起こしたために身体を衝撃が突き抜けたのだ。夏梅はそれに低く声を漏らした。

「はやく……行かなきゃ——」

急かすように焦燥を言葉にしても、効果はなかった。

（この程度のこと——！！）

「動け、動けよっ！僕の身体だろっ！」

直ぐに動けなくなるこの弱い身体が恨めしい。早く大人になれば、と命令しても意味はない。けれど大人と子供は身体の出来が違うのだ。どれだけ鍛えたところで、子供の身体が脆いのは変わらない。だからこそ、厳しい訓練に耐え、技術を磨いてきた。なのに、こん

なところで一人寝そべっているわけには行かない。今にも、戦いはあるのだ。

「こんなところで、寝てる場合じゃないんだ……っ！」

「なぜ無理するの」

透き通った声がその部屋に響く。

見渡して、漸く現状が分かった。たった今まで、夏梅は医療ベッドで眠っていたのだ。医務室だろうか、簡素ながら白く清潔を保たれた部屋には小さな机とパイプイスが一つ展開され、そこに彼女は座っていた。

「——っ！なんでって……当たり前だろ」

驚きのままに、反論をする。けれど、鬼灯は自身で問いかけながらも答えには興味がないようだった。第二の質問を繰り返すように述べる。

「痛みは感じるのでしょうか？」

「……普通の奴らには戦わせられない。僕は平気だ」

そう、一般人には戦わせられない。これは、人知を超えた戦いなのだ。“異界”——人の力量を遥かに超えた存在。そんな異界と戦い方も知らないような者を戦わせるわけには行かない。

「人の盾になるためにいて、戦いに集結をもたらす存在として生み出された。物に心も感情もいらぬ。必要なだけだ」

——ここは、僕にとっては大切な場所。

それだけが事実だ。彼らのいる場所を守る。この育った地を守る。そのためには自分がどうなったっていい。

「なら、なぜ戦うの。もう、あの戦いは終わった。事後処理は残っているし、各地で異界が動いているのは否定しない。けど、頭が捕まったの。……時間の問題だわ」

気絶をしている間に、あれは終わったというのか。自分のいない

ままだに、人は反逆者どもと決着をつけたと？

一撃。気配すらも探れず、安易に安堵して、傷を負った。

それだけなら未だしも、戦いの発端となった自分が気絶し、戦わないままにすべては終わってしまった。——果てしのない喪失感に、揺らぐ。

（僕の存在価値は戦うこと、なのに……っ！！）

そのために、夏梅は生きてきた。そのために、博士に拾われた。

彼らの盾となるべく、彼らの敵を討つ為に。

けれど、それさえも叶わなかった。では己の存在価値とは？生きている意味とは？

立ち位置がぐらつく。思考が纏まらない。夏梅は肉体的に痛む腹部とは別に、精神的に痛む脳へと手をやった。

「あなたが本当に物で、心も感情もないのなら、守りたいものなどないでしょう？」

「命令がある」

——命令こそ至上。

夏梅は戦うための兵士。命令をこなす人形。殺戮兵器。そうやって訓練されてきた。そうして生きてきた。だから、この度も変わらない。

（僕は、生きる価値すら、失ったのか）

——命の価値はない。生きる意味もない。

「それ以上だわ。圧倒的強さがあるのならわかるの。でもそうじゃない」

——何が言いたい。

鬼灯に意志だけの瞳を向ける。けれど、敵意にも似た悪意を彼女は微笑みで受け止める。

（……ああ、随分自然な表情になってきたではないか）

美しすぎる、完璧な笑顔ではない。人間的な、温かみのある顔だ。

「勝てない相手に、傷を圧してまで、立ち上がらない足を立ち上がらせてまで向かう戦場は、命令なんかではない。動かなければ、動かないものよ」

「……動けるから動けるんだろう」

皮肉に返す。けれど、彼女は表情を歪めたりはしなかった。

「いいえ、あなたは既に許容値を越えている」

それは事実を事実として伝える声だった。

「機械なら過重労働で強制終了、動作自動解除、回線の遮断までして充電に走る状態」

的確に教えられた自分の状態に夏梅が表情を歪めた。悔しいのだ。そして、無様だと思う。連日任務が続いていたとはいえ、その程度のことで敵に遅れを取ったことが情けない。

「あなたは恩義を、あの人に感じている。けれど、それは利用されてるだけ」

「だからっ！？そうだったら、なんだっていうんだ——！！」

——そんなこと、初めから、

（知ってる）

それでも、あの人に育てられた……。博士が最初から、自分を実験動物として、替えの利く兵士として、育てたのだと知っていた。それでも、あの人拾ってくれなければ塔の昔に無くなっていた命だ。失わなかったのはあの人のおかげで、だから、どんなことがあっても、彼だけは、大切に、守り通す。

「親なんだ。家族なんだ。たった一人の、失いたくない人なんだ——」

「夏梅、あなたは、間違ってるわ」

——間違っている。そう、なのかもしれない。

愚かな選択だという事は、分かっていた。けれど、引き返せない

ほどこに、彼が好きなのだ。“今”の居心地がよいのだ。命の危険と隣り合わせでも、戦いの日々が続いても、待っていてくれる人がいる。一緒に歩んできた時がある。「おかえり」と言ってくれる人たちが、ここにはいる。——この温かみを失いたくなくて、だから自分が犠牲になってもいい。自分だけ助かって、意味はないのだから。

（せめて、この人たちが生きてさえいれば、自分が居なくなっても……）

「あなたを見てくれている人も、いっぱい、いるでしょう？」

促されて、ベッドの下を見た。陰に隠れて見えていなかった人物が小さく丸まって眠り込んでいる。

「り、ん」

——心配してくれる人がいるという。

戦いしか知らない夏梅のために、涙を流してくれる人がいるという。

任務で外に借り出される事はあっても、基本的に戦闘タイプじゃないリンには夏梅の気を失った後の戦いは初めての経験だった。戸惑いと恐れで一杯一杯だったろう。自分のみを守ることさえ、大変な幼子が、けれど、夏梅のために疲れた身体を引き摺って看病し、見ていてくれたというのだ。涙の跡が痛々しい。

それに、よく見れば鬼灯——いや、珠洲も。

「珠洲、泣かないでよ……。お姉さんだろ？」

ちやかすようにして乱暴に頭の上に手を乗せ、撫でた。

「夏梅さん——よかったです、本当によかったです」

涙声で告げて、少女は夏梅に縋りつくように身を寄せた。首元に埋まる頭を見て、思う。

——鬼灯は異界で、本来なら敵だ。

けれど、彼女は、“人”だ。感情を持ち、人の痛みに共感できる。

人のために涙を流すことが出来る。彼女は異界で、けれど、どんな人よりもよっぽど人間らしい。」

「なあ、何で風穴開けられて生きてんだ？」

男は言った。

「確かに死んだと思っただけ？俺」

軽い口調で、なんでもないことのように話す、金髪の男。これが、敵のトップ——ヴェルゼであるらしい。郵便屋として組織内部に己の身体を潜り込ませ、迎の身体に精神を寄生させていた。そして、迎の兄弟。闖入者により、拘束された後、組織に引き渡された。現在、術者の監視つきで異界の力を封じる結界を張った牢に閉じ込められている。

（迎と同じ顔。でも、正反対だ）

「でもなーんてか生きちゃってんのね。——人間ってそんなに強い生きものだっけ？もっと、脆かった気がするけど」

「さあ。生きてるんだからしかたないだろう？」

夏梅は人間だ。けれど、普通の人間ではない。子供という脆い部分もあるが、基本的にはもっと頑丈な存在だ。普通の人間の致命傷の一つでは夏梅を殺せない。気を失いさえしなければ、あの場で戦闘の補助につけるぐらいはできた。術式は行使者の意志と血に反応する。遠距離攻撃や補助術式、守護の術式を身につけている夏梅は動きさえしなければ十分に戦闘に参加できたのだ。だからこそ、余計に悔やまれるのだが。

——実際に死んだ者は数多い。

戦う力を持たない研究者だけでなく、元々が少ない異界の所有者もさらに減った。

（戦況を有利にすることは出来た。それだけの実力が、僕にはある）

——悔しい。憎い。

けれど、その想いを押さえ込み、この男と対面している。

「聞かれたって僕にもわからないね。僕自身、完全に死んだと感じましたし」

——そう、あれは錯覚なんかじゃない。

身体が動かなくなつて血が止まる感覚。次第に冷えていく身体。自身さえも朧な意識を落としていった。頭が何も考えられなくなつて、ぼんやりとしたまま名残惜しさを感じた。

生きること、世界に思いを馳せて、今までのことを思い出した。くだらなくて思い出そうともしなかった些事から、思い出したくもなかった出来事も、楽しかったことや恥ずかしかったこと、悲しいこともつらいことも忘れていたことも全部、今に至まで。

どこから始まったのだろう、どうして決まってしまったのだろう、どこで間違つたのだろう、と繰り返した。

「それに、僕は脆弱な人間とは、違います」

認めるのが怖かった、自分が、化け物だということ。

人よりも頑丈な身体は身につけた技術だ。けれど、それは人という枠から抜け出すことにも似ていて、……異界という存在からして人とは違うものとはまた別の、人としての“異端”——人外となつてしまったのだ。

繰り返された実験。それは大好きな、たった一人の家族から受けた（僕はそれを、受け入れた。後悔は、してない）

だからこそ、今ここに入れるのだ。今生きていられるのだ。皆に会えたのだ。

「そ。どうでもいいけどさ、ガキなんて」

「ならなぜあなたはそんな顔をしているの？」

鬼灯の声が部屋に響く。瞬間、ゾワツと背筋の寒くなる殺気を感じ、入ってきた鬼灯に向けていた視線をヴェルゼに向けた。ヴェルゼは強い視線を鬼灯に投げかけ、けれど彼女は凜とした姿を変えず、威圧する。脅しではない、けれど誤魔化しを許さない。

——鬼灯はヴェルゼに本心を問いかけていた。

「嬉しそうに、みえるわ。——被害が少なくて、夏梅が死ななくて、よかったという風に」

（ヴェルゼは妹を救いたいと願い、異界を利用して）

彼の願いは些細だ。けれど、大きくことを動かす。犠牲も多く出る。「大量殺人を目的としているわけではないが、人にかける情けもない」

色のない声。そこには何の感情もない。先ほどまでの軽薄さはどこかに消えうせ、敵意ばかりが、冷えた感情が浮かび上がっている。（失敗。いや、目的が潰えたから、かしら）

「——何故、私だったの？そして何故、夏梅だった？」

——始まりは何だった？

そう、鬼灯に問いかけたあの男。そして、それと酷く似通う鬼灯の“何故”。

ヴェルゼは二人を重ねて見た。よく、似ているのだ、鬼灯は。

「……そっちのガキはただ、姫さんを傷つけるのに相応しい“近い者”だったから、だ」

「嘘ね。郵便屋さんは夏梅が見かけ通りの子供でないことを知っていた。あなたもでしょう？だから、生き残る可能背が高い夏梅を、利用したんだわ」

その子供がただのガキではないことは知っていた。けれど、それはいくらなんでも買いかぶりというもんだぜ、姫さん」

——ああ、この何でも見通してますって眼があのおやじおやじと男と同じで、胸糞おし悪い。

「もう一つの方は？」

けれど、鬼灯は尋ねた。己であつた意味、その選ばれた理由を。

「……世界いかいに通じ、受け継ぎし者——世界樹ユグドラシル。それがあんたの正体だからだ、鬼灯」

——鬼灯は、鬼灯の木の子兵なんかじゃない。そんな認識は端から間違っている。

「——私が、鬼灯の木の子供じゃないって、言ってたわね。本体だつて。けれどそれは……」

「突拍子もない話だ。だが、姫さんはもう、分かっているんじゃないのか、本当は」

——君はもう、知っているでしょう？

親父の声が耳から離れない。

鬼灯は知っているはずだ。だからこそ、繰り返した。彼女は聡い。だからこそ、解っているはずだ。知識が与えられ、自分がどういう立場なのか。

「——鬼灯」

隠し事はするな、と立会人であり監査官である夏梅が言葉なく厳命する。

フウッ——小さな吐息。

心の整理と共に知識を解放する。言葉は紡ぐ、鬼灯の只管溜めて来た世界を。

「歪の始まりは一つの出会いからだった」

一人の孤独な女をその存在が見つけたことに始まる――。

『ねえ、そんなところで何してるの?』

彼女は問いかけた。

彼女の病室の向こう、空の風景に混じっている青年。後姿しかわからないが、いつの間にか映りこんでいた。……ここ、10階なのに。

『ねえ、聞いてる? ていうか聞えてます、君』

『……それは私のことか?』

青年は振り返る。その容姿に彼女は驚いたが、けれどカラカラと笑って見せた。

『そうよ。私と貴方以外ここにいないじゃない』

『我が見えるのか。声も聞こえる?』

青年は“不思議”だった。地上から随分離れた10階の窓に平然と顔を晒している青年は地に足がついていないことは確実だ。その言葉でさえも、まるで自分が幽霊だというような口ぶりだ。けれども彼女にとって“不思議”は身近にあった。彼女の仕事は何と言っても、“不思議”を体現したようなものだ。――術士。人外の力を扱う職種。

『あたりまえじゃない。見えなくって話せないなら誰も話しかけないわ』

――ソレは生物とは言えなかった。命を持ち意志を持ち、けれども人でも動植物でもない、生命体。そんな二人は出会った。

『ねえ、名前ないの?――なら、私がつけてもいい?』

彼女は笑った。

とても幸せそうに、世界中のすべての幸福を体験したというように青年へ笑いかけるのだ。青年は無感情から徐々に表情が出てくる。青年は彼女に色々なことを教えられた。彼女に会って、初めて笑顔を浮べることができたのだ。

『あなたの名前は……』

『

運命に導かれるようにして愛し合った。すると子供が出来る。

「“異界”と人間の女が愛し合い、ヴェルゼと迎が生れた。でも、異界の血を引いた二人は普通の人間とはいえなかった」

三人になり四人になり五人になり、——家族として成り立つことはなかった。

二人と一人と二人。

「異界と女。迎。ヴェルゼと“妹”——そこにあった家族はそんな塊でしかなかった」

ソレは家族も子供も定義が曖昧で父の実感もなく、母も母足り得なかった。

だから子供は孤独だった。それだけに留まらず歪みは子供を侵食する。

「迎くんはね、信じられなかったの。自分の生い立ちが、自分が人外だという事が。……だから、いつしか見えなくなった。より人外ばけものである兄妹を否定した」

ソレのソレが故に妹は眠りにつき、弟はソレを嫌った。

子供は愛を探した。五人は二人と三人で、三人はそれぞれ独りぼっちだった。

「そして子供と弟はいつしか敵になった」

——それが二人のモノガタリ。

「……身体の弱い妹さんは人の世には適合しなかった。だから、眠りについた。ヴェルゼは彼女を眠りから覚ますために異界をこの場に呼び寄せようとした。——異界でありながら人の身体を持つ彼女は純粋な異界には連れて行けない、から」

「——ッ！？それって……」

「私と同じ。だから彼らは似てるって言うてたのよ」

そしてヴェルゼの言うとおり、鬼灯が世界樹の異界ならば“異界”を引き寄せる道具となる。

（ヴェルゼは“異界”に彼女を救ってほしかった。けれど）

実際、“異界”は鬼灯に誘き出された。けれど、彼はヴェルゼに協力するでも自らの娘を救うでもなく、——鬼灯の保護だけをした。鬼灯を犠牲にしようとしたヴェルゼは彼に異界を制御されて抵抗もできずに拘束された。

「でもなんで“異界”は鬼灯を保護したんだ？」

夏梅の質問には答えられない。空白の知識は奪った本人が返した。けれど、知識にないものは答えられない。

——額を指で押すのは彼の唯一の癖だ。

けれど、それはつまり弱点に触ることでもある。記憶を操り、映像を奪って、与える。彼の、彼だけの特権行為。……異界を超えた能力。

「——妻だから、だろ」

「は——っ」

夏梅は否定しようとしたが、言葉は出なかった。

否定する材料が何一つないことに気付いた。考えてみる。

（ありえない話じゃない——）

時系列に問題はない。問題があるのはその関係性だ。

人の、術士だった者が異界となる？——そしてまた、人の身体に宿った？

（そんな馬鹿な話、あるはずがない……）

「……わからない。その知識は私にはない。知っているのはあの人だけ」

「母さんは術士だった。だからこそ、死の危険は常にあり、親父と会った時も死の病に冒されていた——母さんを、親父は救った」

方法は知らない、と最後に紡ぎ、以後ヴェルゼは沈黙を保った。

眠りの時、目覚める時

「妹さんを、目覚めさせたいのよね——？」

ヴェルゼに確認を取った。

それは最終のものだ。それ以上は、何もない。これで終わりなのだ。

ヴェルゼは頷く。

「なら、いいの。やるわ」

それだけで済むのなら、……それでいい。

「場所を、教えて」

監視の術士を気絶させ、鬼斬で拘束を切り離れた。そして異界で、“郵便屋”の異界で空間と空間を繋ぐ。そして、鬼灯はその場所へと足を踏み込んだ。

「——また君は、そんなことを言い出すんだね」

男はいつの間にか背後にくつつくようにして歩いている。けれど鬼灯は煌びやかで暗く暗鬱としたその場所へと足を進めた。空間は歪みが至る所にある。方々に反射する光が眩しいのに重々しい雰囲気を取り囲み、幻想的な色合いに影を落とす。足跡が色をつけるように残っていく。足下が崩れるように色は罅割れ、他の色に混ざっていく。神秘的で、神懸りので、……けれど、どうしても胸が締め付けられる。

「どうするの？君一人で。融合でもする気？」

「手出しする気がないなら、気が散るからあっちに行つてなさい」

踏み出すのさえとても不安定なその空間の中央に据えられた豪華な椅子。大きく、頑丈な作りのそれに一人眠る小さな少女。——それはとても寂しい光景だった。

彼女の事だけを気にしたいのにそうはさせてくれない存在がいる。

「他の異界を取り込んだように、自分が身体的所有権を受け渡せばいい話だとも？」

「……それ以外、手がないのなら」

静かに、木霊する。

「——理想だね」

「そう、理想よ」

「でも、人とは理想を見続けるものよ」

——人は、そうでないと進めないから。

希望がなければ人は人生を歩むことが出来ない。不安で、直ぐに崩れてしまいそんな自信を抱えているから。脆く、弱い存在だからこそ、進むために人は夢を見続ける。

「だから、彼女も生きる“夢”を見ている」

生きている夢を。生きるための夢を。——彼女は、そしてヴェルゼはそれを願い続けた。

——眠り続けるのは個人の意思で、他人の意志。

でも、それももう終わりだ。

「肉体を留めておくのは、難しい。だからといって、死人のそれを用意しても意味はない。——生きた人の身体を用意する必要がある」
それも、異界に耐性のある身体でなくてはいけない。

鬼灯はそんな意味でも都合が良かった。ヴェルゼにとって、異界を呼び寄せる撒餌であり、彼女への供物でもあった。

「……君は、昔から人に愛されていたね」
ぽつり、男が言葉を漏らす。

「そんな記憶はないわ。私はいつも、」
（一人きりだった）

けれど、いつの間にか、変わっていたのかもしれない。

「……そうね、努力のおかげかしら」

一人で長い時を過ごした。ずっと、人が訪れるのを待っていただけの鬼灯の木。

けれど、加奈がやってきて、彼女のために珠洲がやってきた。

迎がずっと傍にいた。夏梅は分け隔てなく扱ってくれたし、リンは懐いてくれた。ヤイルとも気があった。——フィアやマリネ、郵便屋だって、偽りの関係だったが過ごした時は同じだった。嘘偽りなく、時間を共有してきた。

いつの間にか、自分の周りには色んな人がいて、守りたいと思う存在が出来た。壊したくないと思う空間が出来た。

「——けれど、それをすべて、自分から捨てるんでしょう？」

……そうだ。今やろうとしていることはそういうものだ。そして、身体を奪われた珠洲たちの尊厳さえも踏みにじろつとする行為だ。

（けれど——）

「彼女はもう他人じゃないの。知らないフリなんて出来ない」

「——僕に、もう一度愛せと言ったのに、その機会を失くしてしまうつもりなのかい？」

それが彼の本音なのだと思う。正直な心。

「……彼らを愛して。迎くんを、ヴェルゼを、彼女を、異界を、この世界を、全てを——」

「我におまえを会いさせてはくれないのか——？」

自我意識のなかった“昔”に戻った彼の口調に、彼女は微笑んだ。立ちどまった彼はどうしようもなく情けない、歪んだ笑みを浮かべている。眉を下げて涙を溜めながらも微笑むしかない彼女を、彼女は「しゃきつとしなさい！」

叱った。

「あなたは、もう昔と同じじゃない。自分というものを知った。愛することも知った」

「なら、しゃんとして、一人前に、胸張っていなさいよ。子供たちに、尊敬されるように。子供たちに、愛されるように」

その高い頭に手を伸ばして、小さい子にいい子いい子、とするように撫でた。伸ばされる腕を拒絶することもなく、受け入れる。

——温かい。愛に溢れた、陽の優しさ。

「きつと、また会えるから」

寿命のない彼。寿命のある人間。なら、また会える。

覚えていなくても、また最初から始めればいいのだ。また出会って、また話して、……好きになるかは分からなくても、傍にいる事は約束できる。

——この愛しさは、変わらないはずだから。

「見つけてよ。また、絶対。——一人ぼっちの私を見つけたのは、あなたなんだから」

もう、寂しい想いはしたくないから。一人でいるのは悲しいから。

——だから、彼女にも目覚めて欲しい。

夢は楽しく、苦しみはない。でも、それは一人ぼっちだ。辛く、悲しいことがあっても、一人じゃなければ乗り越えて行けるはずだから。こんな場所に一人いるのは、寂しい。淋しい。

「じゃあ、また——」

さよならは言わない。

迎くんたちに挨拶できなかったのは、残念だけれど、けれど、……
……最後じゃないから。

——また会う日まで。

「……どこ——？」

少女は目覚める。

キラキラの空間に、少女はいた。幻想的で美しい。けれどどこかちよつと悲しい場所だ。

「おはよう」

いつのまにか目の前にいた男は少女に目覚めの挨拶をした。

「お父さん——！——！」

少女は抱きつく。無邪気に。

だからこそ、男の胸はきつく、軋んだ。

「おはよう！」

男は自らの子供を抱きしめた。少女は優しく、元気よく挨拶をする。

「ああ、おはよう……」

男は繰り返す。けれど、

（また、また——次会うまで。また——）

再び会う約束を、胸の中で誓った。繰り返し、忘れないようにと、ずっと、ずっと。

頬から涙が零れ落ちることも気にせず、少女の背に回した腕に力を込めて。

「兄さんたちのところに、行くつか」

「うん！」

「……友だちも、たくさんできるよ」

男は少女と手を繋ぎ、歩き出す。壊れ始めた空間を後にして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4217m/>

鬼灯の実

2011年7月6日16時54分発行